

# 浅野誠人生・生き方シリーズ I

## 人生後半期の

## 人生創造

2013年8月発行

2003年からホームページ・ブログなどに、「人生後半期の人生創造」にかかわることを随時書いてきた。しかし、ホームページ・ブログの閉鎖・改編などに伴い、閲覧できない記事が増えてきた。そこで、それらを編集して、このホームページで閲覧できるようにした。

振り返れば、1990年代後半から生き方・人生について、いろいろと思考をめぐらすだけでなく、自分自身の生き方としてもいろいろと試みてきた。また、多様な方々とめぐり合う中で、多様で豊かな生き方・人生をみてきた。

こんな小文たちを読者の皆さんに読んでいただくのを幸せに感じるこの頃だ。

まだ、今後も、続きをブログなどに書いていこうから、読者の皆さんのコメントを期待したい。

なお、各節は、記事公開順に編集しており、各記事タイトルの後ろに初出の年月日を記入しておいた。

## 目次

### 1. 人生前半期 6

40代女性の生き方を聞いて

40歳前後の人々の人生創造

近藤郁夫さんが示した「中年期をどう生きるか」

「人生おこし」に関心をもつ若者が読む 私の新刊本への反応

ライフコース前半期の変化と人生創造・・・・・・・・宮本本11

### 2. 人生後半期 10

人生後半期の創造的生き方とつながり

人生後半期をどう創造するか

人生後半期向け書籍のいろいろ ビジネスマン戦士向け

「人生後半期の人生創造」の自主集会で出された興味深い多様なメモ

人生後半期の人生創造のテーマいくつか

私の今後数年間はどのようなのでしょうか？

金と時間にとまどう団塊世代から、人生創造する団塊世代へ 感想「第一回団塊フェスティバル」

第二回「人生ユンタク」 「人生後半期の人生設計」の報告

人生後半期スタートのころ いかに切り換えられるか

日本生活指導学会での私の提案 「人生後半期の人生創造」1

「人生後半期の人生創造」2 働きたい60代 悩む50歳

「人生後半期の人生創造」3 学習・学校と仕事の並行

「人生後半期の人生創造」4 大量の新しい形の移住

「人生後半期の人生創造」5 先進国人間の集団的生活習慣病

「人生後半期の人生創造」6 地域と家族の改革的創造へ

「人生後半期の人生創造」7 生き方創造と生活指導学会

「人生後半期の人生創造」8 私個人

ライフコースの後半期 生涯学習 年齢規範・・・・宮本本12

人生後半期の年齢区分

### 3. 高齢者・老い 32

アッチェリー、バルシュ「ジェロントロジー ～加齢の価値と社会の力学～」(きんざい2005年)を読む

老いの自覚 「身の引き方」

「アンチ・エイジング」という言葉にひっかかる

老いの迎え方

老いへの関心 多様な60代男性・・・「老いのかたち」を読む1

「新しい年齢イメージ」・・・「老いのかたち」を読む2

自然に老いる・・・「老いのかたち」を読む3

老いのイメージ・・・「老いのかたち」を読む4

祖父母と孫・・・「老いのかたち」を読む5

老人と周囲の人間との関係・・・「老いのかたち」を読む6

人付き合いが下手な日本人男性老人・・・「老いのかたち」を読む7

進歩・発達とは異なる意味を見出す・・・「老いのかたち」を読む8

男女共学風カップル・・・「老いのかたち」を読む9

段差のつまずき 老人会加入年齢

「長寿化」への疑問・・・宮本本7

「前期高齢期」「向老期」・・・宮本本13

「新しい高齢期像」 逆算式年齢の私の提案・・・宮本本31

高齢期の暮らし方 男女差・・・宮本本32

高齢者は誰と住み、どういう介護を受けるか・・・宮本本33

高齢期の経済生活・・・宮本本34

高齢者が働く「生涯現役社会」・・・宮本本35

仕掛ける看護 もう一肌脱ぐ高齢者像・・・超高齢未来本2

老人像 社会的弱者と元気で『老いない』活動型・・・生活本10

西垣千春「老後の生活破綻―身近に潜むリスクと解決策」を読む

老年的超越としての、ボケ＝恍惚的境地 嗟峨座晴夫さんの提起

## 4. 癒し・スピリチュアリティ

58

「癒し」は、個人の内面にだけ焦点化しないように

魂・癒しと政治・科学

〈いやし会〉にて思ったこと

聖地と王朝支配

フィンドホーンワークショップ

スピリチュアリティと科学

大林太良「日本の神話」（大月書店1976年）に触発されて

身体と自然、八光舎主との会話

熊野の神々

初詣はヤハラヅカサと濱川御嶽  
 我が家の火の神—ヒヌカン  
 オーストラリアジャズと韓国シャーマンの音楽共振  
 今年の私のエンジェルカード Spontaneity  
 私は感性派?! . . . . . 久高での気づき1  
 エンジェルカード Power . . . . . 久高での気づき2  
 すばらしいドアがどんどん開いてくる夢 . . . . . 久高での気づき3  
 身体性 感情性豊かなワークショップ . . . . . 久高での気づき4  
 みぞおちあたりのチャクラが開いた感じ . . . . . 久高での気づき5  
 個人・人間関係と癒し . . . . . 久高での気づき6  
 聖地の消費と継承創造 コミュニティと個人 . . . . 久高での気づき7  
 「前世は有名人だった」「ソウルメイトは有名人だ」という人  
 「ユタとスピリチュアルケア」を読む1  
 スピリチュアルケア 自然との和解 時間との和解 . . ユタ本3  
 ケアする人自身がケアされる . . . . . ユタ本4

**5. 死** 85

『誇りを持ってわきへどけ』 死にかかわるケストナーの言葉  
 死 あるがままを受け入れる . . . . . 米沢慧「自然死への道」7  
 葬送の変化 . . . . . 宮本本36  
 『別様な自己』と「自己同一性」 「死は生の一部」 . . . 生活本11  
 帯津良一さんの壮大で勇ましい死生観

**6. 追悼** 91

近藤郁夫さん逝く  
 城丸章夫さんとの思い出  
 平良勉さんの思い出  
 愛知の教育での、「当たり前」という異世界の創造——角岡正卿  
 坂本光男さんの追悼 . . . 追悼の辞を書くことが多くなった

**7. 人生創造** 97

「人生創造」ワークショップ  
 単行本『〈生き方〉を創る教育』の執筆  
 人生再創造を考え始める人

- アンソニー・ギデンズ『モダニティと自己アイデンティティ』を読む  
競争・格差社会での「人生選択」から「人生創造」への転換を  
名古屋管理職ユニオンの方々との「人生創造話」  
第三回「人生ユンタク」 「仕事起こし・人生起こし」の報告  
生活・生き方・人生は研究対象か 生活指導学会討論にかかわって  
身近なことから歴史を発見する「〇〇さんの人生」ワークショップ  
生き方・人生——ブログ記事の振り返り・再発見  
宮本みち子編著「人口減少社会のライフスタイルを読む1  
「ライフコースの非定型化（脱標準化）」なのか・・・宮本本8  
工業化時代のライフコース≠ストレーターコース?・・・宮本本9  
「ライフコースの個人化」と人生創造・・・宮本本10  
ライフスタイルの主体的な構築・・・宮本本30  
生き方の修正か構造的転換か・・・宮本本41最終回  
新たな年齢区分・・・「超高齢未来」を読む1  
「生活モデルの揺らぎと生涯像の主題化」と人生創造・・・生活本7  
ベック 「第二の近代」「個人化」「自分自身の人生」  
「「する」ではなく「いる」と「なる」 上野圭一・辻信一「スローメディシン」の示唆

# 1. 人生前半期

## 40代女性の生き方を聞いて (2004年8月23日)

先日、浅野恵美子の卒業生の40代女性の生き方を聞く機会があった。職業、子育て、介護など人生の多様な面で、じつに多様である。このところ、50代男性教師の生き方の話をめぐって論議をしているのだが、それと比して対照的でさえある。50代男性教師の生き方をめぐる討論のなかで、私は次のような論点を提起したが、それらをめぐっても、「成功」しているとみられる50代男性教師と40代女性とは対照的でさえある。

- 1) ジェンダー的視点が必要なこと。家父長的要素がないか。男中心、そして年長者が年少者を保護監督するといったニュアンスが含まれていないか。
- 2) 「強くなれ」というメッセージ、「頑張れ」というメッセージが前面にでて、「弱さ」についての視野が薄くないか。
- 3) 職業にしても、人生目標にしても、人間関係にしても、「ひとすじ」に生きることが前面にでて、そうでない「生き方」を否定的にうけとめていないか
- 4) 仕事-退職後、仕事-余暇、といった二分論に陥っていないか
- 5) 人びとを「ぐいぐいひっぱっていく」リーダーイメージが前面にでて、「異質発見・異議申し立て」リーダーイメージが希薄ではないか
- 6) ここ数十年おおってきた「企業社会型生き方」とそれを促進してきた「学校」のありよう（トコロテンコース型進路指導、生き方指導）をどう変えていくか、という課題意識がみられるのか

1960年代型生き方が企業などの勤め先だけでなく、家族も学校もおおっているみられるが、そうでない生き方が女性を中心に多様に存在しており、そこに創造的な生き方がみられることを強調しておきたいものだ。

## 40歳前後の人々の人生創造 (2004年11月30日)

我が家に訪問・滞在する方々には、20代の若い層と50代以上の中高年層が多い。若い層は、学生たちを中心として、これからの人生創造を考えている人々で、中高年層は、先日滞在した平均年齢80歳の私の親族は別にして、退職した人々ないしは職場でリーダーシップを発揮しつつも、「次の人生」を考えている方々である。

ところが、その間の40歳前後の方々が少ない。おそらく人生上、大変充実した日々をおくっておられ、「のんびりした」我が家を訪問する条件が少ないのだろうか。あるいは忙しさに追われて時間的「ゆとり」に恵まれないのであろうか。

だが、この充実した40歳前後こそ、人生の半ばであり、人生後半期のスタート地点にある。50代になると

「次の人生」をどうするかを考える必要にいやおうなしに迫られるが、40歳ころはそうした時期ではない、ということになっている。だが、そう言っているのだろうか。

これまでの人生の区切り方は、被雇用者に限っていえば、60歳前後まで働きつづけ、その後は「余生」ということになってきた。といっても、このところあいつぐリストラのなかでそうとはいっておられない状況、あるいは長生きのなかで「余生」にしては長すぎる期間のなかで、このとらえ方の見直しが必要になってきた。終身雇用の崩壊の進行のなかで、職業人生を、30～40年間一つの勤務先という「標準」的見方ではなく、たとえば「30年と10年」という二つに分けて考えざるをえない人は多い。それに該当する人は、現在の50～60歳代に多いだろう。そして、今進行している事態は、たとえば「25年と15年と5年」というように、いくつも区切られる事態である。

こうした事態を、定年制度やリストラなどの結果としての受けとめるのではなく、自分から区切っていく生き方もあろう。私の場合は、3つの勤務先の総計31年で一段落させて、今、被雇用者ではない25年の人生を踏み出した（25年は私の皮算用である）。

こうした発想の必要性に、現在の40歳以下の方々はいやおうなしに遭遇せざるをえないのではないかと私は思う。このような私の見方はいかがであろうか。

## 近藤郁夫さんが示した「中年期をどう生きるか」 (2008年11月3日)

9月22日に逝去された近藤郁夫さんへの追悼文を日本生活指導学会の会員通信に書くために、改めてかれの論考『中年期をどう生きるか』（『生活指導研究』No.13、1996年）を読んでみた。

そのなかで、彼が愛した鈴鹿山脈御池岳にかかわる三冊の「私家本」をもとに、精神神経科医の著書を参照しつつ、「中年期の世界」を、次のような項目をたてて、彼は語る。

「喪失」を受け入れる  
「深み」への旅  
グラデーションを読む  
何かあとに残したい  
自己の内なる声に耳を傾ける  
自然の一員としての自己の自覚  
趣味の中での自己実現  
四季の彩りに生きる  
歩きながら考える  
花や自然と語る  
専門や商売から自由な人間関係の再構築

12年前の論考である。彼と私はほぼ同世代であり、当時、彼は40代後半だ。

近藤さんのこのような提起は、私にも強いインパクトを与えた。しかし、当時の私は、彼の提起に共感を覚えつつも、繁忙のピークにあり、彼のように月2回登山をして、中年の「生き方」を模索創造するというのは、うらやましい限りであった。そして、彼の提起することの深みを体感的につかむことはできなかった。

しかし、その後の私の「人生」は、かれが提案したことこそが必要なのだということがわかっていく「歴史」でもあった。

そして、中年を終えてようやく今、彼の提案に即して生きられるようになりはじめたと実感している。そして、彼が提起したことに強い示唆を受けつつ、この問題についての提案と研究を進めてきたわけだが、今ようやく少しずつ提案できるようになってきたのかもしれない。『沖縄田舎暮らし』本は、私なりの回答になっているかもしれない。

## 「人生おこし」に関心をもつ若者が読む 私の新刊本への反応 (2011年10月2日)

私の新刊「沖縄おこし・人生おこしの教育」への反応・感想などを紹介していこう。

まず、この本を知った若者たちが、とくに「人生おこし」に関心をもって読む、ということについて。不覚にも、私は、このことをそれほど想定していなかった。本のタイトルからいっても、内容からいっても、若者が関心をもつのは、当たり前なことだが、もっぱら大人の読者を想定してばかりいた。

ある予備校教師が、本の内容を紹介したら、生徒がすごく関心をもったという。ある大人が読んでいたら、息子も、自己の進路選択にかかわって関心をもつが、親が読み終わるまで待てないので、書店に買いに行ったという。受験や進路を考える若者が、関心をもつようだ。

ストレーター型で大学に進学してきた学生の姿を、本書でかなり書いたが、その変化が、近年の沖縄学生にも表れていることを指摘した。それにかかわって、沖縄県外から沖縄の大学に入学してきた学生には、その傾向がすでに1980年代から見られることを指摘して下さった大学教師がおられる。その通りだと思う。私も深くかかわった、1970年代末から80年代初めにかけての琉球大学教育学部での教育改革は、こうした学生への対応をどうするか、とすることに大きな焦点が当てられた。

こうした取り組みがおこなわれてきたにもかかわらず、沖縄の教育界、とくに受験指導を中心的になる受験高校の問題を指摘する声も届いてきた。これは次回紹介することにする。

## ライフコース前半期の変化と人生創造 宮本本11 (2012年1月3日)

※ 宮本本については、第7節で紹介するので、参照されたい。



ライフコース前半期について、宮本さんは次のように書いている。

「消費社会の拡大に伴い、子どもが消費市場に参入する時期はずっと早くなっている。金銭との関係、性体験、商業市場との接触に関して、大人と子どもの境界はなくなりつつある。むしろ、情報機器を操る力は子どもたちの方が勝るようになる。このように、子ども期と青年期の境界、青年期と成人期の境界のどちらもあいまいになり、子ども期、青年期、成人期の区分を、単一の尺度で測ることは難しくなっている。特に結婚制度が流動化し、「結婚」や「家族形成」が必ずしも規範的な出来事とはみなされなくなっているため、未婚者は半人前、既婚者は一人前と区別して、ライフコースのステージを分けることができにくい状況になっている。

このような理由から、「標準的なライフコース」の設定は難しくなっているのである。」P82

この記述のあと、ライフコース後半期が描かれるのだが、私がこの10年間書いてきた「人生の後半期」という区切り方と共通なものを感じる。

ここにあるように、従来の「境界」は、社会的にはっきりしなくなりつつある。ではそれは、個人個人によって異なるというべきなのか。そうでもなさそうだ。個人においても境界は不鮮明であり、いつ「成人」になったのかを確定するのは難しい。比較的容易に見える収入面での区切りでさえ、不安定就業の拡大のなかで難しい。区切りになる社会的行事でさえ、個人的に営まれる色彩が濃くなっている。産育行事が社会的に行われる時代は、もう随分以前の話になっている。

だから、「標準的なライフコース」の設定は難しくなっている」と書かれている通りである。だが、「ライフコース」は、事実として存在する。そのライフコースを、当事者自身が、彼／彼女とつながる人々との関係の中で、どのように選択創造していくのか、あるいはまたコースにかかわる意思の決断・表明を行うのか、といった課題は依然として残る、というか、それを積極的に行うようなあり方を追求したい。それを私は「人生創造」という言葉で表現してきた。

## 2. 人生後半期

### 人生後半期の創造的生き方とつながり (2003年9月18日)

聖隷クリストファー大学に勤務する友人に誘われて、同大学ならびに、近接地域にある多様な福祉施設を恵美子とともに訪問した。教会・病院・障害者施設・高齢者施設・高等学校などなど、実に多様な施設がいっぱいあり、驚いてしまった。

そのなかで、今私が関心をもつ高齢者施設での感想。特別養護老人ホーム・軽費老人ホーム（ケアハウス）・有料老人ホームなど、これも実に多様にある。そこで、人生後半期の人々が、実に生き生きと前向きに創造的に生きておられる。

案内して下さった方の一人は、ケアハウスの居住者であり、聖隷クリストファー大学の現役2年生で70才の方である。外側にいると、ともすると「施設に収容」されているという感覚でみつめがちであるが、決してそうではない。施設の内外で多様な人間関係を創造的につくっておられる。

この特別養護施設は、日本で一番最初の施設であり、そこで働く人たちは、つねに創造的に展開していくという「気概」をお持ちであり、地域社会の多様な人間関係を創造していくという視野のなかで多目的な「施設」を創造していくという展望をもっておられる。恵美子と私が、沖縄で創造しようとしているものに示唆的である。

人生後半期をいかに創造的に、かつ多様なつながりのなかで展開していくか。人生後半期は下り坂ではなく、最後まで登っていくものだ、ということが話題になったが、私は「下り坂」と同時に、「登っていく」という表現には違和感があり、多様に「広がっていく」「つながりあっていく」といういい方がいい方が好きだ。いずれにしても、ここでであった居住者・職員の方々が創造的に生きておられるということが印象的であった。

### 人生後半期をどう創造するか (2003年11月19日)

この夏の日本生活指導学会でワークショップ「人生創造を考える」をもったこともあるが、今の私の関心事の一つは、人生後半期（または、折り返し以降の人生、または人生の午後）の創造である。このことは私個人の課題でもありつつ、少々重点的に追求してみたいことであるので、今、いろいろと「予習中」である。

そんなこともあって、エリクソン「ライフサイクル、その完結」「老年期」を読んでいる。かれらの研究は、アメリカが「繁栄」へと向かう時代をになってきた人々、とくに文化資本の高い人々が主な対象となっている。日本でいえば、現在、70～80才代の高度成長を中心的になってきた人々に相当しよう。そうした人々が老年期（イメージとしては、70歳代以上）をどう迎えているか、ということである。いろいろと示唆に富むところ多いが、私の今の関心・アプローチとはとはやや異なる。

私の場合、個人の年齢時期ということもあるが、もう一つ、生き方を社会的に変更していくことが求められている事態にどう対応するのか、ということがある。20世紀後半に続けてきた「高度成長」ということを前提にした生き方が今変更を迫られているが、その変更の創造という社会的課題をどうするかということである。また、エリクソンの場合、おおよそ30代半ばくらいから始まる時期から、70才代の老年期の間の長い期間をトータルにみているが、それを意識的に二つに切断してみるとどうなるか、というアプローチである。社会的に活躍する時期、エリクソンの用語を使えば生殖性の時期を、意図的に真ん中で区切る生き方を考えてみてはどうだろうか、ということである。

この時期は、しばしばまっしぐらに忙しく生きていて、振り返るのは、子どもが巣立ったとき、退職したとき、ということになるのだが、そのプロセスの半ばで区切って、「人生の後半」創造へと仕切り直してはどうだろうか、ということである。その点では、多くの女性はすでにそうしたことを実践している。そして、男性のなかでも、稀ではあるがそれを試みている人も出始めている。ただ消極的な形で、それまでのやりようがうまくいかなかったことがきっかけであることが多い。身体の問題、リストラにあったという場合などである。

しかし、それらは50才代にはいつてからで、やや遅すぎるという感じがある。私自身もその一人である。その意味で、40才代の方たちがどう感じ考えているかは興味深い。ついでだが、長く沖縄でいっしょにやってきた平川節子さんたちと、数年前に「人生の午後を語る会」をもったことがある。そして、それをまたやろうと話している。彼女は、そうした課題の先達だ。また、多様な人々が集まって、語り合いたいものだ。

## 人生後半期向け書籍のいろいろ ビジネスマン戦士向け (2004年4月13日)

書店に寄る際、人生後半期をめぐる書籍を時々みる。このテーマで最大の冊数を誇るのが、ビジネス向け棚である。あとは、高齢者福祉にかかわる棚に多少ある。ビジネス棚のものは、転職作戦、独立作戦の手引きを中心にしたものが多い。その多くが、従来の「右上がり時代」「会社依存型」から独立し、「自己責任」でもって、たくましく生きることを説くものである。「会社人間」から「自己責任人間」への転進である。「働きバチ」はいっこうに変わらない。24時間死ぬまで働けと説くものもある。

こうしてみると、人生後半期をめぐる多様な主張・挑戦の並存の時代なのだ、と思う。ついでながら、沖縄では、会社などを早期退職して、それまでと異なる生き方を追求しているヤマトンチュに出会うことが多い。かれらは「働きバチ」に終止符をうって、沖縄に移住してきたのだ。かといって、老後を楽しむ「悠々自適」型ばかりではない。新たに自分なりの「事を起こす」人も多い。私もその部類であろう。そうした人と交流する物語づくりも、私のこれからの一つのテーマとなろう。

## 人生後半期の人生創造のテーマいくつか (2005年7月11日)

7月30日、小中学校教師を中心に生活指導実践の研究討論をする全生研全国大会で、私がよびかけて行なう『人生後半期の人生創造』の自主集会が近づいてきた。そこで、浮かび上がりそうなテーマをラレッツしてみた。予想される参加者のほとんどが現職教員なので、今回の焦点はそこにあてられる。

このテーマ集は今後もふくらませていきたいものなので、多くの方の「提案」を待っている。

#### 〈人間関係〉

世代が異なるから、子どもとスレちがうのは当たり前で、むしろ子どもとの違いを楽しみつつ、つきあうという気持ちが大切だ。

人生をともに歩むパートナーとの関係の「賞味期限」は何年か。「賞味期限」が切れたら、どういう脱皮をして、次の創造にあたっていけばよいか

後半期における親友づくりのヒケツは？

どうして、女性は後半期の親友づくりがうまくて、長生きするのか

地域での多様な自主的なつきあいの仕方を追求したい

志を共有する人と組織、ないしはコミュニティをつくるようなありようを追求したい

#### 〈仕事の継続・休退職・転職〉

どんなケースだったら、教師をやめたほうがいいのか

どんなケースだったら、教師をやめないで続けたほうがいいのか

体力の続く限り、定年後も教育関係の仕事・ボランティアをみつけて続けたい

いつまでも教職の仕事にこだわることはやめて、まったく異なる世界に挑みたい

定年で「相手」側に人生の年齢を区切られるのではなく、自分で「区切り」の年を決めて、次のステップに移る

転職は何回くらいが妥当か

教育NPOを設立するなど、積極的に打って出たい。

#### 〈生きがい〉

これまでは「人づくり」だったので、これからは「モノづくり」にうちこみたい。

職業と趣味という区切り方はいいのか

これまで追求してきた理想の教育の追求を生きがいにして継続発展させたい

課題追求よりも、人間関係の豊かさを生きがいにしたい。

「清貧」といわれても「充実」した生き方をしたい。

#### 〈生活スタイル〉

休むことを大切にしたい

必要なことには大胆に金を使う

地域の人・卒業生・外国人など多様な人々が入り出す家庭にしたい。

できれば自給自足するほどの暮らし方を追求してみたい  
一カ所に定住するというよりも、いくつかのところに移り住む生活をしたい  
一日の生活リズムを大切にしたいものだ  
病とは闘うものではなく、病に感謝する気持ちでつきあうことがいい

#### 〈教師生活〉

やりがいのある職業として教師を選んだので、困難は覚悟のうえだ。  
やりがいがあるが、労働時間とストレスを減らしてほしい  
子どもの笑顔をエネルギーにしてきたが、このごろの子どもの笑顔は「ちょっと」？  
行政事務ばかりに時間をとられるのではなく、子どもと向き合う時間がほしい  
自分が書いた実践記録・学級通信を見返して、「もっとやらなくちゃ」と奮い立つ  
管理職にはできない学校づくりを追求したい  
外国で教師をしてみたい

#### 〈他〉

何才からを人生後半期に区切るか  
成人後の人生のステージというのは、いくつあるのか。いくつあったらいいのか  
人生はいくつあったらいいか  
「余生」という言葉っていいの？  
年金不安に備えて、60才時点で退職金を含めて2000万円以上はもっておきたい。  
年金不安など考えたらキリがない。  
相続する資産を残すべきか。残すとしたら、どのくらいが妥当か。  
わが子に、私の生きざまをみせておきたい。  
わが子には、教師にだけはなあってほしくない。

## 「人生後半期の人生創造」の自主集会で出された興味深い多様なメモ

(2005年8月11日)

すでに前の記事に書いたが、全生研大会のなかで7月30日におこなわれた自主集会「人生後半期の人生創造」で、参加者から出された多様なメモカードのおおよそを書き出しておきます。

これは、前の記事に示した「テーマいくつか」を参考イメージに、参加者が書いたものです。

#### 〈人間関係〉

とにかくむずかしい。目の前の人を大切に  
パートナーとは山歩きなどを続けたい

・・・これには「ずっといっしょにできることがあるといいですよ」というコメントカードが他の方からつけられました。

パートナーとは、こちらの意識の持ち方で相手も変わると信じたい

パートナー以外の異性との友情もあっていい

・・・これには「パートナーが何というでしょう？」というコメントがつけられました。

つれあい以外に合う人いるかな？

定年後、たくさんの人と出会えて楽しい。

退職してからは、隣近所・町内の人とおしゃべりする

すでに年金者組合に入っています。今は入っているだけ。

他の職の人と話したい

労働時間が長すぎるせいで、職場以外の人間関係をつくっている暇がなかった。

職場の人とも話せないよね。

たくさんの人と出会いたい。

されていやなことはしない。

公的なつながりだけでなく、私的なつながりもたくさんもっていききたい

わが子どもだんだん子離れ。親についてこなくなった

・・・これには「でも親は子供にとっていつまでも憧れな存在です」というコメントカードが他の方からつけられました。

#### 〈仕事の継続・休退職・転職〉

やめようと思ったことがなかったのに、やめてもいいかも、と思うようになった。

やめようと思ったことはある。今は定年までやるつもり

最近、定年まで続けられない職業のように思えてきた

体力・気力がなくなったら、仕事のやめどきかな？ と思う

ヨレヨレに疲れ切る前に余裕をもってやめたい

精神的にリラックスできなくなったら、さっさとやめる

教師の仕事が好き。可能な限り続けていきたい

楽しめるなら続けよう。

やめても教育とか子どもとかに目を向けていきたい

育休中に学校が恋しくなった。やめたら後悔しそうなんだけど

やりがいと言えなくても手応えを感じたい。でも最近は・・・

子どもに嫌われたら辞める

・・・これには、次のコメントが他の方から寄せられました。子どもに嫌われることはよくあるけど、時間をかけてわかってもらうこともいいと思う。

スゴイ！！ 私なんて子供に嫌われることはよくある

誰にもきらわれない先生って、魅力がない。

落ち込むと仕事に自信がなくなる

・・・これには、次のようなコメントが他の方から寄せられました。そうそう。毎日こころろ気分がかわったりして。やっぱり仕事があまくいってないと。落ち込むことは誰にでもある。人間である。

発想を自由に。転機をいかす。

自分だからこうできたと思えるような仕事をする

創る楽しさがおもしろい。

平和運動や自然保護運動もやる

〈生きがい〉

家族と一緒にいて、ほっとできること

家族との会話を増やすこと

自分の作品といえるものを残したい。本が出せたらなあ。

子どもたちと取り組んで、ちょっといいことがあって子どもたちの喜ぶ顔を見たとき

教えて喜ばれることを教えた

旅から旅へ

グループをつくる。モノを作ることが好き。

自分の好きなこと、やりたいことを見つけ、やってみること

趣味は生きがいにはならないのではないか

挑戦すること

自分の生きがいを教師以外で早くみつきたい。

・・・これに「教師が生きがいてことですよ。いいんじゃない」というコメントが寄せられ、さらに「退職まで見つけたいんだなあ？」と返しのコメントがありました。

料理はきわめて創造的な作業で、教育くらいおもしろい

・・・これには、次のようなコメントが他の人から寄せられました。定年後。ぼくの居場所は台所。

少しは台所に立ってみたい。

おいしいものを食べる

自分でおいしいものをつくる

〈生活スタイル〉

市民としての生活を大切にしたい

毎日やることが多い

頑張りすぎず、自分のペースで

頑張りたくなくても頑張らざるをえない時はどうしたらいい？

疲れたらがんばらずにすぐ休む

疲れたら逃げる

のんびりゆっくり

ボーッとする時間をもつ

ボーットするのに飽きてみたい

・・・これには「ボーットとしている間に焦ることってありません？」というコメントカードが他の方からつけられました。

もっとたくさん眠りたい

仕事以外のことにエネルギーを向けている暇がなかった。

趣味に時間をたっぷりって心豊かに過ごしたいです。

一日一日を充実すれば

・・・これには「何をしたら充実するの？」というコメント、さらにそれに「同感 でも漠然と充実させたいと思います」というコメントが他の方からつけられました。

趣味と酒は続けたい

自分のやたりのこと（ダンスなど）をやる

通勤時間を短くしたい。12時間、外に出ているよ

〈教師生活〉

無理をしない

学校の外に出よう

楽に楽に考えないと長続きしない

精神の自由を大切にしたい

あと2年で定年、万歳

・・・これには、「つとめきる満足感？」「退職するってそんなにうれしい？ さびしくない？」というコメントカードが他の方からつきました。

仲間と楽しむ

力まず楽しくできることをゆっくりとやる

教師生活を楽しんでいきたい

・・・これには、「どうすれば楽しい？」というコメントカードが他の方からつきました。

とにかく忙しい。忙しすぎる

定年前でもやめる勇気をもちたい

・・・これには、「やめるには勇気が必要なの？ 条件 があればいいんじゃない？」というコメントカード、さらにそれに「条件がそろわないから勇気が必要」といコメントカードがつきました。

## 私の今後数年間はどうなるでしょうか？ (2006年12月7日)

執筆中の「田舎暮らしと人生創造」がほぼメドがたった。来年春には発刊できそうである。書きながら、私



自身の今後数年間はどのようなのだろうか、考えはじめた。2002年に退職届を提出した際に、退職理由として「人生計画のため」とし、それは計画ができあがっているのではなく、「計画を作成する」ためと補足説明した。それから4年あまりが経過した。

この計画はまだ作成しきれていない。無理して作成していないためでもある。かつては計画を用意周到にやるタイプであったが、今は流れのなかで、計画ができてくるだろう、というスタンスに立っているからである。

しかし、ここ玉城に移住して2年を越して、いろいろな出会い、生活をしていくなかで、いろいろな可能性が開けてきている。それらを列挙して、ゆっくりと考えてみようと思う。かなり夢想的である。

- 1) ハーブの専門的修行 実現可能性2~3%
- 2) 健康・スピリチュアリティの追求 実現可能性10数%
- 3) 地域起こしへの参加 実現可能性20%
- 4) 「田舎暮らしと人生創造」論のさらなる追求 実現可能性40%
- 5) 沖縄論 実現可能性30%

これまでしていたことで、継続するか、数年のうちに縮小し、「消滅」する可能性のあるもの

- 1) 大学教育論追求 縮小可能性80%
- 2) 大学非常勤講師 2~3年は継続し、その後縮小の可能性80%
- 3) 生活指導論研究 2~3年は継続し、その後縮小の可能性80%
- 4) ワークショップ実践 継続の可能性90%

日々の生活レベルでいうと、書斎での読書・執筆など40%、大学授業や各地でのワークショップなど20%、集まり・卓球など20%、畑・庭作業20%という現状も大きく変化していくだろう。

こんな風に進行していくと、私の名刺の「名乗り」で、現在「教育研究者：生活指導、授業・ワークショップ、大学教育、沖縄教育」としてしているものが大きく変化していくことは確実であろう。

いくつかの仕事にキリがつく来年2~3月に少しは「つめて」考えていこうかなと思っている。

## 金と時間にとまどう団塊世代から、人生創造する団塊世代へ

### 感想「第一回団塊フェスティバル」 (2006年12月18日)

12月17日沖縄コンベンションセンターで開かれた「第一回団塊フェスティバル」に出かけた。講演会と展示場があるのだが、とくに惹かれる講演はなかったので、もっぱら展示場を見て回った。展示場には、「マネープランの村」「趣味の村」「健康の村」「住まいの村」「活動の村」に分けられた、多様なブースが置かれていた。

印象を一言でいおう。――働き続けたきた団塊世代が、60才「定年」を区切りに急に「金と時間」に恵まれるのに対応した、「金と時間」の多様な使い方へのお誘いの場である。――

目立つ、というよりは圧倒的なのは、企業からの多様な商品の発信・宣伝であり、商品購入へのお誘いである。リゾート地購入、アウトドア用品、資産運用、海外旅行、健康食品などである。例外的なのは、NPOなどが主宰するボランティア活動などへのお誘い、カルチャーセンターのお誘いなどのブースである。なかには

葬儀屋が多角経営的にのり出したNPOもある。葬儀屋が、人生終了時期だけでなく「人生後半期」全般にかかわることに視野を入れはじめたということである。興味深くはある。ワーカーズ・コレクティブの仕事起しのブースも興味は持たれるが、その場はきっかけ的な場としての設定にとどまっていた。

今、「金と時間」に恵まれた団塊の世代が、企業チャンスとしてきわめて重視されていることが、よくわかる場であった。しかし全体的にいうと、団塊世代がみずからどのような人生ステージを創造していくのかということは見えない。商品消費対象として位置づけられているのである。

そして、ここでは60才を迎えて退職する団塊世代ということで、勤め人が前提であり、団塊世代が「突然」「金と時間」をどうするかが問われるという事態を想定している。確かにそういう人は多い。そして、この催しの「充実したセカンドライフを目指して」というキャッチフレーズが示すように、勤務-セカンドライフ（余生）という二分論が明瞭に読み取れる。そして、セカンドライフについて余り考えていない団塊世代、というイメージも潜在している。

残念ながら、確かに多くの団塊世代はそういう状況にあるだろう。それほどワーカーホリックできた団塊世代は、たいした準備なしに「定年」を迎えるのである。団塊世代当事者たちの構え・準備はきわめて不足している。そして、それに向う蓄積は、当人たちも社会的にも大変弱いのである。だからこそ、たとえば、最近頻発する資産運用での詐欺にあうケースが多いのである。そしてまた急に「時間ができてとまどう」男性が大変多いのである。

「第二回」団塊フェスティバルでは当事者自身の主体的な人生創造の多様な試み営みが反映するような催しへと発展していくことを望むものである。

## 第二回「人生ユンタク」「人生後半期の人生設計」の報告 (2006年4月17日)

15日第二回のユンタクを開いた。他のさまざまな行事とかちあって、参加者が少なかったが、大変充実した内容になった。浅野誠がすすめたミニワークショップのレジメは、後で見えていただくことにして、この会で集中した話題や新発見などを書き出していこう。

1) 「人生設計」などと考えると、まずは「雇用されている人」を前提にイメージすることが広くある。それが「標準」になっているのだ。それ以外の農家などの自営業者は「例外」扱いとなる。そして「雇用者」でも「終身雇用」を「標準」とする考えが広くみられる。というよりも「そういう風に考えるべきだ」ということが知らぬ間に世の中の支配的な考えになっている。女性の大半がそれにあてはまらないのをはじめとして、男にしても、3割にも満たない人しかそういう人生を歩んでいないはずだ。そして、これからはもっと低くならう。

そして、そんな「標準」に囚われてしまって、その結果、自分の人生を「どれだけ標準にあっているか、あっていないか」で考えるクセがついてしまっているのではないか。2、3日前、求人側が期待している「主体性」をもちあわせていない大学生が大変多いという新聞報道はそれをよくあらわしている。

2) レジメの1)の活動、いつから人生後半期なのかという話で、参加者は「何才から」というよりも「～

～があった時から」という体験が多い。通常も年齢というよりも、なにかの「事件」があって気づかされたという人が多いだろう。病気とかリストラとかがある。あるいは子どもの「巣立ち」もそれに入ろう。

3) 2) の「人生後半期の人生設計」でイメージする領域をあげる活動で、このほかに「地域のなかでの自分の位置」「旅行」などもあがった。人生を個人の問題としてだけでなく、地域のなかで、社会のなかで考えるというのは素晴らしい視点だと思う。旅行については、よく定年後夫婦で旅行することが話題になるが、定年後やりのこした旅行をしたいというのではなく、本当に旅行が必要なのは若い時ではないか、世界を見て生きかたを考えるとということが重要なのではなかろうか、ということが話題になった。

「夢の実現」ということについて、「夢」というと「上」をめざしてということイメージするが、「下」、つまり自分の足元に向かっての「夢」があるのではないかと、さらには「横」への広がりでの「夢」もあるのではないかと、ということが話題になった。

4) 3) 物語づくりは、ずいぶん話が盛り上がった。この物語の事例は、浅野誠のまったくの作文であるが、参加者の各々が自分の体験からしてピンとくるところがあるとのことであった。

① 人生選択のなかで「金」をとるのかとらないのか、という問題。余裕ある財政的見通しがあるにもかかわらず、高給料をもらいつづける発想が意外に広くみられる。そういう「仕事依存症」ともいべき人がいるのではないかと。「仕事」以外にはかえられないという人であり、生きがいも趣味も仕事という人である。そういう人は、勤務先をやめたら、何もない状態になり、早死にするケースがみられる。

② 生きがいが少なくなった時に、認知症的なものがやすい。認知症の程度の軽いうちに、まわりの人たちとともに積極的に対応策を考えていく工夫が必要。

③ 公共事業依存型がだんだん狭められてきているなかで、土木建築業の人たちのなかにも農業をはじめ自営業的なことの修業をする人たちが増えはじめている。

④ 人生後半期からということではなく、早めに「人生づくり」をはじめることが大切であろう。

⑤ この地域でも体験型滞在型観光への取り組みが実際にはじまっており、そんな取り組みの広がりのおかげで、新たな村起こし・町起こしと重ねた仕事起こしの取り組みがはじまっている。

5) ということで、次回の第三回は、仕事起こしと人生起こしを重ねたテーマにしようということになった。多様な人々の参加で、さらに多様な論議が起こることを期待したい。

\* \* \* \* \*

#### 当日のミニワークショップのレジメ

1) 人生後半期は、いつからと考えますか、どんなときに人生後半期を気づかされますか。

〇〇時から

～～があった時から

2) 人生後半期の人生設計としてイメージする領域

財政

子どもの教育・巣立ち(就職・結婚)

親の介護

自分自身の介護のされ方

夫婦関係

健康

仕事

生きがい・趣味

夢の実現

### 3) ある物語

――この物語のなかのだれかの立場になって、どうしたらいいか、案を考えてください

夫の母 73才 認知症の症状がではじめ、多少の介護が必要になりはじめている

妻 45才 踊教室で弟子25名相手に週4回の教室。踊の協会で、来年から重要な地位が予定されており、会合などが週に数回増える。年収は現在200万円だが、2～3年後には、400万円以上になりそうである。

夫 43才 一つ目の勤め先で5年勤務の後、現在の民間会社の職場で16年働く。技術職で年収500万円。2カ月後の転勤の内示があった。現住所からは片道2時間。技術職から営業の管理職へ。年収は700万円以上となる。

長男 18才 高校卒業し、住み込みで料理修業に入る。

長女 16才 大学進学希望

### 4) 人生後半期に大切にしたいこと

書いてならべてみよう

参考例 孫が遊びにこれるような家をつくっておくこと

生活習慣病の予防

趣味をもつこと

60才以降の生活資金・予備資金として、2000万円を用意すること

子どもを、早めに独立させること

70才まで働けるような職場・職業を考えておくこと

夫婦で世界一周旅行をすること

70才以上になってもつきあいのできる仲間を数人以上つくっておくこと

世話され上手な人柄になること

世界平和

地域の世話役をすること

地域の住みやすさが守られること

一人になっても生きぬける強さ

持病とうまくつきあう方法を見つけ、それに慣れること

配偶者から馬鹿にされないこと

念願のNPO組織をつくること・起業すること

人に使われることがないようにすること

心の平静

先祖と子孫の繁栄をねがうこと

基地がなくなること

上に並べられたもののなかからベスト5に投票しよう

## 人生後半期スタートのころ いかに切り換えられるか (2008年11月23日)

もう10年以上前になるだろうか。沖縄で、昔からの友人たちとともに、「人生の午後を語る会」をした。そんなころから、私は、「人生の午後＝人生後半期」について、いろいろ考え、語り、書きはじめた。先に紹介した近藤郁夫さんの提案も大きな刺激になった。

「人生後半期」を、いやいや受け入れるのではなくて、積極的に作りだしていこうという提案だ。それは、それまでの前半期、ある意味で「定まった流れ」のなかで、「必死に」「まじめに」「頑張っ」て生きてきたとしたら、それを「自分なり」に切り換え、創造的に後半期を作りだしていこうということである。

この境目の年齢は、人によってさまざまだろうが、おおよそ40代だ。しかし、この時期は自分でも、他者からも「充実」した「ピーク」の時期だと見られているだけに、「切り換える」ことがとても難しい。だから、「切り換え」は遅れがちだ。とくに男性がそうだ。「切り換え」は、50代後半から60代前半になる、という人の方が多い。その場合の表現は、「第二の人生」とか「余生」とか「高齢期」の生き方という表現になる。そうではなく、40代からスタートしてはどうか、というのが私のメッセージだ。

男女ともに50歳前後に、自分の身体状況から「切り換え」が必要であることを、いやおうなしに気づかされるが、体の強い人、仕事が好調にいつている人は、なかなか気づきにくい。気づいても、「もっとやれるはず」「もっとがんばらなければ」ということで、バランスを崩す例がとて多い。そして、なかには悲劇的な結末を迎える人も結構多い。

私はそのようにではなく、自分なりに自分の仕事・身体についてのサインに気づき、自分なりの後半期創造へと早めに向かうことが大切だと思う。

しかし、そこに向かうには、困難がつきまとう。「もっとやれる」「もっとがんばらなくては」という自分自身からの「声」もそうだが、まわりの目がとても気になる。

私の例を出そう。大学教員という長年の定職を早めにやめて、後半期の歩み方を創造していこうという計画は40代半ばからもってはいしたが、それを実現するには結構までどった。結果として、57歳で退職したわけだから、何年も遅すぎてしまった(ちなみに私の勤務先の定年は70歳だった)。それでも、私の退職が公式に決定した後でも、同僚たちの大半は信じていず、別の大学に行くのだろう、と思っていたようだ。だから、本当に定職をやめたのに、大半の人は驚いていた。

※ 自分の人生の区切りを、「定年」などという外側の事情で区切られるよりは、自分で区切る方がいいに

決まっているが、自分で区切る人が少ないのが気になる。

そうした事に惑わされず、「決行」することは大切だ。無論、「仕事をやめる」だけが方法ではない。同じ仕事を続けながらも、それまでとは異なるアプローチをするのも、一つの転換である。

そこで、もう一つ不安になることがある。それは、自分自身に対してである。早くやめるというこんな思い切ったことをしていいのか、なにか「さぼっている」という意識が残る。罪意識に近いものさえある。

しかし、ワーカーホリック、燃え尽き症候群の危険をもつ人にとって、この決断は不可欠だと思う。（ちなみに、メタボについても、こうした角度からの検討が必要な例があるように思う）

「休む」「やめる」ことは、決して罪なことではない。「休む」「やめる」ことをしない方が罪になりさえすることを知ってほしい。それは本人の人生の後半期創造にとっても、また周囲の仕事仲間との関係においても、そういえることが結構多い。

こんなことを私は語りつづけてきたが、男性対象が多かった。しかし、公務員や堅実な業種などの仕事で、それなりに成功を収めてきた女性にも共通する事例が増えてきたように思う。こうしたことについて『沖縄田舎暮らし』（アクアコーラル社2007年）でも書いたので、それも参照してほしい。

また、こんなことを書くのは、もう一つロハスな生活、スローライフといったこととも関係する。地球とともに歩む生活の創造ということでもある。従来型の経済が、今世界的に大混乱に陥っている時、改めてこの問題を考えなくては、と思う。

## 日本生活指導学会での私の提案 「人生後半期の人生創造」1 (2009年9月9日)

先日の日本生活指導学会大会の自由研究発表で、私は——人生後半期の人生創造 その2 「地球起こし」「地域起こし」「人生起こし」——という提案をした。

その2とあるのは、その1を、2003年大会での——人生折り返し以降＝人生後半期の人生創造と生活指導実践——というタイトルでの発表に続くものだからである。

生活指導は、子どもだけでなく、すべての世代にわたる生き方のありようにかかわるものだから、この学会の研究対象になるのは当然だ。昨年逝去した近藤郁夫さんが、「中年期の生き方」について問題提起したし、また故春田正治さんは、「死」について問題提起している。

当日は、20名あまりの方々が聞きに来てくださった。また、コメントは、「40歳以下」という私の注文にこたえて、金沢大学の杉田真衣さんが、若い世代の事例をひきつつ、大変研究的にしてくださった。司会は、都留文科大学の西本さんが、これもまた研究的に展開してくださった。

では、私の問題提起について、当日レジメをもとに、連載的に紹介していこう。

まず、レジメ冒頭を紹介しよう。

- 1) 人生創造をめぐるステージの変貌——前回発表からの変化を中心に
- 11 職業生活のステージ構図にまで及ぶ事態の変化  
「ストレーター秩序」と終身雇用制の縮小限定  
60歳まで同一職場に正規職員で継続雇用される人の縮小。
- 12 退職・離職過程の多様化と退職・離職者間の格差
- a) 定年までを「全う」し、退職後も正規・非正規を問わず、雇用が保障される型
  - b) 積極的計画的早期退職型
  - c) 消極的早期退職型（リストラ対象、病気など）
  - d) 「退職」過程が無い非正規型雇用（継続）型

少し説明しよう。

被雇用者の標準的な型として、「正規職員として終身雇用で、60歳（～65歳）の定年まで働き続ける」ということがあった。これに実際該当する人は、男性にあってもそれほど多くない。50%にはるかに及ばない状況だったのではないだろうか。しかし、標準とされてきたので、「それが当たり前」という感覚が広く存在してきた。

しかし、この15年の間に大変化が起こり、それは、「幸運な人で、エリート的存在とさえいえる人に限定される趨勢」が広がっている。それにともない、退職・離職過程で、「幸せな定年退職を迎える」という形が減少し、多様化してきているし、退職・離職者間の格差が広がっている。

その多様化・格差は、レジメのa)～d)という形であらわれてきている。量的には、c) d)が増え、a)が減少している。私のような、b)は少ないが、少しずつ増えているのではないか。

## 「人生後半期の人生創造」2 働きたい60代 悩む50歳

(2009年9月13日)

レジメには、番号がふってある。節ごとに2桁目はかわる。  
今回は、13なので、第一節の3、という具合だ。

### 13 60～70代における職業・仕事

a) 型	非正規型雇用（継続）型	起業型
趣味・ボランティア型	地域世話役型	療養型

ここでa)型というのは、前回の12のなかで示した、「定年までを「全う」し、退職後も正規・非正規を問わず、雇用が保障される型」のことである。近年、企業にしろ、公務員にしろ、定年後の再雇用が多くな

っている。そうした職に就ける人と、そうでない人との格差が広がっているといえるかもしれない。

私の場合は、a)型以外の、上の全部が重なっているといえるかもしれない。

いずれにしても、多様な状況がみられる。

次の14の前半も紹介しておこう。

#### 14 人生後半期における区切りの変化・崩壊と創造

年齢区分の事実上の変容。60歳前後の区切りの位置の相対的下落。意図的であることは少ないが、実質的には、70歳前後と50歳前後に区切りができつつあるのではないか。60～65歳の定年・年金受給開始年齢が話題になるが、それだけではない。

健康でさえあれば、60代では、仕事、そして収入を求める人は多い。(しかし、定年以前に激務だった人は、「趣味・ボランティア型」を求めやすいかもしれない)

そのため、60代はチャンスさえあれば、働き続けるということになる。だから、定年60歳で、人生を区切ることが少なくなり、区切りが後へと延長しつつある。いずれは70歳が区切りになりそうな感じさえする。

「50歳前後」の区切りといったのは、私の推理だ。40代まで続けてきた仕事の先が見通せるようになり、あるいは行き詰まり、あるいは、重さにうちひしがれ、病を得るといったことがあったり、あるいはリストラ対象になったりと、なにかと変化がでてくる。

そのなかで、なんとか頑張る続ける、さらに「上」を目指す、混乱する、異なる途を模索するといった多様な動きが出てきやすい。

こうして、従来の人生区切りを変えていく動きが広がっているといえないだろうか。

### 「人生後半期の人生創造」3 学習・学校と仕事の並行 (2009年9月18日)

まずは、学会発表のレジメだ

\*\*\*\*\*

現在の20～30代における職業生活試行錯誤期延長動向とならんで。

男性とは対照的に、30～50代に新たな挑戦をする女性が目立ち始める。例 小さな起業(沖縄は開業率、閉業率ともに全国一) 飲食店・小物店・癒し系店

※相談を受けた時の私のアドバイス。3年の思索・調査、3年の準備をへて、実行へ。実行開始しても、当初3年は、体力気力回復と試行錯誤期間となる。新たな挑戦を創造的に展開し始めるためには、10数年以上を確保する必要あり。だから、50代半ばまでが区切りとなる。類似のことは住宅建設を伴う移住について



もいえる。

\*\*\*\*\*

いまでもそうだが、これまでの標準として、18歳、ないしは22歳に、学校から職業生活に移行する、ということがあった。数十年以上前には、その年齢が、12歳～15歳であった。

だんだんその年齢が伸びていくことが、「モラトリアム（猶予）」と説明されてきた。そしていまや、それが、20代半ばからさらに30歳前後までへと伸びてきている、というのが、一つの見方である。また、この移行が、ある年齢でスパッと区切れないということで、「移行期間」という表現もとられる。

こうした区切りを設定する発想ではないとらえ方があってもいいだろう。つまり、学校と仕事の並行というとらえ方だ。

この発想を大胆に拡張すると、6～15歳ぐらいから、70～90歳ぐらいまでの長期間にわたって、学校（教育ないしは学習）と仕事とが並行するという発想だ。この発想は、いわゆる発展途上国も含めて考えることができる。また、女性には、こうした生き方を展開している人が多い。また、このとらえ方は「右上がり」発想と距離をもつことができる。

こうした生きかたは、年齢区分による「標準」設定とは距離を置いて、個々人の創造的な生きかたを豊かにふくみこんで考えやすい。そんな個人の転換をはかる場合、とくに人生後半期の方への私の個人体験上のアドバイスを書いたのが、上記レジメの後半部分だ。

## 「人生後半期の人生創造」4 大量の新しい形の移住 (2009年9月17日)

まずはレジメから。

\*\*\*\*\*

15 住居移動。Uターン・Iターン（移住）の多さ。例外的現象ではない。

例 「派遣切り」のなかでUターンする近隣の30代～50代の方々

16 精神的肉体的状況。鬱など 精神的過剰緊張による生活習慣病 事故死 自死

\*\*\*\*\*

1960年代前後、大量の住所移動があった。農村から都市にむかって、仕事のための移動だ。当時移動した人は、いまや60代。多くは、移動した先で仕事を続け、家族を形成した。そして、その地で生活し続けている。

一部には、生育した地へUターンする人もいる。なかには、生育した場ではないところへ、Iターンするひともいる。こうした人々が例外ではなく、かなり増えているようだ。なかには、40代から50代にかけて、それまでの仕事をやめて移住する人もいる。また、20～40代にも各地へ移動する人が多い。かつてのよう

に、農村から都市へ仕事を求めて、に限定できない。多種多様になっている。

こうした多様な移住の増加は、人生創造の模索創造という性格をもっているケースが多い。無論、積極的計画的なものだけでなく、リストラ、派遣切りなどにあつて、やむをえず、移住した例も多い。そうしたなか、16で述べた精神的肉体的不調を伴うケースも多い。

こうした事態が、人生後半期の人生創造に、新しい物語を大量につけくわえてきているのだ。

## 「人生後半期の人生創造」5 先進国人間の集団的生活習慣病 (2009年9月18日)

まずレジメ

\*\*\*\*\*

2) 「地球起こし」 平和でエコロジカルな生き方

21 大量生産大量消費型で、商品金銭過剰依存型の人類生活の「持続」の是非を問う。

是だとしても、それが可能かどうかを問う。このことと地球の持続と関わりを問う。

それらから抜け出て、新たな生き方の創造へ

22 平和テーマの新たな形 「戦争と平和」という立て方に加えて

「地球環境。人類の持続。人々の生活・労働のありよう」という立て方

Environmentalist と Ecologist スローライフ ロハス

23 多文化社会に生きる 「弱者」のグローバルなつながり・交流の追求

\*\*\*\*\*

現在の人々の生活習慣になっている生活、つまり「大量生産大量消費型で、商品金銭過剰依存型」生活は、日本でいえば、わずか50年の歴史しかもっていない。それは、集団的「生活習慣病」であろう。しかも、それは、地球全体を病気にさせ、さらに重篤化させつつある。その原因は、『先進国人間の集団的「生活習慣病」』にある。とすれば、解決方法はいたって簡単明瞭。『先進国人間の集団的「生活習慣病」』を治すこと。

そのことへの関心は高まっているが、実際の解決スピードは、重篤化スピードの数倍以上遅い。しかし多くの人々は、「微調整」で治ると思っている。景気回復というスローガンが前面にたつようではどうしようもない。

平和の問題にしても、この問題と結びつけて考える必要がある。地球を何度でも滅ぼせるような武器の大量蓄積という異常事態。

働き過ぎ問題も、この問題と結びつく。

「弱者」の問題を、「強者」にすることで解決しようとする発想が蔓延している。「生活水準」を、先進国の金持ち水準にする発想ではどうしようもない。「年収1500万円以上などというのは、異常なことだ」という発想を育てなくてはならない。こう書くと叱られそうだが、年収1000万円以上でもそうだと思う。だが、世界の人口の大半が年収100万円以下なのだ。10万以下もたくさんなのだ。

そんなことを考えると、かなり思い切った発想の転換が必要だ。しかし、つい50年前までは、日本でも異なる生活のありようをほとんどの人がしていたのだ。

このくらい大胆な発想で考えないと、「地球にやさしい」生活とはいっておれない状況なのだ。自分の生活のありようの計画検討に、こうした視点が不可欠だと思う。

## 「人生後半期の人生創造」6 地域と家族の改革的創造へ

(2009年9月19日)

レジメにはこう書いた

\*\*\*\*\*

3) 地域起こし(地域づくり)と生活指導

31 地域起こしと結びあった人生起こしを

32 地域の崩壊。とくに人間関係で。コミュニティの縮小。アソシエーション停滞。個人の孤立化。人生後半は、つながりの再構築が並行する例が大変多い。自営業を居住地で営む場合は例外だが。15と関連

33 親密圏構成の変化。親・配偶者の死、子どもの巣立ち・舞い戻りなどの同居者の変動。介護・被介護。精神的共同の対象

\*\*\*\*\*

人生創造は個人の問題だから、どうして、地域づくり、また家族と結びつけるのか、と尋ねる人がいるかもしれない。むしろ、地域や家族から「自由」になって創造的に生き方を作ることを語るべきだと。

確かに、過去の地域(共同体)や家族は、自立していこうとする個人に対して束縛的かかわりをするが多かった。今でも、地域はそれほどまででないにしても、束縛する家族は多い。だが、そこから離れるにしても、新たな関係を築きあげることが不可欠だ。欧米社会は、それを、アソシエーションを築くという形で、100年、200年かけて追求してきた。

しかし、日本では、集団・関係という、束縛的な印象が強い地域や家族をイメージする人が結構いる。そして、できる限り、集団・関係から離れようとして、結果的に孤立に至る人がなんと多いことだろうか。マスコミ報道される事件には、こうした孤立の結果であること、あるいは関係の持ち方の未熟さに由来することがなんと多い。

だから、私は、自主的に集団・関係を創る力、そして、地域・家族に改革的にかかわっていける力を大いに育てる必要があると思う。そして、人生後半期にある方は、創造的にこれらにかかわってほしいと思う。

そして、歴史的に蓄積されてきた、これらについての知恵が、消えかかっているし、また「時代遅れ」になっているものも多い。その意味でも、それらの改革的創造に、人生後半期にいる人には参加してほしいのだ。

## 「人生後半期の人生創造」7 生き方創造と生活指導学会

(2009年9月20日)

日本生活指導学会といっても、学会関係者でないと知らない人がほとんどだろう。1983年に、教育だけでなく、心理、医療看護、福祉、司法などじつにさまざま分野の方々が集まって創立した学会だ。私は、創設準備会、および創設後の事務局長をつとめた。もう四半世紀前の話になってしまった。

生活指導というと、学校で「こわい指導」するというイメージをもつ人が多い。しかし、この学会は、子どもをふくめて、多様な人々、とくに困難を背負わされている人々に、前向きの生き方ができるようにかかわろうとする方々が集まっている。

だから、当然、人々の生き方、人生創造も大切なテーマになる。しかし、特に困難を背負っているわけではない人々、とくに人生後半期の人々についての研究討論は、ないではなかったが、少なかった。ということもあって、この連載で紹介している問題提起をしたのだ。

今回は、解説は省いて、レジメの紹介だけにしよう。

\*\*\*\*\*

### 4) 生活指導実践と研究の課題

#### 41 これまでの「地域生活指導」イメージを超える必要

「問題を抱える人々へのケア」「関係諸機関の連携」に加えて、「だれでも」を対象に

#### 42 行政・協同組合・結社（NPO・企業を含む）・コミュニティ組織・家族・個人、そして生活指導関連専門家の新たな関係

#### 43 地域起こし・仕事起こしと結びあって。これらにおける都市型と農村型の違い

#### 44 「学校の有用性」への不信の広がり。代替策の希薄さ

#### 45 これまでの研究などを参照。年齢段階区分だけの問題ではなくなりつつある。個人が置かれた社会的条件の差異が強い影響を持つ。

アッチェリー・バルジュ「ジェロントロジー」（きんざい2005年）

Erickson 夫妻「ライフサイクル、その完結」（みすず書房2001年）

小貫雅男・伊藤恵子「菜園家族物語」（日本経済評論社2006年）

## 「人生後半期の人生創造」8 私個人

(2009年9月21日)

このレジメの最後に、私個人の事例を書いた。

キーワードばかりでわかりづらいが、このブログに日々綴っていることなので、説明は省く。

\*\*\*\*\*

### 5) 私個人の事例

#### 51 個人レベル（2003年退職 2004年沖縄移住=Nターン フリー生活）「月10万円」

地域・組織レベル（沖縄・南城の変貌 私が関わる組織の変化）

人間関係のつながりレベル（職業つながりから地域つながりへの比重の移行）

52 集落レベル 集落評議員 集落行事・共同作業 ビンガー通り会 合唱団

53 自治体レベル シュガーホール運営審議会副会長 半島芸術祭 in 南城 町起こし企画への関与 地域での積極的企画への参加・支援・連携・ネットワークづくり（修学旅行民泊 ファーマーズ・マーケット 無認可保育園のサポート・・・）

54 教育研究者としての仕事。大学教育アドバイザー。アメリジアンスクール・イン・オキナワのアドバイザー。非常勤講師。読書執筆。講演・ワークショップ

55 個人として。ブログでの発信——地域「宣伝」・情報拠点もかねて。個別相談。卓球。庭・畑（自然農法の試み ハーブ・薬草）

56 健康・スピリチュアリティの探究 個人的体験

## ライフコースの後半期 生涯学習 年齢規範 宮本本12

（2012年1月6日）

ライフコースの後半期について次のように書いてある。

「中高年期に関しても区分の難しさが生じている。教育は人生前半期で終わるのではなく、生涯に渡って継続する生涯教育・生涯学習となっている。学ぶことと働くことが相互に交差し、教育期は青少年期までという区分が通用しなくなる。その点で欧米諸国と比較すると、日本の生涯学習は遅れた状態にあるが、今後大きく変化するであろう。（中略）

工業化時代のように就業期間が年齢によっては規定されなくなり、近いうちに70歳まで働くことが社会制度としても前提となるであろう。

「いつまでも若いままでありたい」という若さ志向が強くなり、生物学的な年齢と社会的年齢との乖離が生じている。年齢によって規定された役割や行動様式（年齢規範）が弱体化し、年齢によって制約されることが少なくなる傾向が見られる。」P82-3

いくつかコメントしよう。

1) 指摘されているように、欧米での生涯学習の浸透に対して、日本は遅れている。フィンランドでそれを痛感した。また、日本の生涯学習は、趣味・余暇的なイメージが強い。公民館企画もそうしたものが多いし、カルチャー・センターなどは、まさにそうである。フィンランドのように、職業と結びついたものは稀に近い。

その背景には、雇用のあり方、あるいは企業での研修のありようの差異、勤務時間などの勤務形態の差異などの問題がある。激動しつつある、こうしたものがどう変化していくか。この20年間は、雇用側に有利なように、これらに変化した。被雇用者側にプラスになるような変化が、今後どのように作りだされていくのか。だが、被雇用者側の関心・運動は、それらに大きな変化・進展をもたらすほどは展開していない段階である。

2) 「学ぶことと働くことが相互に交差」するというのは、フィンランドではごく普通に見られることだが、日本の場合、例外的なありようであり、かつ当人にとって経済的不利を伴うことが多い。フィンランドの場合、雇用契約や労働組合も重要だが、国の社会福祉制度がそれらを支えているので、「学ぶことと働くことが相互に交差」がごく普通にみられるし、むしろ促進さえされている。知識の変動が激しい「知識基盤型社会」では、それが当たり前だという雰囲気なのである。

日本の場合、学習と労働とを一定間隔で交差させていきたいと、個人が思っても、それを現実化させる経済的社会的基盤が大変弱いのだ。

3) 「年齢によって規定された役割や行動様式(年齢規範)が弱体化」という指摘は、その通りだと思う。とくに50代以降はそうだと思う。男性に絞ると、元気がいい人、元気をなくしている人、限度いっぱいやっているがダウンしそうな気配がある人、などによる差異は激しい。それらの個人差の激しさは、年齢差より大きい。

そうしたことについての自己認識が弱いことが特徴的でもある。「年齢規範」に拘束されて、自分なりに必要なこと希望することを構想することができない人が多い。それは「人生創造」に向かうというよりも、既存の人生規範に受身的になることに通じる。

たとえば「生涯現役」を言う人、「定年後の楽しみを待ち、定年を待つ人」などは対照的なようだが、「人生創造」ということに向き合って構想するよりは、既存の規範に依存しているという点では、共通していそうである。

ちょっと辛口すぎるかもしれないが、こうした疑いをもって自分の人生を再考してもよいではなからうか。

4) 「いつまでも若いままにいたい」という若さ志向が強まっているのは、恐らくそうだろうが、年齢を取ること、そしてそれを受け入れることを否定的に考えるのは、いかななものだろうか。若さは肯定的で、老いは否定的なことなのだろうか。そうでないとらえ方、自分なりの年齢を自分相応にうけとめることの重要性を見直してはどうだろうか。

## 人生後半期の年齢区分

(2013年1月25日)

このところ、人生後半期についての本を読むことが多い。たとえば、60歳以降の生き方、老後の準備、退職後の生き方、40歳以降の生き方といった類いだ。

それらの本をみると、40代、または40代半ば以降の、人生後半期の年齢区分をどうするかが、話題になることが多い。たとえば、60歳または65歳の退職の前と後とでの区切り、70歳の前と後とでの区切り、あるいは、前期高齢者と後期高齢者という法律の区切り、あるいは、80歳の前と後という区切りもある。これらを組み合わせて、二分ではなく三分するやり方もある。また、年齢ではなく、健康寿命という視点からの

区切り方もある。

考え方によって大きく変わる。それに、個人差が大きい。平均寿命でいうと、70代後半である男性の場合、高齢期間の長短は、個人差がより一層大きい。だから、年齢区分を一般的に行っても、個人によって意味が大きく異なる。人生の末期はいつごろか、など言うことは、寿命の個人差が大きいのだ。逆算方式が可能なら、寿命から逆算したらというアイデアもありそうだが、そういうわけにもいかない。

また、被雇用者と自営者とは異なる。自営者とは異なり、被雇用者の場合は、「定年」という区切りが設定しやすい。とはいえ、「定年後の再雇用」などの形で、仕事をする人が多い中で、以前と比べると、定年後も務めている人が増えていそう。

その際、年金も含めて必要な支出を賄える収入があるかないか、が大きな問題となる。収入がないとしても、社会的に有用なことができるかどうか、この時期の健康や寿命に大きくかかわるという叙述もある。とくに男性の場合にそうだという記述がある。

自営者と比べると、被雇用者はオールオアナッシング的ありようになりやすい。それを避けるために、必要な収入がある時期→収入はゼロに近くなるが社会的有用なことができる時期→それもかなわぬ時期、という区分もありうるだろう。

振り返ってみると、自営者がほとんどであった時代→終身雇用を軸にした被雇用者が多い時代→職場をいくつも経験していく人が増えていく時代、といったように、社会変化が強い影響をもたらしている。単に平均寿命が伸びたということが新たな事態をもたらしたわけではない。

私が、10年ほど前に「人生後半期」という表現を多用したのは、被雇用者に多い、「働くか退職か」というオールオアナッシング的な発想を避けたい意図と、定年という形で他者によって区切られるより、みずから積極的に区切りをつけ、その準備を40代50代から早目にしてはどうだろうか、といった意図も含んでいた。

私自身の区切り方でいうと、50代半ばで、退職→玉城での田舎暮らしという区切りをした。そして今、10年近くたち、次の区切りの時期が近づいているように思う。

# 3. 高齢者・老い

## アッチェリー、バルシュ「ジェロントロジー ～加齢の価値と社会の力学～」

(きんざい2005年)を読む (2007年1月27日)

ジェロントロジーを英和辞典では「老年学、老人学」としている。その訳が適切かどうかは別にして、高齢者に関する総合的な研究分野として、アメリカではこのジェロントロジーが数十年にわたる蓄積をもっており、そうした講座が各地の大学でたくさん置かれているとのことである。その講座での教科書的な位置を占めるものとして本書があるようである。このジェロントロジーとは何かを知るということにとどまらず、この問題を多様な角度から概括的に把握するうえで、大変有用な書籍である。

私自身もこの用語すら知らなかった。おそらくこの分野の専門家以外にはあまり知られていない用語であろう。それは日本のこうした分野の研究が、個別の専門分野に分かれており、相互に交流しつつ総合的に研究をすすめるという体制がかなり未熟であるためであろう。この本の翻訳が、日本生命が支える「ニッセイ基礎研究所」のチームによって行われたこともこの状況を反映しているといえるかもしれない。その意味では、日本におけるこの分野の研究の進展が望まれる。また、アメリカ以外での進展状況も知りたいものである。

この本は、アメリカをフィールドにしてつくられた本であるので、そのつもりで読まなくてはならないとはいえ、数十年の研究の蓄積があり、今後の日本での展開を考えるうえで参考になる書籍といえよう。私の「人生後半期の生き方」研究にも示唆を受けること大の書籍であった。これからこうした書籍を読みこんで、私の考えを深めていきたい。

参考のために、章タイトルを記しておこう。

- (1) ジェロントロジーとは
- (2) エイジングの歴史的変遷
- (3) 現代社会に描かれる高齢者像
- (4) からだに生じる加齢現象
- (5) こころと知能の加齢現象
- (6) 社会生活と加齢の関係
- (7) 人間関係と家族介護
- (8) 高齢者を取り巻く雇用環境と実際の退職
- (9) 高齢期の所得と住まい
- (10) 社会的不平等
- (11) スピリチュアリティ
- (12) 死と死ぬこと
- (13) 加齢にともなう変化への適応
- (14) 地域サービス



- (15) 医療と介護
- (16) 高齢化と経済問題
- (17) 政治と行政
- (18) これからの社会とジェロントロジー

## 老いの自覚「身の引き方」 (2008年5月17日)

先日、生徒と話をしていて、聞こえにくくて近寄ったことがあったが、他の教職員は別に近寄ったりしなかった。職員会議のおりにも聞こえにくいことがあって、発言者に近づくこともある。そんなことから、少しだが、耳が遠くなりはじめたのかな、と思ったりもする。

卓球大会で、ビデオをとってくださった方がおられ、そのビデオをみたが、私の姿勢がやや「老人」くさい感じがしてしまった。

こんなことで、時々「老けたなあ」と思わせられることがある。日常生活に支障がでるようなことはとくにはないが、いやおうなしに、「老いを自覚」させられることがあるのである。

こんな話を恵美子にすると、そんな風に思うから、年寄りくさくなるのだ、という。でも、「老い」を受け入れ、それなりに動くことも大切だと私は思う。

「万年青年」ということを強調する人が結構いる。私は、そうはしない。以前は自分自身「若い」と思っていたが、「若さ」を気負うと、かえって失敗する。自分なりの年齢相応に体力的にも精神的にも「老けている」ことを受け入れたほうがよいと思う。それをいい方のかえていうと「円熟」ということだろう。言葉を言い換えたから事態が変わるわけではない。しかし、捉え方が変わることで、新しいステージへの向い方は異なると思う。そういう意味では、私は「若さ」を強調するよりも、自分なりの「熟成」を強調したいと思うのである。

「熟成」ということは、ある意味では、それまでの自分のステージから上手に「身を引き」、自分なりの新たなステージへと上手に移っていくことでもあると思う。私自身は、50代ははじめまで「身の引き方」が下手であった。私に限らず働きバチ男性の多くは、「身の引き方」が下手なことが多い。

「身を引く」ということは、新たなステージを自分なりにつくるということだ、ということを経験したときには、「身を引く」ことは、決して悪いことではなく、むしろ創造的なこととして受けとめられるように思う。

## 「アンチ・エイジング」という言葉にひっかかる (2008年10月15日)

このごろ、「アンチ・エイジング」という言葉にしばしばお目にかかる。日本語で「老化防止」と説明がつけられていることもある。商品宣伝の場では日常的に使われている。この言葉が使用されている場面場面での意味はわからないでもないが、安易に使われすぎているのではないか。

そこでは、ほとんどの場合、「エイジング」という言葉が悪い意味で、「避けなくてはならならこと」「敵」のように使われていることが大半である。

「エイジング」は簡単にいえば、「年をとる」ことである。それが「悪い」ことであるかのように見るのが大いに気になる。無論、「年以上にふけて見える」ことを避ける・防止するという意味に限定されて使うことに異議申し立てをするつもりはない。しかし、その裏に、「年をとることが悪い」ことであるという考え方が結構潜んでいる。

私は小さい時から、「年をとってみられる」ことに抵抗がなかったどころか歓迎さえした。実際、年以上にみられることが普通であった。最近になって、ようやく「年相応」にみられるようになった。

私は、「年をとる」ということは、それだけ熟したということであり、豊かになったということだと思う。

もう一つ、「年をとる」ことは「自然」なことである。「年相応に豊かに熟していく」ことこそが大切なのではないか。だから、私は「不老不死」という考え方は好きではない。自然の流れのなかで、だれもが「老」「死」を迎える。それをいかに豊かに迎えられるか、「自然の流れ」のなかで迎えられるかが大切だと思う。

「自然」に抵抗して、あるいは「自然」を克服して、「不老不死」を得ようなどとは、「自然」に対して失礼だと思う。歴史的にみると、「不老不死」を追求したのは、その時代の王様とか権力者であることが多かった。

「老」「死」は悪いことではなく、それに比較的近い人もそうでない人も、自然の流れを大切にしつつ、豊かにハーモニーを奏でながら、ともに生きていくことが大切なのではないか。その意味では、「老いた人」を、それだけで否定的に見るのがおかしいと同様に、「若い人」を「若い」からといってないがしろにするのもおかしい。

老若ともに大切しながら、暮らすことが大切だと思う。

## 老いの迎え方

(2010年2月15日)

店頭で、祖父江逸郎「長寿を科学する」(岩波書店2009年)で見つけ読む。そろそろ老いの時期へと移り始めるので、あらためて老いについて考えてみよう、と思ったからだ。著者は、この方面の医学での権威のようだ。

とくに衝撃を受けるような記述があったわけではないが、私自身の老いの迎え方をどうするか、について、考えるきっかけがいくつかあった。

たとえば、英語のライフがもつ、生命、生活、人生という三つの質について、

生命の質—身体—機能形態障害—ホメオスタシス機能・・・・

生活の質—個人—能力障害—知覚、運動反射機能・・・・

人生の質—社会—社会的障害—高次大脳機能、社会活動機能、コミュニケーション機能・・・・ P62

という図は、老いを考える視野として面白い。

そして、

「全体として、バランスがとれていることが重要で、元気ならばバランスの崩れがなく、調節能力を維持している。高齢になるとホメオスタシス（恒常性）機能は低下し、その調整能力の幅は縮小してくるが、それなりの状態でバランスが保たれていることに健康維持の意味がある。」という記述は含蓄があり、老いへの対応のヒントになる。

私自身は、これまで「体力」という一般的なアプローチで、自分の健康をとらえることで済ませてきた。もう少し分け入って、とらえるとともに、それらのバランスということでも考えたい。

たとえば、

1. 疲労回復力等の基礎体力
2. 目耳などの知覚能力
3. 運動能力
4. 呼吸器・消化器・循環器などの状況
5. ストレス対応を含む気力
6. 知力
7. 社会対応

といったもの、おのおのについてどうなのか、ということと、それら全体のバランスはどうなのか、ということだ。2～4などは、人間ドックなどの定期検診、またスポーツなどで測れるので、認識しやすい。最近、関心を持ち始めたのは1だ。また、これまで「タカをくくって」いたが、5、6、7についても、あらためて関心をもっていく必要があるようだ。

ところで、こんなことを書くと、「年より臭い。こんなことを考えると、余計に年寄り臭くなるよ」と言われそうだし、「気力をもって、バリバリやることだよ」ともいわれそう。だが、私はそういうタイプではない。気持を若く持つ、というのはいいことだろうが、自分なりのバランスを考えることのほうを好むのだ。

## 老いへの関心 多様な60代男性…「老いのかたち」を読む1

(2009年9月21日)

書店で、買おうか買わないか迷いつつ買った黒井千次「老いのかたち」（中央公論新社2010年）を読む。

私も、いよいよ「老」という言葉が近づいてきた。映画館入場、航空券などシニア割引が、あてはまるもの、まもなくあてはまるものがでてくる。地域の「老人クラブ」加入の誘いがあったりもする。

ということで、私もどのように「老いる」のかについての関心が少しずつ出てきている。タイトルの「老いのかたち」のなかの「かたち」という表現が興味をひく。

何回か連載するかたちで、本書を紹介しつつ、わたしなりの「老いのかたち」の考えを深めていきたい。

1) 「父親が活着ている間、息子はいつも先行する父親の年齢を数えながら日を送っていた。」 P 3

私は、2、3回、そうした経験を持つ。洋服仕立業だった父親とは職業が異なるなど、人生行路がほとんど異なるので、こういうことを考えることが少なかったのだろうと思う。しかし、60歳以降、「老い」の道を歩み出す時期になると、共通している部分が増え始めそうだ。

ということで、本書を読んで、あらためて父親が、私と同年齢の時期はどうしていたか、それ以後はどうであったか、と思い起こし始める。計算をしてみると、父親とは28才違いだ。とすると、28年前、父親がどうであったかを思い出せばいいことになる。

ところが、一緒に暮らしていたわけではないので、なかなか思い出せない。思い出した時に、書こうと思う。

2) 「昔に比べ、今は老人の生きる形というものが見えにくくなってしまった気がする。」 P 5

確かに、標準的というか、平均的というか、形は見えにくい。とくに男性の場合、そんな感じがする。同年齢をみても、大学教師の同業者を例にとれば、専任の仕事で働きずくめの人、私のように非常勤的な仕事をしている人、職業生活からは引退した人とさまざまだ。近隣の人たちを見回すと、勤め人を続けている人、農業をしている人、勤めを辞めて農業や非正規勤務など別の仕事についている人、趣味に打ち込む人、社会的活動に忙しい人、療養中の人など、様々だ。

男の六十代の場合、どうしても職業との関わりを軸にして、「生きる形」は多様だ。体の具合による違いも大きい。だから、標準とか、平均とかいっても、ほとんど意味がなさそうだ。

## 「新しい年齢イメージ」…「老いのかたち」を読む2 (2011年3月15日)

前回に続く話だ。

3) 「いずれにしても、年齢相応に老いていくことの困難な時代が到来した。若さや体力ばかりが尊重され、歳にふさわしい生の形が見失われようとしている。幼年期や思春期や壮年期に、それぞれの季節にだけ稔る果実があるのだとしたら、老年期には老年の、老いに特有な美しい木の実があっても少しもおかしくはない筈だ。」 p 21

「若さや体力ばかりが尊重され」というのは、そうだな、と思う。そして、「歳にふさわしい生の形」が、「標準的なもの」とかではなく、「その人なりのもの」が構想されれば、いいことだ、と思う。私は私なりのものを構想していきたいと思う。

4) 次の文は含蓄に富む。

「人が歳を取らなくなったのではなく、人は以前のように歳を取れなくなっていると認識すべきなのだろう。

年齢にまつわる古いイメージが失われ、より良くなった寿命に関する新しいイメージが生み出される前の端境期に我々は立たされているに違いない。自分の年齢をいかなる老いの形に流し込めばよいかのわからぬ戸惑いが、歳を取れぬ状態へと人を追い込んでいる。とりあえずの応急処置とでもいうかのように、幾つになっても元気で若々しい老人の姿のもてはやされる傾向が見られるが、それだけで老いの確かなイメージが成立するとは思えない。体力の維持や健康は老年に必要なものではあるだろうが、それに支えられた生の内容がどのような形で暮しの中に現れるかが問われぬ限り、年齢にふさわしい老いの姿を思い描くことはかなわない。

人が歳を取れなくなってしまったことは我々の必然ではあるのだが、それを喜んだりそれに困惑するのではなく、その事態を一つの可能性として捉え、そこから新しい年齢イメージの構築へと歩み出せぬものか、と老いの中で夢みている。」 P 89

鋭い指摘だ。マスメディアや健康診断などを通して、高齢者は医療や健康についての情報に追われている雰囲気さえ感じる。それらの情報をとおして、ここで指摘されるような認識が間接的に強制されている感さえする。

私は、この論にほぼ同感であるが、「構築」される「新しい年齢イメージ」は、多岐的であるし、個人によって創造されるものだろう。そういう多岐的、個人創造物として「新しい年齢イメージ」が構築されると考える。

私自身も、私なりのものの創造に取りかかる入口に立っている。

## 自然に老いる・・・「老いのかたち」を読む3 (2011年3月18日)

大変興味津々な表現をいくつか見つけた。並べてみよう。

「自然に老いていけばいいではないか」「どうすれば自然に老いられるのか」 P 9

「いつから我々はこんなに健康の信奉者になり、病の敵対者になったのだろう。その中間あたりに、老化を素直に受けとめる姿勢が認められてもいいのではないかな。もし健康な老化というものがあるとしたら、それが一番望ましいのではあるまいか」 P 13

「老いていこうとする気力もまたあってよいのではないかな。老いを拒み排斥しようとするのではなく、生命の自然としてそれを受け入れようとする立場もある。そして老いを肯定し我が身に受け入れるには、やはりそれなりの教育力が求められるのではないかな。老いる気力である。」 P 183

「七十代に達した後、更に八十代、九十代の先を夢見ることは必ずしも不可能ではないとしても、それはあまり他人に迷惑をかけずに生き続けようとするような、ささやかな願いにとどまるのではあるまいか。

ここまで来てしまった以上、何かの手段として役立たず、とりわけ利用価値もない今の我が年齢に正面から向き合い、その中に何が隠されているかに思いを馳せる方がより賢明であるに違いない。

見方を変えれば、そこにあるのは生きるという目的を持ち、その手段をも兼ねる刻々の現在それ自体である。この贅沢な時間を存分に味わうことが許されるのは、七十代を過ぎて更に齢を重ねる人々の特権である、と考えたい。」 P 212～3

大変刺激的であると同時に、納得のいく指摘だ。

私は、いたずらに若く見せようとするのは好きでない。年齢相応でいいのではないか、と思う。むしろ年齢以上にみえることを好んでいたことさえある。

これらの文には、老いることを肯定的にとらえる姿勢がある。そのなかで、現在を充実して生きようと言う姿勢がある。

やりたいことが沢山ある人がいる。私もそうだ。だが、老いに向かう時、沢山できるわけではない。これまでのペースを落とし、仕事を縮小していくことが求められる。そうした縮小上手である必要がある。

このことは、余りにも発展拡大できた社会についても言えるのではないか。縮小して、それ相応のありようへと向かう必要がある、というのが現代社会の位置であり、課題ではないか、と私は思う。

## 老いのイメージ…「老いのかたち」を読む4 (2011年3月21日)

本書は、「あっ、そうなのか」と改めて気づかされる文が随所に並ぶ。次のいくつかの文もそうだ。

「老いは自分の内側から訪れるというより、むしろ他人によって運ばれて来る。多くの人が語ったり書いたりしているが、乗り物の中で若い人から初めて坐席を譲られた時の衝撃は容易に忘れ難いものがある。相手の親切に感謝はするけれど、その時こちらも相手の目で自分を眺めることとなる。老いた人物が疲れた表情で吊り革につかまって立っている光景が浮かんでいる。好意を素直に受け入れられるようになるまでには、老いの自覚といった手続きが必要であるらしい。」P71

しばらく前のブログ記事で書いたように、私も同じ体験をした。記事にするぐらいだから、『衝撃』ではあるが、私にはなぜか「老いを認知された嬉しさ」のようなものがないわけではない。

「自分を老人であると思ったことは一度もない、と断言する男性に出会った記憶がある。髪は薄くなっているものの背筋はぴんと立ち、声に力があって言語は明晰だ。話の内容から察するに八十歳前後には到達している。(中略)羨ましい限りではあったけれど、それではこの人の老年はどこへ行ってしまったのだろう、と疑う気分も芽生えた。心身ともにあまりに健康であると、老いる自分を眺める側の自分が育ちにくいのかもしれない、といささか失礼な心配まで覚えた。」P82

私も、同じような人に出会うことがある。そんなかたを「老いを眺める側の自分が育ちにくい」というのは絶妙な表現だ。

20年ぐらい前の日本生活指導学会での討論の折、医療看護に携わる方から、介護をめぐって「世話上手」だけでなく『世話され上手』ということがある、という発言にすごく示唆を受けたことがある。そして、「世話され上手」になりたい、と思ったものだ。それは「甘え上手」ということでもある。自立とか自己責任とかが強調される今、こうしたことはとても大切だ。いずれも、「つながり上手」ということにもつながることだ。そして、いずれも、男性より女性が「上手」だという現実がある。

これらも「老いを眺める側の自分」を育てることにつながろう。あるいは、良い意味で「老いを育てる」ことにもなろう。そのことにかかわって、次の記述にも注目したい。

「寿命が尽きるまで元気に過すに越したことはないけれど、一方には老い遅れといった現象もあるのではないかと、との妄想が頭を掠めたりする。静かに間違いなく老いていくことを課題として老年を生きるなら、老い遅れには気をつけた方がいい、と自分に忠告するのはやはり負け惜しみなのであろうか。」P117

なるほど、と思う。「年齢の節目が消えた」ことを論じた別の個所では、

「古稀、喜寿、傘寿などといった年齢の節目は、ただ言葉として残るのみである。もし節目にそれなりの力が宿っていれば、そこに爪を立てて年齢相応の老いのイメージを掘り出すことが叶うのかもしれない。老人とはこういうものだ、といった共通の認識が生れるのかもしれない。威厳にせよ貫禄にせよ、温容にせよ枯淡にせよ、老人にふさわしい生の佇まいはそのような認識を基礎にして保たれて来たのだろう。ただ年齢不詳の元気な老人がふえただけでは、老いが豊かになるとはとても思えない。」P174~5 とも述べる。

共通の老いのイメージが見えにくくなり、社会的に共通する「年齢の節目」をつくるのが難しくなった今、老者が自分なりのものを作り、他の老者と、あるいは老者以外の人たちと、そのイメージについて語り合う事は有意義だと思う。

## 祖父母と孫・・・「老いのかたち」を読む5

(2011年3月24日)

「祖父母はもっと高い場所に、遠く立っていたような記憶が残っている。一緒に遊んだ覚えはないし、別の世界に住んでいる人、といった印象の方が強かった。そして思うのだが、祖父母と孫の距離が縮まったのは、専ら祖父母の方が孫に近づいたために違いない、と。権威とまではいわないとしても、オジイチャン・オバアチャンと呼ばれる存在にかつて備わっていた人間の形が、今は崩れてしまったような気がしてならない。」P20

私の体験からの感覚とも重なる。私の祖父母イメージは、威厳・権威と優しさ・温情とが共存している。

「年齢相応に老いていくことの困難な時代が到来した。若さや体力ばかりが尊重され、歳にふさわしい生の形が見失われようとしている。幼年期や思春期や壮年期に、それぞれの季節にだけに稔る果実があるのだとしたら、老年期には老年の、老いに特有な美しい木の実があっても少しもおかしくはない筈だ。そしてかつて存在した老いの形とは、その実を収穫するための身構えでもあったのだろう。

幼い孫を連れて遊びに来た息子や娘の一家を送り出す休日の夕暮れの光景は、平和で心和む眺めである。と同時に、ふとなにかの欠けてしまったような危うい気分を誘い出されるのは、そこに老いの形がはっきりとは認められぬ故であるような気がする。」P21

ひるがえって、私と孫たちとの関係を考える。距離は近いし、比較的対等だ。私の事を「マコト」と呼ばせて、「おじいちゃん」とは呼ばせていない。だが、べったりの関係はない。30分から1時間ぐらいは付き合いが、それ以上になると、「疲れる」というか「飽きる」。だから、持続的に面倒をみることはせず、「自分でやりなさい」と放る。孫の方も、私のそういう対応に慣れているせいか、長時間くっついてくることはない。

もともと、こういうことは、自分の子どもに対してもそうだったように思う。子ども好きではあるし、子どもとつきあうのをいやがるわけではないが、子どものいうなりにつきあう、子どもに囲われて付き合いのはできない。

## 老人と周囲の人間との関係・・・「老いのかたち」を読む

(2011年3月27日)

次の指摘も興味深い。

「老年の理想像などというものを簡単に求めない方がいいのかもしれない。身も心も預けられるような理想像などありはしない。そしてもしあるとしたら、それは個々の老人の姿としてではなく、老人と周囲の人間との関係を通してしか見えてこないだろう、ということだった。」P197

「老人と周囲の人間との関係を通してしか見えてこないだろう」というのは卓見だ。それは、老人が、老人である今だけでなく、それ以前からどういう関係を築いてきたかをもとにして作られるものであろう。それについて、私なりに考えたことを書こう。

人間関係というと、邪魔になり合う関係、世話し合う関係、支え合う関係、といろいろある。これらは、双方向の関係だが、一方向関係だけに焦点が当たることも多い。介護・世話などがそうである。財産を与える関係もそういうことが多い。

しかし、私としては、そうした一方向関係とみられるものも含めて、すべての関係を双方向の問題としてとらえたい。

考えの基準になる関係を端的に表現すると、幸せを与えあい作り合う関係なのか、それとも取り合い(奪い合い)競い合う関係なのか、ということである。別の角度では、ヒト関係で豊かなのか、モノ・コト関係で豊かなのかも問われる。

ここ50年間の日本は、経済成長に象徴されるように、急激な「発展・成長」の時代であり、取り合い(奪い合い)競い合う関係、モノ・コト関係が優位に進んできた時代である。とくに男性の多くは、その渦の中で生きてきた。それが、人間関係が薄く孤独な高齢者男性を大量に作り出しているのではないか。

そして、20年ぐらい前から、時代変化を模索する動きが芽生え始めた。大量生産大量消費ではなく「生活の質」



を問題にし、人間関係を大切にしようと。しかし、人間関係トラブル、孤独はさらに増えているようだ。切り替えは依然としてうまくいかず、なお「景気回復」を求める旧来の流れが強い。

高齢者をめぐっても、「長寿競争」「健康競争」ともいうべきものが流行し続けている。これまでは登っていく時代であったが、それが定常化、ないしは下っていく時代へと転換しつつある。登っていく時代には、下っていく老人が、『必要悪』の存在になってしまう。下っていく時代は、むしろ老人にふさわしい時代、というのは、「問題発言」だろうか。

高齢者が、人間関係のありようを豊かにするとはどういうことなのか、高齢者以外の人々を含めて、さらなる問い直しが必要なようだ。

## 人付き合いが下手な日本人男性老人・・・「老いのかたち」を読む7 (2011年3月29日)

本書に、中国で、「老人達、とりわけ男性達が群れている点」に注目している個所がある。P127  
また、日本でも「老いた女性はそれなりに群れる力を持っているように感じられる（中略）。老いた日本人男性だけが孤立を深めている気配がある。」と書かれている。P129

中国の例から考えると、男性老人一般ではなく、日本の男性老人が孤独がちだということだろう。そして、男女寿命の差は、長寿の男性老人の数が女性より少ないということであり、かれらの孤独傾向を生みやすい。

それにしても、日本の男性達が男性相互で付き合うことが上手になるには、何十年と時間がかかりそうだ。だとしたら、男女入り混じって、というか沢山の女性のなかに、少数でも男性が入って、老人たちの人間関係を豊かにするというありようを広げていくのも一つ道筋であろう。

私も、周辺を見渡すと、出会う男性数よりも女性数の方が多感じがする。卓球などでも、女性が年と共に増える、というか、男性が減る。集落の「敬老名簿」を見ると、それが歴然としている。私も、否応なしに、女性を交えた人間関係を増やしていくことになるだろう。幸い、男性が少なく女性が多い場に入ることには慣れている。

## 進歩・発達とは異なる意味を見出す・・・「老いのかたち」を読む8 (2011年4月1日)

本書には、次のような印象的な一節がある。

「一つ拾っても一つこぼすような行為は愚かなのかもしれない。もっと頭を使えばいいのに、とか、別のやり方を工夫出来ぬものか、などと苛立つ人も多いに違いない。失敗から学んで他の方法を探ろうとはせず、ただ頑固

に同じことを繰り返していたのでは進歩がないではないか、と非難もされるだろう。

しかし様々な進歩の先がどんな場所に我々を導いたかを振り返れば、同じ所に踏みとどまって同じことを繰り返すのも、あながち無駄とばかりはいえぬような気がする。

考えてみれば、日常生活の基本にあるのは同じことの繰り返しである。若い日にはその繰り返しの中から学習や進歩が生れることもあるだろう。老年の繰り返しの中に隠れているのは、確認や瞬間の充実である。だから、心配なら幾度でも会合の通知を調べればいいのだし、落としたものは根気よく拾い続けられればよい。」P93

これまでの数十年間という時代は、社会がすごいスピードで進歩してきた時代であり、その中に生きる人々もすごいスピードの進歩、発達が求められてきた。

その中では、老年期にある人も進歩や発達が求められ、そのために健康・長寿が求められ、有用さを発揮できる生き方が求められた。できるだけ長生きして、かつ死ぬまで有用に生きることが求められる。

そこでは、万年青年だと胸を張ることが良いことだとみなされる。そうできない人が辛い気持ちにさせられる。迷惑をかけない死に方をしたいというので、「ぼっくり死ぬ」ことを祈る人がいるが、なぜかバリバリ活躍する人に多い。

だが、異常なほどの進歩を求める惰性が根強い社会のなかで、逆に、それへの問い直しを求める動きも芽生えている。それは、進歩・発達とは異なる世界を見出し、それらとは異なる意味・価値を見出そうとする動きでもある。

そのなかでは、下りる・縮む・止まる・退くといったことの肯定的意味・価値は何なのかの探求が行われる。あるいは、味わう・楽しむ・休む・熟する・見えてくるといった、有用性のうえで高くは評価されてこなかった行動様式の意味を見出す動きも重視される。引用の中での「繰り返し」「確認や瞬間の充実」もそうしたことだろう。

こうしたことは、老年期に行われやすい。社会も個人もゆったりとした穏やかな時代になることが求められていると思う。

## 男女共学風カップル・・・「老いのかたち」を読む9

(2011年4月3日)

かつてよくいわれた<濡れ落葉>にかかわって、次のように書かれている。

「最近、そういった老カップルをあまり見かけなくなった。女性が元気である点は以前と変わらないが、同じ歳頃の男性達が前に比べて元気になった印象を受ける。不機嫌な妻に従って黙って夫が歩くのではなく、どこか男女共学風に肩を並べて語りながら足を運ぶ二人連れが多い。かつてはカルチャーセンターとか成人学級とかに集るのは圧倒的に主婦であり、男性はほとんどいなかったのに、近頃は定年過ぎと思われる歳頃の男性が著しくふえて来た。勤めを離れた男性連が自由な時間の扱いによりやく馴染み始めた現れなのだろうか。そしてその結果、<濡れ落葉>の影は薄れ、男女共学風カップルがふえて来たといえようか。」P131

そういえば、<濡れ落葉>は減ったかもしれない。男女共学風カップルとは、絶妙な表現だ。

戦後まもない時期に「男女共学」を体験し、青春時代を送った方々がいまや70代～80代初めだ。すると、その戦後世代から少しあとの団塊世代が、70代になると、どんなカップルの姿を見せるのだろうか。私たちは、その団塊に入りかけるころの世代だが、周りから見れば、男女共学風カップルかもしれない。まだ老齢期に入りかけの年齢だが。

私たちが住んでいる地域では、夫婦で散歩する姿はまだ珍しいので、私たちの散歩姿は、少々目立つかもしれない。一人で散歩していると、出会う人に「奥さんは一緒でないの」と声をかけられてしまう。

男女共学風カップルは、都市が先行しているのだろう。私たちが住んでいる地域では、家の外では、夫婦単位の行動よりは、女性どうし男性どうしの行動の方が圧倒的に多い。

これで、本書についての連載を終える

## 段差のつまずき 老人会加入年齢 (2011年4月27日)

段差につまづくことがしばしばになってきた。先日、愛知教育大学の食堂の階段でつまずいた時、思わず隣の職員の方に手を差し伸べられた。自分の家でも、そうしたことがある。階段や段差で足を上げる際、自分が考えているほど、足が上がっていないのが原因らしい。

先日の愛知旅行では、地下鉄の切符の値段を間違えて、「出口で精算が必要です」ということになってしまった。「金山から赤池までは260円だ」という思い込みがあった。バスの料金払いで、両替と支払いを間違えることもした。空港で土産物を買う時、品物と『見本』を間違えてレジにもって行って、店員が取り替えに行ってくれたこともあった。

以前ならしなかったような間違いが連続して、少々いやになってしまった。小さなことだらけだが、自分の現状をより正確に受け入れ、もう少し丁寧に物事をする必要があるようだ。

ところで、先日、集落の老人会の方から、老人会に参加しませんか、との勧誘を受けた。数え65歳からが有資格者なのだ。すでに資格はあるのだが、加入してなかった。どんな活動をするのですか、とお尋ねしたら、まずはゲートボール、グランドゴルフが挙げられた。その場は、「卓球をしているので、スポーツの方は、まにあっています」と、口を濁した。

いずれは入会しようとは思っているが、いつにしようか、思案中だ。そんな時、市の老人会かどこかでは、加入年齢の引き上げが話題になっているらしい事を聞いた。我が集落では、数え65歳以上となると、三分の一の住民が有資格者になってしまう。集落内の仕事の分担を考えると、老人扱いの人が増えすぎて困るということも出てくる。

事情は個人によって異なるので、一律には行かない難しい面がありそうだ。リクツの問題だけでなく、自分自

身の問題としても、いろいろと考え行動していく必要が出始めている。

## 「長寿化」への疑問 宮本本7 (2011年11月16日)

佐藤龍三郎執筆の第2章のなかで、長寿化をめぐる次のような指摘がある。

生存曲線というグラフがあり、それが1970年から2005年にかけて、以前とは異なる、次のような特徴を示している、という。

「中高年の死亡率改善がすでに限界まで実現しており、これまではあまり見られなかった高齢者の老化そのものに起因する死亡の改善という新しい段階に進んだ」という。そして、「将来、この傾向はさらに進」むという。

P49

そして、「このような日本の長寿化の背景要因」として、次のような説を紹介している。

「菜食中心の伝統的な食文化、清潔な生活環境と伝統的な衛生習慣・健康志向、社会的な格差が比較的小さく文化面・コミュニケーション面での平等性が高いことなどを挙げている。」

これに加えて、「また温暖な気候、国民の教育水準が高いこと、戦後全国民をカバーする公的保健医療制度が完備したことなども考慮されよう。」と指摘している。P51-2

これまでの事実としては、「そうだろうな」と思うとともに、これからもその方向で進むといわれると、「そうかなあ」と、首をひねりたくなることも多い。

たとえば、こんなことがある。

1) 「中高年の死亡率改善」が進み、もっぱら老化に焦点化されると言われると、「中年は大丈夫なのか」と気になる。とくに男性について、そう感じる。生活習慣病のことがよく指摘されるが、それ以上に、働き過ぎや激変する雇用環境などと結びついたストレス過剰が、「長寿への道」の途中で重大な影響を及ぼしている。それは減少するどころか、むしろ拡大傾向にあり、健康診断や生活習慣病対策などの従来の予防医療の枠を超えて、社会的問題として存在している。

そして、中年期、あるいは中年期を迎えようとする男性が、その問題に向きあい、そうでないありようを希望し追求しようとしているのか、また、希望・追求しようにも、そうでない環境にありはしないのか、という問題が拡大している。

2) 「生活の質」が問題にされるようになってきたが、長寿であっても、その「生活の質」が問われる。やりがい、生きがい、楽しみ、充実感、存在感をもてる長寿なのか、という問題だ。本人意思というよりも医療によって「生かされている」ありようを疑問視する声もある。

3) 「長寿化の背景要因」としてあげられているもので、現在なおそういえるもの、将来もそういえるものが、どの程度あるのか、も問わなくてはならない。低下・悪化・消滅するものがありはしないだろうか。

4) そんななか、「限りなく長命がいい」というのではなく、「どの程度の長命がいいのか」という考え方が増加していくのではないか。

これらの問題は、長寿化にともなうライフスタイルの問題につながる。

## 「前期高齢期」「向老期」 宮本本13 (2012年1月9日)

ライフコースの後半期について、宮本さんは、さらに次のように述べる。

「長寿化によってもたらされている大きな変化の一つは、出産期間や子どもの養育期間など、ライフコースの前半期が短縮しているのとは対照的に結婚後の夫婦継続期間が半世紀と長期化していることである。また、子育て終了後の脱扶養期間（空の巣期=子どもが巣立った後、巣が空になる期間）が著しく長期化したことである。

日本で1970年代に、高齢期への関心が高まったのは、このような長寿化の影響が明確になってきたからである。人生後半期が著しく長期化したことは、ライフコースの多様化をもたらす原因でもあった。

高齢期を前半（前期高齢期または向老期）と後半（後期高齢期）に分けることもある。前半に関しては、元気な高齢者が増加しているため、中年期と高齢期の境界ははっきりと区分できるものではなくなっている。」P85~87

このなかの前期高齢期または向老期といわれる時期の変化は、ここ20~30年間著しい。「夫婦継続期間」の「長期化」も「脱扶養期間」も、「中年期」からこの時期を含む期間だ。そして、生活維持のための所得を得る目的の職業生活をする時期が延長してきている。以前なら、55~60歳までが目安だったが、いまや60~70歳までが目安になり、まさにこの時期のことだ。

そして「中年期と高齢期の境界ははっきりと区分できるものではなくなっている」のはその通りだ。社会的な境界区分よりは個々人の境界区分の方に意味があるだろう。それは、自己判断の問題でもある。私もその時期に該当するが、むしろ積極的に「高齢期」への境界を区切って「高齢期を迎える」方が得策ではないのか。そしてそれは、『引退』とかを意味するのではなく、むしろこの時期がもつ積極性を押し出して、そこへと移行していくというありようがあっているのではないか。

私の場合、まだ決断したというわけではないが、その時期への移行に前向きである。用語上は「前期高齢期」「向老期」は、なにか積極性を感じにくいので、別の用語を探したいが。「熟年」などという用語は、積極性を表現したい意図が含まれているだろう。しばし、用語を考えてみたい。

こうしたことを考える上で、宮本さんの次の指摘は興味深い。

「1996年版『imidas (イミダス)』（集英社）に「ライフデザイン」という用語が初めて掲載された。この用語

が登場したのも、変動する時代背景があったからである。これまでの生活設計では、就職・結婚・出産・住宅取得などが、必ず辿る道筋として想定されていたのに対して、自分自身の価値観に沿った人生を積極的に創造していく行為を、「ライフデザイン」と表現したのである。」P87~8

社会的な「老人期」相当期間を「ライフデザイン」しつつ、その時期をデザイン、創造していきたいのである。これを私は「人生創造」といつてきた。

## 「新しい高齢期像」 逆算式年齢の私の提案 宮本本31 (2012年3月16日)

「9 高齢期の光景」(宮本みち子執筆)について何回か紹介・コメントしよう。私自身も対象世代にはいつてきたので、いろいろな考え・思いがある。

まず、章冒頭で次のように書かれている。

「長寿化に伴って年齢の意味が変化している。75歳までは高齢期ではなく熟年後期であり、高齢期は75歳以上とする認識へと変わりつつある。(中略)多様なライフスタイルが可能な高齢期を実現するためには、年齢にとらわれないで活躍できる社会環境条件を整える必要がある。」P159

このことに関わって、つい最近ふと思いつてことがある。

年齢というと、出生から積み重ねていく数え方だ。70歳なら、だれが何と言おうと、70歳という客観的年齢だ。それを逆算していったらどうなるか、と考えをめぐらしたのだ。90歳死去の人が、生後70歳なら、20歳ということになる。平均余命の考え方でもある。

無論、「客観的年齢」として計算するには、没年から逆算するから、今生きている時に、その計算はできない。しかし、年齢には「主観的年齢」というものがある。計算上の年齢は70歳だが、「気持は50歳だ」という言い方はよくする。

このことをさらに応用して考えてみるのだ。自分の「つもり」として90歳までにしたい人が、生後70歳なら、「私は20歳です」というのだ。

その際、「つもり」の設定の仕方もいくつかありうる。医学的死で設定してもいいが、「ぼけないで精神活動を十分に果たしうる」年齢と設定するのもいい。自分ではどうにもならない重度の介護を受ける時を設定してもいいだろう。

ポックリ死のつもりの人は、これらを一致させたい人のことだろう。あるいは、最後までしっかりとした「老衰」型死の人もそうだろう。そうした願望を持つ人は多い。だが、現実にはそうならない人が多い。

だから、「ぼけないで精神活動を十分に果たし」「自分ではどうにもならない重度の介護を受けない」時までを設定するのが現実的だ、と私などは思う。

そうして、その年数をたとえば20年と設定して、それまでの生活をいかに過ごすかを考える。

そして、そのうちの前半10年を、社会的活動4、趣味4、家族世話・介護2

後半10年を、社会的活動2、趣味4、家族世話・介護2、子・孫への継承作業2

というように、構想して人生計画をたてるのだ。

この発想は思いついたばかりで、有用がどうかはわからない。高齢期になると、生後の年齢は同じでも、実質的な年齢は人さまざまなので、こんな発想は一つのアプローチになるかもしれないし、当人の積極的にかかわりが可能なので、面白いかもしれない、と思う。

次の記述は、私の人生後半期の提案ともかかわる。

「退職後の生活満足度が高い人は、在職中からすでに仕事よりも趣味や私的な関係を優先している傾向があり、退職後はそのままならかに着地している。」P168

私は、60歳前後に退職を予定している人にたいして、おおよそ45歳前後にスタートする人生後半期に、後半期の計画立案・準備・実行へと移行していくことを提案したことがある。それは、仕事→リタイアの二分構図から卒業するということでもある。上記の提起は、このことと関わりが深い。

最近出あった定年間近の人に、退職後生活の準備をすることなしに、ここまで来てしまったという話を聞いた。そう言う男性で、職場での付き合いもあって、ゴルフをするイメージはあるとか、配偶者が主導する提案で、旅行を考えるとかいうのは、よく聞く話だ。

そうしたなかで、退職後の継続雇用の話、高齢者向けの仕事おこしなどは、よく話題となる。それらと多少関わる話として、次の指摘に注目したい。

「新自由主義の競争経済とは異なる、共生社会の原理が必要である。競争を緩和しながら「そこそこの暮らし」に満足して生きることができ、できるだけ弱者の犠牲を出さない住みやすい社会が目指す方向である。その担い手として、高齢者自身も力を発揮することのできる社会環境を作っていく必要がある。

団塊の世代が向老期にさしかかるこれからは、「新しい大人の文化」が開花することが予想される。このような文化においては、金銭や消費的豊かさでは味わえない質的豊かさが重視されるであろう。」P173~4

この項のタイトルは、「新しい高齢期像～福祉の担い手としての高齢者」だが、「福祉の担い手」という発想には興味がわく。

## 高齢期の暮らし方 男女差 宮本本32 (2012年3月20日)

「高齢期の暮らし方」をめぐっての男女差について、次のような指摘がなされている。

「一般的に女性の方が職業役割の喪失や労働環境の変化をライフコースのもっと早い時期に経験しているために職業の中断に対する耐性が備わっている。しかし、男性にとっては初めての経験であるだけ、アイデンティティを喪失しがちである。(中略) 日常生活のスキルを持たない男性は、退職後に「粗大ごみ」となる悲哀を味わっている。退職後の能動的な生き方に対する関心は高まっているが、生活の変化に適応できない男性の問題は続いている。」 P167

この問題は、会社か家事か、という二分法ではなくて、次のように、さらに視野を広げる必要がある。

「男性の場合、定年退職後は「これからは自分の生活が大切だ」「自分の生活を充実させて楽しみたい」「日頃の生活に充実感や楽しさを感じている」という意識が女性より強い。「趣味」、「交流」、「健康」が3つのキーワードである。

しかし、夫婦の間で引退後のライフスタイルに対する期待はしばしば食い違う。一般的に男性は、地域に人間関係を持っていないため、退職後のパートナーを妻に期待する傾向が強い。一方、妻の方は、子どもが巣立った後の孤独と対峙し、趣味や地域活動に人間関係を築いてきた人が少なくない。その結果、夫のライフプランと妻のライフプランは一致しない。2人の間にコミュニケーションがあり、双方のギャップを埋める努力がなされるかどうかで、向老期の夫婦関係はよくもなれば悪くもなる。」 P167-8

この指摘は、終身雇用制職場で定年まで働き退職した女性の場合にも、男性ほどでないとしても同様に該当することがある。

退職前までは、会社か家事・育児かということになり、地域や自主的組織・関係が浮上してこない事態が広く見られる。在職中から、仕事以外の関係を作ることが重要である。また、家事・育児中心の生活を送っている人でも、それ以外の関係が薄く、閉鎖的な家事・育児になってしまう例は近年では多い。

他方、地域の方でも、伝統的な関係に囚われて、会社勤めや専業主婦が関わりやすい条件を用意していない例もないわけではない。若い時代から、地域や自主的組織・関係を意識し、「自分の生活を充実させて楽し」むことが出来るようにしていきたい。それは、これまでの私の人生後半期についての提案が視野に入れてきたことであり、「地域おこし」と「人生おこし」とを結びつけようというものである。

## 高齢者は誰と住み、どういふ介護を受けるか 宮本本33 (2012年3月24日)

「高齢者の居住形態」にかかわって、次のような記述がある。

「60歳以上の男女を対象とした調査によれば、子どもや孫との付き合い方として、「いつも一緒に生活するのがよい」が、1980年には約6割と多数を占めていたが、2005年では35%まで減少し、それに替わって「ときどき会って食事や会話をするのがよい」が3割から4割強へと増加し、両者が拮抗する状態にある。これから高



年齢期に入る世代は、それより上の世代に比べ、非農家、ホワイトカラー、高学歴、核家族というキャリアを持った人々が多くなってゆくと、人生観、行動パターンが家族依存型から自立自助型へと変化していくことが予想される。」p160-2

「家族依存型から自立自助型へと変化」ということを別のいい方をすれば、「宿命型」から「選択創造型へと変化」したということである。それを社会のありようにひきつけていうと、コミュニティ型からアソシエーション型への変化とも言える。

この変化を象徴するものとしては、コミュニティ関係が希薄な結婚（家族の結成）にある。夫婦単位で、職業・居住を、コミュニティ関係なしに展開する例が典型である。近年の移住者はほとんどがその傾向を持っている。そのため、移住先でのコミュニティ関係の形成にかかわらない人が多い。

にもかかわらず、生活はコミュニティ関係なしでやっていくことが出来ない。そこで、高齢者の場合でいうと、やむを得ずして、たとえば子どもと同居する、子どもの介護を受ける、という例がでてくる。また、そうではなく、「自立自助型」を商品購入と合わせて遂行しようとする例もでてくる。あるいは、「自立自助型」をアソシエーション的連携のなかで進めようとする人もいる。

そうした状況を示す例として、次のような記述がある。

「誰でも気軽に立ち寄れる「居場所」作りも各地で展開している。気軽に立ち寄れるタイプや食事や喫茶をメインにしたカフェタイプなどの形態があり、対象も高齢者向け、多世代向けなどさまざまである。高齢者世帯の安否を確認し見守る活動も広がっている（中略）。

介護保険制度の見直しの1つとして、介護保険サービスに加えて、市町村で提供される新しいサービスとして、「地域密着型サービス」が始まっている。このサービスを提供する1つの仕組みが、小規模多機能型居宅介護事業所である。これは、「通い」を中心として、要介護者の様態や希望に応じて、訪問や泊まりを組み合わせるサービスを提供する地域密着型の事業所である。夜間に関しては、地域夜間訪問介護サービスを置き、在宅の場合も、夜間を含め24時間安心して生活できる体制を確保することを目的とするものである。施設に入所せず、自分の家で継続して生活すること（在宅）を支援することを基本理念としている。」P173

そこで焦点になってくることとして、高齢者自身の選択創造がどれだけなされているか、ということが登場する。しかし、客観的事態としては、介護が必要になった際の多くの場合、当人の選択創造としてなされることは少なく、やむを得ず介護場面に入り、周囲の人々による対応判断によって進行することが多い。

私はできる限り、当事者が、アソシエーション的連携をもち、さらにコミュニティ的関わりを持ちつつ、「自立自助型」を推進するようになりたい、と考える。とくに商品購入の色彩を出来るだけ低くしたいものだ。福祉も商品購入型色彩が強いものと、当事者の選択創造型色彩が強いものがあるが、できるだけ後者の方向を追求したいものだ。

このあたりは、さらに深めて考えていきたい。

余談だが、近年、高齢者の死去にともなう空き家問題が広がり始めている。あるいは、高齢者の管理力を越え

た住宅状況も見られる。現代は、個人所有・相続所有の形を取っているとしても、それにアソシエーション的なかかわり、コミュニティのかかわりをどうするのか、という問題が存在する。たとえば、個人所有であっても、維持管理にはコミュニティとのかかわりを深く持つ建物が多い。

これらの叙述のなかに、次のようなものがある。

「超高齢社会における福祉サービスの供給をどうするかが大きな課題となっているが、生物学的な年齢で画一的に区分することをやめれば、新しい展望も開けてくる。若年者に介護のすべての負担をさせることはできない。年齢にかかわらず、元気なものは働き、サービスを提供する側に回るというスタンスが重要である。財政危機を回避するうえでも、また現役で社会に貢献したいと思っている人にとっても、年齢を超越した個人ごとに位置づけられる社会となることが望まれる。高齢化による社会保障改革の1つの方向は、高齢者の定義を変え、高齢者の労働への参加を促し、社会参加を図ることである。」P169-170

この記述は、3月16日の「逆算式年齢の私の提案 宮本本31」と関わることでもある、と思う。

## 高齢期の経済生活 宮本本34 (2012年3月27日)

「高齢期の経済生活」の小見出しで、次のことが指摘されている。

「貯蓄の分布は所得の分布より分布の幅が大きい。65歳以上の貯蓄保有額は、2009年に平均2,481万円と、全世帯平均をかなり上回っている。それは老後のために貯蓄しているからである。持家・土地保有額も大きい。しかも今後高齢者層に占める非農家、ホワイトカラー、核家族世帯が今以上に増加していくことを想定すると、高齢世帯の平均経済水準は、その他の世帯と比較すると、これまでになく高くなる可能性がある。社会保障の受け手よりも担い手として位置づけ直そうとする議論があるのも、このような実態の反映である。

しかし、高齢期の経済格差はその他の世代より大きく、高齢者を一律に扱うことはできない。高齢者の所得格差の状況をジニ係数で見ると、当初所得は、一般世帯の0.452に対して、高齢者は0.8223と所得格差は極めて大きい。税金・社会保険料を控除し社会保障給付を加えた再分配所得のジニ係数は0.4129と格差が縮小するが、それでも一般世帯よりは大きい。なお、ジニ係数とは、分布の集中度あるいは不平等度を示す係数で、0に近づくほど所得分布は平等で、1に近づくほど不平等となる。

長寿化のリスクは、何歳までを想定して蓄えたらよいかかわからないことである。しかも公的年金制度への不安や、要介護状態になったときの経済不安があるため、老後の備えに対しては不安が大きく、60歳から64歳で、「高齢期に備える上で、貯蓄に満足しているか」という問いに「満足している」と答えるのは3割に過ぎない。」

P165

実情がよく整理されていると思う。私周辺をみても、指摘があたっていると感じることが多い。さらに付け加

えれば、地域差が大きいことだ。たとえば愛知と沖縄とではかなりの違いがある。

また、ここでいわれる長寿化のリスク、老後の不安なども、まさにその通りだ、と思う。私個人も同感する。だから、不安を多少なりとも取り除くと言う意味も含んで、この連載の16日の記事で、逆算式年齢という提案をしたのだ。

現状はこの通りだが、20年後になると様相が大きく変化すると思われる。たとえば、現在の40代後半から50代が、20年後に現在の高齢者世代ほどの貯蓄を保有しているとは考えにくい。そんな変化にどう対処していくのか、政治経済の問題であるとともに、各個人の問題でもある。

## 高齢者が働く「生涯現役社会」 宮本本35 (2012年3月30日)

「定年年齢の延長と生涯現役社会」という項に、次のような叙述がある。

「元来、日本の高齢者の就労意欲は諸外国と比較して非常に高く、60歳から64歳の男性の労働力率は、2002年で、アメリカで57.6%、ドイツで34.0%、フランスで17.3%となっているのに対して、日本では71.2%と格段に高く、その傾向は継続している。就業を継続したい理由の第一は「収入がほしい」ことであり、これはどの国にも共通する傾向だが、経済的理由以外にも、日本では「体によいから」という健康上の理由が多いことが特徴である。このような高い労働意欲を生かし、高齢者の知識や技術を発揮して、年齢にかかわらず働き続けることができる社会へと転換していかなければならない。」P165

「将来の労働力人口の減少が見込まれることや、働く意欲があり、しかも豊富な知識、経験を持った高齢者に活躍できる場を確保することは重要なことである。雇用可能性を65歳まで引き上げた先には、70歳まで働ける社会づくりの課題がある。また、年齢に関係なく、働く意欲があり働ける人は働ける「生涯現役社会」への移行という課題もある。」P166

これらの叙述は、私の近辺の動向を見ても「そうだな」と思う。

最近私の住む集落でも、高齢者該当者をこれまでの数え65歳から数え70歳へと切り替えた。いったん高齢者扱いになった私は、非高齢者扱いに戻った。区費の額、共同作業の出席義務などに変わりがある。老人会員対象になるかならないかの違いもある。

これらは、平均年齢が高い我が集落の現実、そして該当年齢者の現実をふまえたものといえよう。

ところで、私は、上記の引用のなかで、「生涯現役社会」という用語を好きになれない。なぜかというと、「現役」は良いことで、「現役」を「退役」することは、良いことではない、というトーンを感じるからだ。「退役」も有意義であり、当人が「退役」を認め受け入れることも大切な良いことだ、と考えるからだ。

高齢者が働くことをめぐって、「日本高齢者協同組合」の事例が次のように紹介されている。

#### 「日本高齢者協同組合の活動」

日本が高齢社会へ向かうなかで、「寝たきりにならない、しない」「元気な高齢者がもっと元気に」をスローガンに、自分たち自身の手で、豊かな高齢期を創り出そうと、互いに支え合い励まし合う組織で、1991年に結成された。(中略)

高齢者協同組合は全国に35あるが、そのうち、31組合が生活協同組合の法人格を持ち、福祉を主たる事業とした生協法人として活動している。協同組合原則に基づいて、協同出資をして組合員になると、高齢協で働くことができ、同時にサービスを利用することができる。高齢協の組織原理は、雇う・雇われる関係ではないこと、組合員の話し合いを重視し、民主的な手続きを踏んで、事業、運動方針を決定することに特徴がある。

活動は、3つの柱で構成されている。

- (1) 総合相談(家族会・地域懇談会) (中略)
- (2) 仕事起こし・生活の支え合い活動 (中略)
- (3) 地域の充実のための活動・生きがいのための活動 (中略) P174-5

この他にも、シルバー人材サービス、NPOなどいろいろとあるだろうが、当事者がみずから組織をつくって、こうした活動をすることがさらに広がることを期待したい。

働くこと以外でも、老人会とか年金者組合とか、様々な組織が存在する。私自身も、いずれはそうしたものに関わるかもしれない。「予習」の必要を感じるこのごろだ。

## 仕掛ける看護 もう一肌脱ぐ高齢者像 超高齢未来本2 (2012年5月18日)

※ 本書については、第7章の関連項を参照されたい

「病棟での個人の看護」から、「社会全体の看護」へ、「待っている看護」から、「仕掛ける看護」へと、「看護師・保健師が超高齢社会の「頼れるマネージャー」になるべく、さまざまな試みが始まっています。」P99とのことだ。

そうしたなかで、次のように注目すべき動きが広がっているという。

「いま、訪問看護ステーションの所長たちが自分で家を買って、家主として看護が必要な人を迎え入れて支える試みや、小規模ながらデイサービスと宿泊機能を伴うサービスを提供する試み(小規模多機能事業)が出てきています。高齢者の住まいを訪問するだけでなく、高齢者の生活の場所自体を提供、経営していくような形での貢献です。(中略)

いままでは、特別養護老人ホームや有料老人ホームなどの介護施設では、医療が必要になると、手に負えなくなってしまうということが多くありました。

しかしこれからは、医療が必要になっても、住み慣れた場所でずっと同じように生活続けることができるようにしなければなりません。」P94～5

私たちのまわりでも、そうした動きを感じるようになってきた。そうした専門職の動きと、地域住民との動きがからみあうような方向がさらにでてくるのだろう。

そして高齢者自身の動きにも変化が広がって行くだろうが、その点にかかわって、「15年後に男性が変わらず元気であるための一番大きな要素は社会活動であり、女性は精神的な自立だ」という研究結果が紹介されている。

「これからは、75歳までは以前の65歳未満のように活発に社会活動し、75歳以上も「後期高齢者」という言葉の響きとは程遠いイメージで元気に暮らす時代になったといえるでしょう。そこで「次世代の社会システム構築にもう一肌脱ぐという新たな高齢者像」という新しいライフスタイル」の確立が想定されている。P176～7

そして、「ボラバイト（ボランティア+アルバイト）、フレックス就労、時間預託（自分が働いた時間を「ポイント」として貯めることができる制度）など」の形態が紹介されている。P170

これらの指摘は有効だと思うが、少し付け加えさせていただく。

高齢者がそうした生き方をしていくためには、高齢期を迎える以前の45～65歳の時期のありようが大きく問題となる。ひとことでいえば、「働き過ぎで燃え尽きない状態」で高齢期を迎えることだと思う。

これまでは、「60歳ないし65歳までは必死で働き、それ以後はゆっくりと余生を休み楽しむ」という枠組みの思考が支配的であった。そうではなく、65歳以前も以降も、働くこと、休み楽しむことを並行させて、充実した生き方をすることが求められる。そういうありようを、社会的にも個人的にも展開できるありようを追求したいものである。

## 老人像 社会的弱者と元気で『老いない』活動型 生活本10 (2012年9月19日)

※ 「生活本」とは、中川清「改訂版 現代の生活問題」(放送大学教育振興会2011年)のことだ。

「第14章 高齢者の生活世界と社会的受容」には、次のように、興味ある記述がある。

まず天野正子の引用だ。

「90年代に入る頃から老人に対するイメージは転換しはじめ、介護を必要とする社会的弱者としての老人像と、いつまでも元気で『老いない』活動型の老人像とに分極化していく。というより、こう表現したほうがより現実に近いのかもしれない。90年代以降、老いや老人についての支配的イメージは、『衰退する老人』像から『活動する老人』像へと重心移行の過程にある、と——。」P244-5

そして、本書著者の中川さんは、後者の老人像にかかわって、こう書く。

「高齢者は、自由で自立した、自己責任を持つ者として、限りなく「近代的な主体」として想定される。

実際、社会福祉の現場においても、2000年の社会福祉基礎構造改革にともなって、それまでの措置制度から、さまざまなサービスや資源を高齢者が利用する制度へと大きく変化する。そこでは高齢者は、提供される広範なメニューを理解し、自らのニーズにもとづいて、それらを選択し契約する「利用主体」とみなされるのである。」

P245

『活動する老人』像が強調されるようになった背景を考えてみたい。

まず中川さんが指摘するような政策的背景、とくに経費削減・市場拡大の促進。それらが頼りにもしている「近代的な主体」として尊重しようとする発想の広がり。あるいは、「元気」を強調したい当人たちの願い。

それらは、入り混じっているのだろう。だが、『活動する老人』は増加しているのだろうか。絶対数としては増加しているのだろうが、比率としてはどうなのだろうか。健康寿命という言葉をよく耳にするようになったから、このあたりも掘り下げられていくのだろう。

それにしても、事実と願望・期待が入り混じった把握が広がっているように感じる。『活動する老人』型の老人の比率が増えているのかどうか、知りたいと思う。

というのは、高齢者の仲間入りとされる65歳以前の、人生後半期、具体的には40代後半から60代前半にも、「元気型」とそうでない型との分化が見られるような気もするからだ。ヘトヘトになって65歳にたどり着く人と、「さあこれから、いろいろとできる」と元気よく65歳を迎える人とがいるからだ。この時期に働き過ぎであった人には、「疲れ切った人」と「激務から解放されて喜ぶ人」に分かれるようにも思える。

だが、こうした二分論的把握でいいのかどうか、という問題提起が次のように提出される所が、本書の興味溢れる所である。

「活動と衰退、健康と病気、自立と依存などと表現される、相反する要素の混沌こそが高齢期であり、長寿化する21世紀の高齢者像は、多様な特徴において理解されるべきであろう。」P247

「高齢者の生活時間の特徴は、約2倍の長さの「在宅型余暇」時間と、1時間以上も長い「睡眠」時間とに示されるといえよう。かつて籠山京は、それまでの労働にもとづく生活時間の分類方法を反省して、「労働していない身心障害者、老人、子どもなどの場合には、まったく別の考え方で分類を試みる必要がある」として、「人間の生活時間を労働から解放して考えると、まず目覚めている時間と眠っている時間とに分ける」ことの方が、「人間生活」にとって「むしろ基本的だといってよい」と述べ、2つの時間の中に「ぼんやり」や「ゆったり」している時間を構想していた（中略）。各種のメディアに接する時間や、くつろぎ休養する時間は、高齢者にとって、目覚めと眠りの間の穏やかな時間帯にあたっているのかもしれない。それは、労働のための休養や余暇ではなく、ただそれ自体の時間として享受されるとともに時には生涯の経験や記憶が流れ込む時間なのかもしれない。」P252

働くことこそ人生の『絶対的存在意義』があると考え、「働くこと以外はやむを得ない時間」と考えて、働く＝有用、働く事以外＝できるだけ減らすもの、といった生活を送る人には、理解不能だろう。また、そうした考えを促進している効率的な社会構造には、排除縮減すべき発想になるだろう。

しかし、ここで述べられる視点をもつことで、人間存在の視野がぐんと広がり、存在価値を一層発見創造できていく人がなんと多いことだろうか。

私個人としても、近年「ぼんやり」や「ゆったり」している時間が少しずつ増えていると感じる。と同時に、こうした時間が、高齢期以前の50代、40代、30代、さらに20代にも重要であることを主張したい。そうした時間を持つことができずに（許せずに）、「頑張りが足りない」と鞭打っていた自分を思い出し、それができずに逆に事態を悪化させていたことが、今になってようやくわかるようになったのだ。

## 西垣千春「老後の生活破綻—身近に潜むリスクと解決策」を読む (2012年12月4日)

このごろ高齢者の生き方・生活にかかわる本を読むことが増えてきた。私自身が、高齢者に仲間入りする年頃になったこともあるが、ここ数十年、「人生後半期の生き方」を研究テーマとしており、その人生後半期のうちの半分ほどは、高齢者といわれる時期であることもある。

最近では、西垣千春「老後の生活破綻—身近に潜むリスクと解決策」(中公新書2011年)を読んだ。近年、高齢者を含む家族のかたちの多様化が進んでいる。従来からよく見られた高齢者夫婦世帯、3世代世帯、単身世帯だけでなく、高齢者と単身の子どもをはじめ多様な形がみられる。とくに、実家に継続して親とともに住む生涯独身者や、離婚して実家に戻り、親と共に住むという形の3世代家族などが増えているようだ。本書にはでてこないが、血縁関係のない世帯もあるだろう。

しかし、そうした多様なありようがありながらも、それらの姿が周りには見えにくくなっている。

それらの姿が、外との関係を閉じがちである場合はなおさらだ。人間関係が薄くなってきているとしばしばいわれる中で、高齢者を含む世帯でなにか困難を持っている場合に、余計に孤立傾向が強まる。

そうしたところでは、急激な生活破綻が発生しやすい。そうした事例がきわめてリアルに紹介され、かつ、それに緊急対応する支援者の動きが、これまたリアルに紹介されていることに本書の特徴の一つがある。

判断力の低下、健康状態の変化、近親者による経済的搾取、子どもが親に経済的依存、予期せぬ事故・災害、詐欺による被害などが、そのきっかけ・原因だ。

それらの変化に気付いた人々が連携して緊急対応して、危機を越えていく事例がたくさん紹介されているのだ。

そうした危機に陥る人々は経済的に貧窮状態に長くあった世帯に限らない。そうした世帯は、日ごろから福祉関係者などがつながりを持っていて、必要な対応が継続的に行われていることがある。

それに対して、一定の蓄えや資産を持っている人が、急なことで生活破綻する場合、緊急対応するセーフティネットが欠いていたり、それを知らなかったり、人間関係が弱かったりする。そうした時、「困窮にどう気づく

のか」というポイントが示されているのも本書の特徴だ。

こうした事例について、福祉関係者だけでなく、ごく普通の人々も多少なりとも知り、いざという時の対処について知っておくこと、あるいはそうした人間関係をどう構築しておくのか、重要な課題となっている。セーフティーネットが弱体化しているといわれる日本で、この課題は、政治政策レベルでの対処と並行して、人々の生き方・生活レベルでも、セーフティーネット、そして日ごろの態勢・力量を人間関係・社会が用意しておくことが求められる。

「人生後半期の生き方」というテーマには、そうした課題が含まれるだろう。

## 老年的超越としての、ボケ=恍惚的境地 嵯峨座晴夫さんの提起 (2013年1月17日)

嵯峨座晴夫「人口学から見た少子高齢化社会」(2012年佼成出版社)の本に、次のような一節がある。

「老年的超越という言葉は、スウェーデンの老年学者トルンスタムらが一九八〇年代から提起していたものです。(中略) 彼らは、「老年的超越とは、メタ的な見方への移行、つまり物質的・合理的な視点からより神秘的・超越的な視点への移行である」と定義しています(中略)。

それは、超高齢者の行動や心理に現れる老年期の超越的な傾向を示すもので、もともと東洋の禅の思想にヒントを得た概念だとトルンスタムは述べています。この老年的超越が現れるのは、次の三つの次元であるとしています。その第一は、宇宙的次元における時間・空間意識の超越、生死の超越などの状態、第二は、自我の次元における彼我の超越、自己の身体へのこだわりの減少など、第三は、社会関係の次元における関係の意味や重要性の変化、役割意識の変化などであると彼は述べています(中略)。

要するに、老年的超越とは、従来、世間で俗に「ぼけ」といわれるような心理状態にあった人たちを、病気としての認知症の人たちと、それ以外の人たちに分けて、後者に属する人たちを人生の最終の発達段階にある人たちとして再定義したものと考えることができます。別の言い方をすると、老年的超越はエイジングの正常な過程として人生の終末期に現れる超越的心境を指しているといえます。

この心理状態についての認識は、今後、超高齢者が増加するにつれて、ますます重要になってくるものと考えます。それを人生の終末期における「恍惚的境地」と呼ぶことができると思います。老年的超越とは恍惚的境地だといいたいのです。現在、日本でも実証研究が始まっています。ジェロントロジーがこの分野にも科学の光を当ててほしいと思います。」P195-7

私は、80代になるにはかなりの年数が必要だが、ここにあることが、ちょっぴりは分かるような気がする。

ボケ=恍惚的境地を、否定的にではなく、より積極的肯定的に受けとめることが求められているようだ。

最近、私は「生涯対人援助学としての生活指導研究」について考え始めるようになった。そのうえで示唆的な記述だ。

私は、研究課題を、自分自身の実践と並行して進めてきた。研究対象にすることは、自分で実践してみないで



はおれなかったし、また、自分で実践していることを研究してみないとすまなかった、というわけだ。ということもあって、20年以上前に、「研究的実践者」「実践的研究者」という言葉を作った。

ということで、紹介文のような世界について、60代後半になって、ちょっぴり考えられるようになってきたというわけだ。

## 4、癒し・スピリチュアリティ

### 「癒し」は、個人の内面にだけ焦点化しないように (2004年7月29日)

7月17日に沖大で開かれた「方法としての沖縄研究 沖縄からみえてくるもの」シンポで、鹿野政直さんのレジメに、屋嘉比収さんが「異議申し立ての島から癒しの島への誘導ないしは転換」と指摘したとあった。興味深い指摘なので、この屋嘉比さんの指摘の原文にあたりたいものだが、まだできていない。

ここでは、この「癒し」のことに絞って考えてみたい。上記の指摘を文面だけで読むと、「癒し」がかなり否定的なトーンで読み取れる。実際、「癒し」を個人の内面のレベルだけでとらえ、自己のなかに閉じこもる傾向がみられる。

だが、「癒し」を求める原因は、その人を取りまくさまざまな関係のなかで生じる問題状況のなかにある。人間との関係、自然との関係、社会との関係。そうしたものに視野を向けずに、「癒し」だけを求めることでは解決しない。緊急措置として、「癒し」にかかわる薬物利用、カウンセリング、音楽、転居、セミナー参加などは有効であろう。そして、それをきっかけとして、人間との関係、自然との関係、社会との関係をくみかえていくことで、問題状況を変え、「癒されていく」のである。

2002年秋に赤城国立青年の家で開かれた教育ワークショップフォーラムに参加したおり、参加者のなかにある強い「癒し」を求める雰囲気にかかわって、「個人の癒し」は「社会の癒し」と結び合って進行させることが求められると私は発言した。それは近くにいた池住義憲さんとおしゃべりのなかで共鳴しあって発言したものだ。

「癒しを必要と感じる」多くの人は、どうしても、うちうちに閉じこもってしまいがちである。自己を「開きながら」「癒されていく」ことが大切だ。その意味で、沖縄が「癒しの島」になることは、多くの人びとに重要な「癒し」のきっかけを与えていることは喜ばしいことである。しかし、それは、屋嘉比さんの言葉を借りれば、「異議申し立ての島」としての性格を濃厚に帯びているからだ。

その「異議申し立て」を含まないで、たんなる「観光ブーム」的な「癒し」に陥らないようにしたいものだ。そしてその「異議申し立て」には、いろいろなレベルがあることにも注目したい。スピリチュアルなことを多分に含んだ自然との関係、そして戦争と基地の問題を軸にした社会的政治的関係、競争主義的色彩が弱く、豊かさを「残存」させている人間関係などなど。

そうしたことにも危機的状況がみられるというのが、屋嘉比さんの指摘なのだろう。こうした視点からみていくと、現在の沖縄の教育が、「異議申し立て」的性格を薄めてきていることが気になりになる。

### 魂・癒しと政治・科学 (2005年8月22日)

今日の摩文仁の丘は静かだ。私が仕事をする椅子からまっすぐ前に摩文仁の丘が見える。この静けさがよけいに戦争のことを思い起こさせることがある。そして、玉城の地は、沖縄に今日まで長期に住みつづけている人々の祖先が移住してきたといわれる地点であるだけに、多くの拜所がある。だから、この地は魂の問題と日常的に「並存」というか、「共生」している。

不当に扱われたり不遇に置かれたりした魂は癒しをも求める。それは死者だけでなく、死者を囲む人々の癒し要求ともなる。さらに生者自身も今日では癒しを必要とすることが日常的ですらある。

そうした魂・癒しは、個人的な問題であるとともに人々が共有する問題でもある。そこにはしばしば不当・不遇への怒り・告発が含まれている。沖縄戦の死者などはまさにそうである。

戦争にしても、おそらくは沖縄への移住にしても、そこには人々が生きるうえでの決定的な意味をなす魂・癒しの問題が政治問題としても存在している。魂は政治のように「汚らわしい」ものではないといって、政治と切り離す人がいるが、人々の魂は政治と深く結びついてきた事実がある。戦争がまさにそうである。だから、魂の問題を避けることは、ときに政治を避けることにさえなる。

靖国問題は、死をうみ出した戦争という政治を肯定するのか、否定するのか、ということに深くかかわって存在しており、魂にとってそれは決定的に重大なことである。いいかたを変えると、魂のありようを介しての政治の問題なのだ。また、自分たちの魂を国家に管理される必要があるのか、という問いもある。自分たちの魂は自分たちで考える、自分たちで管理するという、魂をめぐるの民主主義の問題も存在する。

また、魂の問題は非科学であるといって避ける人がいる。確かに科学ではない。しかし、科学でないということは、誤りとか迷信とかということではない。科学が真理を独占しているわけではない。科学が得意の分野では、科学は有効である。しかし科学がすべてではないのである。魂をめぐる真理の問題は、科学が扱う真理とは相対的に独立している。科学をこのように相対化することが反科学になるということはない。むしろ、近代において王者の位置に置かれてきた科学を相対化し、科学そのものを客観視することは不可欠な作業である。

またいかなる科学をこそ追求したらいいのか、という問いをもつ必要もある。たとえば、これまでの科学の主流は産業主義・開発主義に深く彩られていたが、それでいいのか、という問いが必要になってきている。

また、たとえばナチズムは、しばしば科学と結びつけてそのイデオロギーを展開したのであり、反科学だとはいいきれない。日本の戦前の軍国主義にしても反科学主義とはいえない。ナショナリズムが科学的な顔をまとうことはよくあることである。

また、科学そのものにも多様な展開がある。科学といえば西洋科学を指し、「東洋で長年わたって蓄積された科学」などという表現はほとんど存在の余地がない状況にあるが、そうであろうか。あるいは科学というと、イメージされやすいのはニュートン力学の世界であるが、近年の量子論の世界はかなり様相を異にしている。

このように魂の問題は、宗教の問題だけでなく、政治・科学との緊張関係のなかで存在しているのだ。

**<いやし会>にて思ったこと** (2005年11月12日)

恵美子たちが主宰している<いやし会>には時々参加するが、前回は医療気孔師の方のお話とショートのお話の気孔ワークであった。

この会は年齢幅が数十歳におよぶほど多様な方々が参加されるが、全体的には女性が多い。前回の男性は私を含めて3名で、たまたまかってワーカーホリックで体調を崩した体験をもち、かつ本土から移住してきた方々である。また、ある参加者は、飛行機のなかで出会った方にわたしどものホームページを紹介されて、この会に参加したという。また、医療気孔師の方も、最近沖縄に移住されてきた方である。この地周辺も含めて沖縄は、「いやし」としては貴重な場なのかもしれない。

ところで、こうした「いやし」に対して批判的まなざしで見るとも結構多い。一つは、非科学的で前近代的で、人々をたぶらかすものだ、というものである。日本では明治初期に西洋医学が東洋医学に対して、いわば「政治的」に勝利した結果ともいえよう。

もう一つは、「いやし」は、人々の社会的な視野を閉ざしがちである、というものである。沖縄を「いやしの地」と絶賛するものにはその様相がつきまとっている。理解できることだし、「いやし」を個人の枠内に閉じこめず、「社会のいやし」をも視野にいれる必要がある、という主張を2年ほど前のワークショップフォーラムで発言したことがある。

しかし、だからといって「いやし」にかかわることを否定的にのみとらえていいのだろうか。むしろ「いやし」として歴史的に蓄積されてきたものにはかなり重要な役割を果たすものが多く、単純に非科学的に切り捨てられるものではない。セルビーさんなどの言葉を借りれば、むしろそうした見方をするのは、デカルト流の「科学」の問題性なのである（浅野誠・セルビー編著『グローバル教育からの提案』日本評論社参照）。むしろ最近の「科学」には、こうしたものを積極的に評価するものがでてきているし、広がっている。と同時に、科学は近代西洋の独占物ではない。また「いやし」を個人のことにとじこめず、社会の問題、人々の関係性の問題と結びつけてとらえることは不可欠のことである。

と同時に、科学や社会を重視する人々が、「いやし」的な世界を拒絶することをどう超えていくか、ということも一つのテーマである。数字によって表現されることが多い科学的データのみで、自己の行動を律する発想が強い人は結構多い。だから、病気があれば、その部分を除去すればいい、という発想になる。しかし、病はその部分だけの現象ではなく、その人の身体全体の、そして生活のありようの、さらにはその人の関係性・さらには社会のありようにもとづく現象である。無論、局部にしぼって分析し、病気を治療しようとする西洋医学に支配的な発想の有効性は当然ある。

こんなことを視野にいれて、最近の「人生創造」ワークショップにおいて、こんなアクティビティをしている。

-----健康・病気、そして生と死には二つの対極的な考え方があり、人々はその双方をもっている場合が多いようです。そこで、自分のなかにある次の①②の二つの考え方の比率を考えてみましょう。そして、その比率順に並んでみましょう。

① 「闘い派」 病と闘い、病を克服して、健康をかちとろう。自分の生命は、自分の生命を危うくするものとの闘いであり、その闘いを生きぬくことが大切である。

② 「自然派」 病は、バランスを崩した自分の生活の信号であり、病を大切にして、自分の生活を見直して

いこう。地上のすべての生命とのバランスのなかで自分も生きていることをふまえて、自他の生命を大切にしていこう。

―――比率順に並ぶことを通して、参加者間のいろいろな健康観・病気観が出会い、健康・病気についてより深く考えるきっかけをえていただく、ということでこのアクティビティをおこなっている。

教師を含めて「科学的知識」をもっている人は、①的な発想を前面にたてがちではあるが、実際のところ、②の発想に気づき、両者の混在状況にある人が多いであろう。若い人にも①的な考えが強く、なんとか「頑張らなければ」という思わなくてはならない、と考える人も多そうだ。それには学校教育がかなり「貢献」しているのだろう。

この①②のどちらが正しいという問題ではない。いずれの考え方も両者がかかわりあうことで、より深まっていくことが求められよう。

さて、私自身もかつて①一辺倒であったが、徐々に②的な世界にもかかわるようになり、現在では両者の混在状況にある。②について、最初は知識的に入っていく傾向が強かったが、最近では体の実感としてもつこともあるようになった。たとえば、昨年12月に、ハートチャクラが開きはじめたのを感じた。また、前回のいやし会で、気孔師の方の話の進行中に、足裏がとても熱くなってきたのも、私なりの「気」の感じ取り方だろう。

以前からそうしたことはあったのだろうが、それを意識しはじめたのは最近である。私たちの日常会話には「気」が含まれる言葉がとても多いのだが、それを体感的に受け取ることがこの100年間にとても弱くなっているのだろうが、それを再び感じ取れるようになっていきたいものだ。

## 聖地と王朝支配 (2005年12月19日)

私が「沖縄県の教育史」を執筆した折に気になっていた、聖地と王朝にかかわってである。同書執筆の際に参照した外間守善さんの書籍には、神々の闘い（垂直神と水平神との闘い）という話題が登場してくる。新里恵二さんの書籍にもでてくる。14～15世紀にかけての首里王朝による「沖縄統一」過程には、王朝による神々の秩序の「統一」過程を伴っただろう。そしてそれは当然、それに抗するものとのせめぎあいがあったことだろう。ノロとユタの分離、そしてユタへの弾圧などもそうしたこととつながっていよう。

今日、ユタ、聖地、拝所などという話は科学的ではないということで、避ける人は多い。「科学的でない」というのは確かにそうであるが、それは「科学の世界ではない」ということを意味するのであって、「誤りだから排除すべきもの」と考えていいものではない。科学が「生きていくうえで不可欠なこと」を独占しているわけではない。芸術にしる、こうしたスピリチュアルなことにしる、人々が生きていくうえで不可欠なことである。科学とスピリチュアルなこととは単純に対立するものだとはいえない。

大切なことは、科学においてもスピリチュアルなことにおいても、それ自体のより深化、改革が求められていることである。今読んでいる、ホスピスを考える会「ホスピス講座（新星出版2005年）」にも、そうしたことを追求している医療関係者の諸論が登場している。

スピリチュアルなことが、このように人々の生きるうえで重大不可欠なことであるがゆえに、王朝はスピリチ

ユアルな支配のために多様な手だてを講じたのである。その意味で、王朝が終焉したここ100年余りはどうであったのかを問う必要がある。そこでの主要な流れの一つとして、王朝にとって代わって天皇制、靖国神社に代表される国家神道が登場した。その影響下で沖縄の聖地やウタキに鳥居がつけられた。また、戦後行なわれた久高島のイザイホーの儀式に日の丸のハチマキが登場したりする。

そして、文化財保護ということで、王朝支配に深くかかわるものが指定・尊重されたりする。沖縄のユネスコ世界遺産もそうしたものが多いというか、ほぼすべてそうである。首里城復元がその象徴的存在である。莫大な予算が使われ、かつこれが沖縄を代表するもの、というメッセージが訪問する観光者だけでなく沖縄住民にも伝えられる。無論、そうしたものが文化財として形をなして残存しているから保護するというのもあろう。

だが、それらが沖縄を代表するものとして扱われるとしたら、それには異議申し立てをしたい。人々のスピリチュアルな生活を王朝が代表するわけではない。長期間にわたって人々のなかで続いてきたスピリチュアルなものの方が決定的に重要である。無論、沖縄における王朝には、人々との「近さ」があるということ、そしてまた、17世紀以降の実質的な支配は、薩摩藩、明治政府などによってなされてきて、首里王朝が強力な支配権力をもっていたとはいえない、という点も見落としてはならないが。

そして、近年では、産業主義とか科学万能論的なものが、人々のスピリチュアリティに強い影響をもっている。こうしたなかで、スピリチュアリティをいかに深化改革していくのだろうか。

## フィンドホーンワークショップ (2007年2月1日)

1月30日、スコットランドのフィンドホーンからのイアン・ロージィ夫妻がコーディネイターとなってすめられたワークショップに参加した。フィンドホーンは、恵美子が訪問滞在するところからのおつきあいである。

彼女は、フィンドホーンに滞在した時ご夫妻のお宅にお世話になったこともあって、特別の思い入れがある。私はフィンドホーンにいったことはないが、恵美子とのつながりでフィンドホーン関係者が主宰するワークショップに参加した体験をもつ。フィンドホーンは、スピリチュアリティを軸に新たな生き方を追究し、世界的に高い関心が寄せられている。沖縄でも関心をもつ人が多く、実際にフィンドホーンを訪れた方もかなりおられる。そんな方々が声をかけあい、今回も定員オーバー気味の参加者で会場は埋まった。

午後と夜の2回、異なるワークショップが開かれたが、私は双方とも参加した。午後は、歌とダンスを中心に、参加者相互が身体と感性を通しつつつながりあい、多様な気づきを得ていく場であった。幼稚園関係者も多く、小さな子どもたちもたくさん参加していた。

私にとっては、30年くらい前に多様な形で追求実践していたことを久しぶりにしたこともあって、懐かしさがあった。たとえば、手をつないで渦をつくりながら歩いていくなどである。ダンスも、フォークダンス風であるが、そのなかで参加者のつながりを促進していくものである。その隊列も、私が最近頻用している輪をつくって行うものが多く、共通性を感じるものであった。参加者が平等に相互に出会いながら、身体と感性を豊かにはらみながらつながりあうワークショップは、世界中どこでも共通するものをもっていることを改めて感じた。

歌は、その場ですぐに覚えられる大変やさしい歌だが、それを通して豊かな響き合いが生まれ、参加者に多く

を感じさせるものであった。歌は私の苦手とするところで、今後学んでいくことが多いものだった。

イアンとロージのコーディネイトは、自然さがとてもあって、参加者に無理を感じさせず、一人ひとりが自らつくり出しつながりあう雰囲気をかもしだすものである。二人の雰囲気そのものがそうであり、それこそスピリチュアリティを参加者に響かせるものであった。そうしたなかで、参加者が自分なりの表現を出して、相互につながりあう関係を生みだしている。

こうした運びに、沖縄の参加者は豊かに反応する蓄積をもっていることにも注目しておきたい。身体と感性を通して、相互に配慮しつつもお互いに豊かに表現しつつつながりあう文化を育てているのである。フィンドホーンのもつやさしさと沖縄のもつやさしさとが響きあうともいえよう。

夜のワークショップは、こうした歌とダンスを半分ほどにして、コーディネイターによる多少の語り、参加者相互の語り合いという形で進行した。そのなかで、参加者の多様なスピリチュアリティ体験・感覚が語られ、私にとっても、実に多様な発見があった。そして、終了後の懇親会での語り合いも充実したものであった。

この会には、実に多様な職業・世代・スピリチュアリティ体験をもつ人々が集まった。全体として圧倒的に女性参加者であったが、男性でこうした世界に意識的にかかわろうとする人がまだまだ少ないことを気づかされた。参加者には、かつての教え子などなつかしい再会もあったし、お互いに知り合っていたが、この場で出会うとは新たな出会いですね、と語り合う人。また、初対面ながら以前どこかで出会ったような感覚を与える人。こんな出会いの楽しさを感じさせる場でもあった。それは、友達の友達は友達といった沖縄的感覚とも重なりあうものであった。

こんなことで、このあと多様なつながりあい、共同のかかわりあいなどへと発展しそうな方々がたくさんできた。

翌日の水曜日は、イアンとロージを含めて5人の方が我が家を訪問され、楽しく語り合った。私は久しぶりの英会話で、かなりしどろもどろになったが、またまたいろいろな発見をする場となった。イアンは、同じようなことをしているとのこと、我が家の家庭菜園に興味をもってくれた。自然や生き物とのつながり・共生を大切にするフィンドホーンならでは、でもあろう。私は彼がずっと年長だと思い込んでいたが、実は私とかなり近い年齢と聞いて驚いた。私にも彼のように、もっと「熟した」雰囲気がでてくれば、と思った。

## スピリチュアリティと科学 (2007年3月8日)

恵美子の誘いで「オーラ写真」をとる。この「出来事」に触発されて、このテーマについて考える。

近年の「癒し」ブームなどのなかで、きわめて多くの人々が占い、オールドナティブ医療、東洋思想、そしてスピリチュアリティなどに関心をもつ。と同時に、そうしたものに対して、「科学」的な角度から疑問を出し、それらを否定する動きをする人も多い。両者の対立葛藤は、それらにたずさわる専門的な人々だけでなく、人々の

日常にありふれている。

歴史的にいうと、近代にさしかかる時、科学が人々の間に登場する。その際、中世支配の根幹にあった宗教支配との闘いがあった。その科学の挑戦をうけるなかで、宗教のなかにも自己変革としての宗教革命が登場し、科学と宗教との並存をはかる動きが大きく登場する。

私は、スピリチュアリティ=宗教とはとらえていないが、宗教は、スピリチュアリティの領域のなかの一部分、かつ大きな位置を占めてきた。と同時に、スピリチュアリティは宗教に占有されるものではない。宗教信仰をもたない人にもスピリチュアリティの問題が存在ししているし、無宗教でもスピリチュアリティを大切に人が当然存在する。

しかし、科学の登場、そして、科学が「王座」に登る過程で、中世支配と結びついたスピリチュアリティ関連事が、地位を低めてきた事も確かである。その結果、人々のスピリチュアリティへの「関与」、そしてそれにかかわる「能力」も低下してきたように思う。そして、それは非日常的なもの、あるいは神秘的なもの、ときには迷信のよう扱われて、生活から排除されていく傾向を強めてきた。

だが、人々が生きていくうえで、スピリチュアリティは不可欠なことである。そしてそのスピリチュアリティは、科学とは領域を異にするが、科学と対立するものではない。逆に言うと、スピリチュアリティを「反科学的なもの、科学と対立するもの」ととらえることは生産的ではない。そしてまた、科学は万能ではない。科学はスピリチュアリティに取って代わられるものではない。

別のいい方をすると、科学は「真理」を独占するわけではない。「真理」を構成するものは、科学の他にも、芸術も含めていろいろなものがある。スピリチュアリティもその一つである。だから、科学もスピリチュアリティも追求したいと、私は考える。

スピリチュアリティにかかわるいろいろなもの・ことが近年おこなわれている。なかには、「確かな」ものかどうかの不安を与えるものもある。そして、人々を騙そうとするものさえある。それだけに、「確かなもの」を自分なりに選択していけることが大切になる。そこで、科学に登場してもらいたいと願う人もいる。だから、たとえば「気の科学」という書籍も登場する。そうしたものの一つとして「オーラ写真」もある。人体が発するものには、光・熱だけではとらえきれないものがあることはよく感じることである。そのなかの「オーラ」にかかわるもの、チャクラから発するものを「科学的」道具で把握しようとするわけである。

ところで、「オーラ写真」は欧米出自のものなので、説明は和訳してある。しかし、適切でない和訳も多いように感じる。たとえば、「オーラ写真」のなかで、body-mind-spirit を身体-心-精神と訳してあったが、これでは了解不能となる。身体-知-精神（または魂）、あるいは身体性-知性-精神性と訳したほうがいだろう。

私の場合は、この三つのバランスがほぼとれているのだが、身体性の比重がやや高いとのことである。最近の私の生活ぶりを反映しているように思う。そして、もともと理論家スタイルより実践家スタイルの比重が高いことも反映しているのかもしれない。こんな風に、「オーラ写真」にあらわれてきたものをヒントにして、自分なりの了解をおしすすめようと思っている。

また、写真によると、7つのチャクラからかなりのものが発している。このところ関心をもっていた第三チャクラも強く発している。最近の私の変化を反映しているように思う。



## 大林太良「日本の神話」(大月書店1976年)に触発されて (2007年3月23日)

仕事のはざまに、書庫から古い本を引っ張りだして読んだ。30年前のものだが、触発されることが多かった。この分野の研究は、その後さらに進んでおり、そうしたものをフォローしなくてはと思う。それにしても、この本からいくつか示唆されて考えたことを列挙しておこう。この分野は初心者に等しいので、単純なことも含まれよう。

### 1) まず、神話・伝説・昔話・民話などの区別

西欧語で myth などといわれるものを「神話」と訳したので、日本では「神」の話だと考えてしまっているが、もっと広い意味である。

「神話はこの世の始めの時期における一回的な出来事を物語っている。そのなかでことに重要なのは、いわゆる創世神話というものです。つまり、世界の始め、人類の始め、また、文化の起源、そういうような問題を語っています。(中略)単に語るとか説明するということをこえて、基礎づけるという性格を持っている。基礎づけるということは、神話によって、いわば、現在の人間がしなければならない行動のモデルがあたえられることです。」P125

「行動のモデル」ということで、戦前の天皇制は神話をフル活用したのである。「美しい日本」などというキャッチフレーズを掲げる、今日の日本のナショナリズムは、それをどのように展開するのであろうか。

さらに、これらの用語の区別について書かれていることを列挙してみよう。

神話——この世の始めの話。一回性の話

伝説——この世の始めの話ではない。説明機能が前面にでる。現実の土地との結びつきが強い。一回性の話

昔話——具体的な土地との結びつきがなくていい。人物も具体的でなくでいい。何回もくりかえし行われうる可能性のある典型的な出来事。

「民族によって、文化によって、必ずしも神話・伝説・昔話という三種類の区別をしているとは限りません。つまり日本内地の場合ですと、だいたい言葉の上でも昔話をムカシコとかの形で昔話と伝説とは区別しているところがありますけれども、沖縄の場合ですと、伝説と昔話はイチテーという同じ表現でもってひとまとめにされているわけです。昔話と伝説とは区別されていない。そして民話という言葉がこのごろさかんに使われています。」P128

私が『沖縄県の教育史』を書いていたのは20年前ごろであるが、外間守善さんをはじめとする当時の諸成果を参照させていただいた。その後、民話採集作業をはじめ、この分野の研究作業はかなり進んでいるようである。こうしたものについて学んでいく必要があるようだ。

## 2) 鶴が稲を運んできた話

玉城の受水走水近くに鶴が稲を運んできたのが、沖縄の稲作のはじまりである、という話があるが、それは東アジアに分布する話だと次のようにいう。

「鳥が飛んできて人間に穀物をもたらし、その穀物はその地方における最初の稲であったとか、あるいはまた非常に粒が大きかったとかいう奇跡的な穀物であったという伝承は日本には広くひろがっています。そして内地ばかりでなくて、沖縄でもこの種の伝承が、広く分布しています。実は日本ばかりでなくて東南アジアや中国においても、鳥が人間に穀物をもたらしたという伝承が広くみられます。」 P 31

## 3) 綱引き

私が住む中山集落だけでなく、この近くの多くの集落には綱引き行事が今も行われている。私がひいたことのある綱引きの際に、男女対抗で行われたことがあるが、その際、なぜか男の何人かが女の方の綱に加担して女の綱が勝つようにしていたのを不思議に思ったことがあった。その理由を、この本で知った。

「九州では盆に行われるところが多く、南九州になると八月十五日に綱引きが行われます。そして日本の綱引きの特徴としてしばしばみられるのは、男の組対女の組で綱を引き合う、あるいはまた綱自身が男綱と女綱にわかれていることです。つまり綱引きは、男性原理と女性原理のあいだの対抗です。そしてその場合、女の組あるいは女綱が勝つとその年は豊作であるというのが非常に多い。このように綱引きは年占という性格をもっています。(中略)いま申しましたような日本の綱引きの特徴は、実は朝鮮や中国や東南アジアの綱引きと共通しているのです。(中略)日本の綱引きと非常によく似ている形式、つまり男対女という性的な二元主義、しかもだいたい女が勝つということになっていて、それがいわば豊作を確保するというような特徴をみますと、日本の綱引きにもっともよく似ているのは、やはり、朝鮮南部、それから中国、インドシナの地域です。」 P 37

## 4) 日本の支配者の神話 天孫降臨 古事記 日本書紀

「おそらく西のほうの印欧語族の神話あるいはものの考え方というものが、内陸アジアのアルタイ系統の遊牧民を媒介として東アジアにはいつてくる。それが朝鮮半島をとおって、アルタイ語族をにない手として日本にはいつてき、日本の支配者文化の、非常に基本的な部分をつくっているのではないかと考えられるわけです。」 P 42

「五世紀の古墳時代中期に、金の冠や豪華な品物がさかんに出てくる時期があります。そういう遺物はだいたい朝鮮半島からはいつてくる支配者文化の流れの存在を示しています。そういう時期に日本の支配者文化の一部として、(中略)神武東征の話とか、あるいはまた天孫降臨の話もおそらくはいつてきたのではないかとということが考えられます。」 P 43

「天孫降臨の話は朝鮮の檀君神話や六加羅の起源神話と類似しています。つまり、天から支配者が山の上にくだってきたのです。しかも日本神話の場合、くだってきたのが高千穂の添の峰である。この添というのが朝鮮語の都のソウルと同じであるというようなことも昔から指摘されております。つまり王権の天上から地上への移行というものをあらわしている天孫降臨神話が、朝鮮の神話と非常に密接な関連があるということは昔からいわれ

ており、今日では広く知られているとおりです。」P114

「神界が神々の社会的機能に応じて体系化されている（中略）そこで顕著にみられる特徴は、その社会的機能が祭政（第一）、軍事ないし戦士（第二）、生産者ないし豊穡（第三）の三つの機能からなっていることです。」P138

「このような三機能体系は、実は印欧（インド、ヨーロッパ）語族の神話にたいへん特徴的にみられることがフランスのディメジルなどの研究などでわかっています。しかも、これは印欧語族以外にはほとんどみられない特徴なのです。（中略）日本神話と印欧語族の神話とのあいだには、ほかの細部においても奇妙な一致が数々みられ、なんらかの歴史的関係が両者のあいだにあったと考えざるを得ません。」P140

「八世紀の『古事記』や『日本書紀』は、（中略）天皇家を中心にした当時の支配者層の神話なのです。ですからそれは地域的に限られている。普通の一般民衆はおそらく違う神話を持っていたに相違ないわけです。」P152

沖縄での支配者系の神話として、たとえばティダコ（太陽の子）神話などがあるが、これらの起源はどこにあるのだろうか。これとこの本で述べられているアルタイ系の日本の神話とは関係があるのだろうか。

#### 5) 洪水神話 南島系

オーストリアの神話学者ヴァルク 洪水神話を四つの形式にまとめる。

「第二の例としてヴァルクの設定した原初洪水型は、基本的な形としては日本神話にもあります。イザナキ、イザナミの国生みの神話、沖縄のアマミク、シネレクの二人の男女の神が天下った神話、それからまた宮古島の古意角（こいつの）、姑依玉（こいだま）が原初の島に天下ったという神話、これらはすべて原初洪水型の神話にはいるわけです。」P70

「沖縄本島に行きますと、かつて国土が波にただよっていたという観念は、たとえば、『琉球神道記』という一七世紀の本によりますと、「昔此国初、未だ人あらざる時、天より男女二人下りし。男をシネリキユと、女をアマミキユと云。二人舎を並べて居す。此時、此島尚小にした波に漂へり」というふうに書いてあります。この場合、草や木を植えて島を固定したということが出ております。いずれにしても島がただよふという考えがあるわけです。」P92

「この原初洪水型の神話は東南アジアの兄妹始祖型洪水神話圏のなかでもことにインドネシアに分布しています。」P94

「沖縄におきましてやはり生みそこないの話がある（中略）たとえば多良間の民間伝説においては、兄妹が結婚して、最初にシャコ貝を生んだ。そして、その次に人間の子供が生まれた。それから沖縄のいちばん南の波照間では、最初に魚が生まれて、その次に人間が生まれたとっております。（中略）こういう生みそこないのなかでも最初に動物が生まれる、ことに水性の動物が生まれる形式が分布しているのはいったいどこかといいますと、日本・沖縄、それに台湾東海岸のアミ族なのです。ですからこの分布状態は、いわば、洪水神話圏の東の端の非常に海洋的な異伝ではないかと思えます。

（中略）国生み神話の非常に多くの要素が、いまあげた流れ島、原初海洋型、生みそこないとしての水性動物という三つの要素からみてもわかるように、だいたい中国の東部からインドネシア、ポリネシアのほうにかけ

ての大きな文化の流れと関連があるのではないかと思います。」P95～6

「イザナキ・イザナミという神名の語源は、南島語（アウストロネシア語、マラヨ・ポリネシア語）で《第一の男、第一の女》を意味するという事です。日本神話では、イザナキ・イザナミとともに性生活と死が始まっており、両神はまさに《最初の男、最初の女》であります。この語源、それに、（中略）三つのモチーフ、ことに原初洪水型の分布から考えて、両神の国生み神話をもたらした海人とは、元来は南島語系だったのではないか、という考えを私はもっています。」P95～6

沖縄におけるニライカナイ「神話」は、これらとどのような関係があるのだろうか。ないのだろうか。

#### 6) 日本神話の複数の起源

「日本神話の国土の起源の話には、おそらく東シナ海を中心とした漁撈民文化的な要素が顕著にみられます。それから農耕起源の話においては、おそらく中国南部の焼畑耕作との関連がみられます。そして、支配者文化においては、遠く西はイランなどの印欧系の語族とつらなる面がありますけれども、おそらく、アルタイ系統の民族を担い手として朝鮮半島をとって日本にはいつてきた流れと関係があります。そして、最後に論じました神武東征伝説では、高句麗・百済の建国伝説とのつながりが非常に顕著です。ここで大事なことは、支配者文化というものが、いわば、日本神話をまとめる全体の骨組みをあたえているということです。つまり、日本神話は何よりも日本の支配者・天皇家の起源とその国土支配の起源を語っています。これが、日本の古典神話全体をつづけているライトモチーフで、さまざまのその他の神話は、このライトモチーフによって神話体系のなかに秩序づけられ配列されているのです。したがって、国土の起源や文化の起源は、いわば王権の起源のための序曲や挿話という地位を神話体系のなかで占めているのです。」P120

沖縄では、諸神話に「全体の骨組み」を与えて、ひとつにまとめるという支配者系の神話というものがなかったといえるのだろうか。あったとしても、ひとつにまとめる成功しなかったといえるのだろうか。このあたりも興味深い。

「国土の起源についての神話はおそらく南島語系の漁労民文化を担い手としたものであって、弥生文化の重要な構成要素ではなかったかと思われます。次に文化の起源——ここでは農耕の起源——の神話ですが、これが中国南部から日本にはいつた焼畑耕作文化を母胎としていたとすれば、その年代についても手がかりが出てくると思います。つまり、佐々木高明氏の研究によると、縄文時代の終わり頃には、西日本に華南系の雑穀栽培型の焼畑耕作がはいつてきたといえます。してみると、オホゲツヒメ型神話もそれとともにはいつてきたものでしょう。ただ、この場合、その担い手が元来どんな語族であったかは、まだよくわかっていません。最後に、王権の神話は、宇気比神話も神武東征伝説もともに朝鮮半島から日本にはいつた支配者文化に属していたと思われます。その担い手は、いずれにせよアルタイ語族の一派だったでしょう。

（中略）『魏志』『倭人伝』の段階、つまり弥生後期の三世紀においても、すくなくとも西日本の支配層では、アルタイ語化が、ある程度、進行していましたが、あの「倭人伝」にあらわれた文化内容からは、まだとくにアルタイ系支配者文化の要素だといえるものは明らかではありません。他方、考古学のほうでは、五世紀、つまり

古墳時代になってから、朝鮮半島を経由して王侯文化ないし支配者文化的要素が日本にさかんにはいつてきたことが指摘されています。私は、ここで取りあつかった王権神話もこの王侯文化の流れと結びつけて考えるのがよいのではないか、と思っております。」P121～2

「日本神話の構成要素は、南方系にしる北方系にしる、単なる未開文化的なものというよりも、むしろ高文化的色彩をおびている。あるいは高文化的影響がみとめられることです。」P80

少し余談になるが、次の叙述にも興味がそそられる。

「中国の揚子江の下流の地域におきましては、春秋時代に呉と越という国が栄え、これがおたがいに争い合っていて、紀元前四世紀か五世紀ごろだんだん滅びていくわけです。そして次第に漢民族化していったのですが、呉越というのは、元来は漢民族ではありません。おそらく『魏志』『倭人伝』の倭人などと文化的に非常に近い連中であつたというふかに考えられます。そして呉越が滅びてしばらくして今度は日本において水稲耕作が始まる。ここに因果関係があるのではないかということが岡正雄氏などによっていわれているわけです。」P161

この時代における人口移動・移住、そして中国において漢民族がずっと支配的流れではなかつたこと、多民族構成の日本列島という点、では沖縄はどうだったのか、という点などに興味が注がれるのである。

#### 7) 自然と人間の文化

「彼（レヴィ＝ストロースのこと）の研究において強調されているのは、南アメリカの未開民族の神話をよくみると、書いてある表面は一応別として、一步深く踏みこんで考えてみると、そこには自然と文化とのあいだの弁証法的な関係が述べられているということです。見付の早太郎の話や朝鮮や中国の話の場合においても、自然のむき出しの暴力を人間が文化をもって克服するということが書いてあるわけです。

ところが、こういう神話や伝説ができた時代というのは、ある意味からいうと、人間はまだ幸福な時代であつたということができると思ふんです。つまり人間は文化の持っている可能性というものを楽観的に信ずることができた時代です。」P177

自然の暴力を文化で克服するという考えとは別に、自然と共生するという系列の神話や伝説はどうであつたのか、という問いかけがありえよう。そのあたりをさぐっていきたい。もしかすると、今日はそういう神話や伝説を創造しなくてはならない時代なのだろうか。

## 身体と自然、八光舎主との会話 (2007年6月28日)

6月24日、久高島を訪問し、八光舎主の案内で、今は忘れられがちになっている大切な聖地を巡り歩いたが、その途中、いろいろな会話をした。そのなかのいくつかを記そう。

1) 自分自身で自分の身体を感じるのは、身体のどんなところですか、と私は尋ねた。私自身は、日常あま

り意識してこなかったことであるが、最近、ハートチャクラおよびその下のあたりで、感じることもあると話した。ヨガをしている時とか、特別な気分で自然と対する時、たとえば胸を広げて、海や太陽や緑に接するときに、そのことをとくに感じる。

この問いに対して、しばらく考えておられたあと、「私は、細胞で感じる」とおっしゃる。身体なかの細胞レベルで、とのことだ。私には実感はないが、印象的な応えである。

2) 自生する植物・薬草を探すときに、益・毒を何をたよりに判断するのかについて、おばあから聞いた話として、ちょうちょうが花の蜜を吸うときに、吸い方をみていると、人間が食べられるものかどうかかわかると教えられた、とのこと。益・毒の違いで吸い方が異なるそうだ。私にはまだ実感はないが、これから注意して観察してみようと思う。最近、チョウチョに関心をもちはじめたこともあるし。

3) 薬用酒を飲むときに、どれだけ飲んだらいいかは、自分の身体が教えてくれるとのこと。

コヘンルーダ(別名「沖縄医者いらす」)は、苗店でも売っているし、昔から大変有効なものとして扱われてきたという文も読んだことがある。しかし、本によっては、有毒物質をもっているし、葉にさわっただけで、よくない反応を示すと書いてある。そんなことで、植えて成長してきたコヘンルーダをどうしたらよいか、わからずに来た。

その有用性と薬用酒の作り方を教わった。塩水(塩)を混ぜるのがコツだとのこと。早速つくってみた。そして飲む際には、数滴ずつたらしめて、適量を自分の身体にききながら飲むのがいい、とのことである。

4) この日の聖地めぐりでは、私はなぜか、へび、大型カニ(ヤシガニではないが、それに近いほどの大きさ)、ネコ、オオゴマダラに出会う。それは動物たちが聖地を導いてくれるのだ、という。

5) これはテーマとはずれる余談だが、かれに興味をもったのは、イザイホーを単純肯定する考え方にここ20年間私は疑問を発してきたが、同じような考えをもつ人がおられ、その方がかれであると聞いていたからである。イザイホーを含め、久高の神々、聖地、祭祀組織、行事も、首里王朝支配開始以降、大きく変化したとのこと。ノロのなかには、王府支配に抵抗したために、押さえつけられて、廃絶に近い状況になってきたものもあるという。

これからは私の考え。王府支配以前の神々・聖地・祭祀組織・行事は、当時の住民たち自らがつくりあげてきた、という性格を濃厚にもっていたはずだ。そのあたりは、百名から久高に移り住んだといわれる、穀物栽培を持ち込んだアマミキヨ系統の人びととかかわる話でもある。

さらにそれより以前はどうなのだろうか。久高島近くの水中考古学遺跡、あるいは水産物採集を軸に生活していた人びとなどの足跡をたどる必要もありそうだ。

いずもにしても、久高だけでなく本島でも、15世紀以前に限定してみた場合に、少なくとも三層で理解をすすめていく必要があるようである。

## 熊野の神々 (2007年7月3日)

熊野に旅をした。熊野の神々は興味深い。まず多様な神々が共存というか、共生というか迷うが、共在といったほうがよいのかもしれない。そして、多様な信仰流派をも受け入れる。融通無碍で、排除しないのである。

熊野の神のもっとも古いからあるものは、自然神のようである。木、山、岩、川、水、海、瀧、火などにかかわって存在する。本宮は熊野川の中州に長くあった。新宮の元は、すぐ近くの神倉神社であり、急峻な岩である。那智は、瀧を見る絶好の位置にある。だから、祭祀はそうした自然と深くかかわって行われる。

そうしたものに、時の支配者が関与して、評価位置づけをし統制抑圧をすることで、神々のありようも多様に変化させられてきた。たとえば記紀神話の神々になぞらえられる。あるいは仏教のいくつかの仏と結びつけられる。近年でいうと、明治天皇制による国家神道体制のなかに組み込まれる。

と同時に、民衆信仰が結びつく。それはブームになることも多い。熊野古道を歩く熊野詣、あるいは一遍が率いる念仏系などがそうである。広くいうと、修験道などもかかわる。だから熊野信仰とかかわる「豪族」めいたものが、時代によってはかなりの勢力を誇る。そうした勢力は中央政権争いのなかで、多様に「活用」されてきた。

そして、三山といわれるが、強力で統一されているわけではなく、おのおのが多様に展開してきた。さらに三山以外にも多様な信仰が存在してきた。

このような神々のありようをめぐる、私が興味深く感じることをいくつか述べよう。その一つは、多様な神々の原型が自然とのかかわりを色濃くもっており、その自然と深く関わり合う、というか、自然のなかに生きることで、人間が存在しているという発想が強い点である。「自然に抱かれる」といった感じである。だからその自然観は、自然と対峙するとか、自然を克服するという発想ではない。

この旅を通して、自然のなかにいる、自然のなかに包まれるという実感を何度ももった。山々でさえ、人びとにたちすくませるといった感じではない。抜きんでて高い山はない。屹立した岩もあるが、屹立した面よりも包み込む面を強く感じる。神倉神社の中心的存在の巨岩のすぐ脇に、包み込むように構成された丸い岩群があるが、それなどはそうである。いくつかのところで、子宮を想起させる木のうろとかが大切にされていたが、これもそんな感じを与える。

また、生と死=再生といったモチーフが広くみられる。本宮の山門前に「人生の出発・・・」という垂れ幕があり、それについて、清掃していた神官に尋ねたら、死=再生とかかわって、出発という言葉があると説明してくれる。また、那智神社に連なる補陀落寺を中心とする補陀落信仰などはその典型であろう。東方の太平洋に向かって、小舟で少量の食料をもって旅立つというのがそれである。それは、チベット仏教のポタラと同語源だという。また、沖縄におけるニライカナイ信仰とどこかで通じるものがある。そうした補陀落僧で、きわめて偶然のことだが、沖縄に流れ着いて、沖縄に熊野信仰をもたらしたとも伝えられている。また、私たちが宿泊した湯峰温泉の民宿小栗屋は、かなり著名な小栗判官の再生物語の足跡という。

そうした再生信仰が、ときには浄土信仰と結びついたり、あるいは別の形で、広く人びとをとらえてきたよう

である。

このように多数の神々群を受け入れ、莫大な信仰を集めてきた熊野であるから、熊野をめぐる、および熊野の神々をめぐる支配争奪の争いも激しかったようである。三山の微妙な関係にもそれが現れているようだ。また、南方熊楠が、天皇制政府による神社合祀に反対して、村々の神社を守る運動を展開したのもそうである。南方は、生物研究者であるが、単純な西洋科学一辺倒ではなく、南方マンダラを描くように、先に述べたような熊野的自然観とも深くかかわっている。

熊野にいと、この列島内外の実に多様な人びとの交流（時には争い）と、それにかかわる神々の多様な交流展開（時には争い）を感じさせてくれる。そして人間と自然との関係についても示唆することが多い。だから、それは沖縄の自然と人びとのなかに暮らす私の人生創造にも、多くの示唆を与えてくれそうである。

## 初詣はヤハラツカサと濱川御嶽 (2008年1月1日)

右写真は私が響きあう巨岩



## 我が家の火の神ーヒヌカン (2008年8月30日)

台所の神様。ガスレンジの上につけてある。



恵美子がたてて、毎日世話をしている。

ヒヌカンの上の絵は、スピリチュアルなもの。

恵美子の母は、我が家に滞在している時はいつも、ヒヌカンをたてて、お祈りをしていた。

恵美子もこうしたことに関心をもっているので、ヒヌカンのたてかたをどこからか習ってきて、はじめた。まだ一年もたたない。

## オーストラリアジャズと韓国シャーマンの音楽共振

(2008年7月3日)

何年ぶりか、テレビを2時間近くもみてしまった。疲れていたこと



もあって、テレビのチャンネルをぐるぐるまわして出会ったBSチャンネルで、強烈にひきつけられた番組だ。

オーストラリアのジャズミュージシャンが韓国を訪問して、シャーマンたちがつくりだす音楽に魅せられ、共演にまで至るドキュメンタリー番組である。スピリチュアリティの世界そのものである。そして、つくりだされる音楽がすごい。

私の身体に響いてきた。

私のもっていた音楽観をリクツではなく、感性的にゆさぶるものだった。それは、音としてだけでなく、スピリチュアルな世界と結びあうものだった。韓国音楽のあの「訴える」ようなゆさぶりが何なのか、ジャズの即興の豊かさは何なのか、音楽とスピリチュアリティとの結び合いは何なのか、いろんなことが、私の身体を揺さぶった。

また、音楽上の苦手意識をトラウマのように長く持ち続けている私の音楽観・感を揺さぶるものでもあった。「科学」で、「リクツ」で、音楽に対処しようとする面がかなり強く残っている私を揺さぶったのである。そしてまた、「近代科学」と「音楽創造」と「スピリチュアリティ」の関係について、あらためて感じつつ考えさせるものであった。

この強烈な印象は言葉では明示しにくい。いつか、自分なりの表現として出せれば、と願っている。

## 今年の私のエンジェルカード Spontaneity (2009年1月7日)

エンジェルカードというのがある。恵美子が、数年前イギリスのフィンドホーンに出かけたおりに購入してきた。恵美子は時々来客にこれをするが、たいそうな人気だ。

肯定的なアドバイスを一つの単語に集約して書かれた数十枚のカードから一枚を引く。その言葉の当人にとっての意味を、当人が、あるいはその場にいる人がいろいろと考えあう。だから、偶然性をもとにしている。しかし、その偶然選んだ単語について考えあうことで、自分なりの肯定的な方向を発見創造していくきっかけにするのだ。

そんな意味では、楽しい。吉不吉の運勢占いよりも、当人の積極的関与を引き出す点で興味深い。

私も年に一回ぐらいはする。昨晚、「今年のエンジェルカードをしよう」といって、二人です。2種類のカードがあって、その組み合わせで考えることにしている。

昨晚、二人で一緒にひいたカードは、release と generocity

私が引いたカードは、spontaneity と intraspect  
なるほどと思う。

以下は恵美子と私との会話をもとに、私自身が考えたこと。

とくに印象深いのは、spontaneity。

英和辞典だと、「自発性、自生、自発的な行為（動作）、外力によらない運動（自然現象）」とあるが、英英辞典などを参考にすると、「自然の流れのなかで、自ずとでてくるもの」という意味合いだ。だから、「自発性」と訳すと、だいぶ変だ。自分で頑張って「自発的」に振る舞うというのではなく、流れのなかでわきでてくるものに従うという感じだ。

そんな風を読むと、まったく今の私の通りだ。これからどんなことになるか、どんなことをするのか、それは「流れのなかでわきでてくる」ものに従うという感じなのだ。そのことが、他の三つの単語と響きあう。

こんな風にして、今年、これからの私が生まれてくるのだろう。しばらく前に、「make ではなくて become」ということについて語ったことがある。それに近いかもしれない。

今年の私は、私自身にとっても楽しみである。

## 私は感性派?! 久高での気づき1 (2009年2月9日)

2007年に続いて再度フィンドホーンから来沖したイアンとロージーがコーディネイトする、久高のワークショップで、私自身が体験したこと、気づいたこと、考えたことなどを連載していこうと思う。

グループ分けの際、水、火、地（土）、空気の四つのなかから、自分がそれに似つかわしいと思うものを選んで、そのグループに入るというやり方があった。

おもしろい。

私は、このごろ流れに任せ、そのなかから湧き出るものをもとに生きよう、つまり Spontaneity（なんくる）で行こうと思っているので、水を選んだ。コーディネイターから、水を選んだ人たちは「感性・感情豊かな人たち」だ、と話された。

ここでかなりびっくり。私は自他とともに認める「非感性派」であり続けてきたからだ。このところの私は、大きく「感性派」へと変化しているのかもしれない。恵美子を含め私を知っている人たちは、私は火だという。でも、最近の私は火の気分ではない。

別のアクティビティは、輪をつくり、目をつむったまま移動し、できたペアと、手のひら・指を通して、「怒り、孤独、愛」といった10近いいろいろな感情を伝えあう、というこれまた興味深い活動だ。私が行うワークショップでは、ボディランゲージを使う活動をかなり行うが、このように、身体を通して感情を伝えあうというものはない。私なりにこころみたい活動だ。

※2013年追記 その後、私流にアレンジして何回となくやっている。

それに、この活動は、同時に相互に伝えあう、というおもしろさもある。そして、この伝えあう活動を終えた

あと、目をあけて、相手が誰であったかを知ることになる。

私の場合は、未知の方にあたったこともあり、どんな方か見当がつかなかった。男性参加者が少なかったせいか、相手の方は、途中で私が誰だか気づいたという。そして、その方は、私がとても「感情豊か」というメッセージをくださった。私はその方に「よく働いている方だ」というメッセージを差し上げた。

私が「感情豊か」といわれたことにまたもやびっくりした。どちらかという、私は感情を抑え気味のタイプだったと自分では思っていたからだ。

どうやら、私は感情を豊かに出すほうらしい。新しい発見だ。

## エンジェルカード Power 久高での気づき2 (2009年2月11日)

エンジェルカードを引く。

正月の時は、Spontaneity だった。今回は、Power がでた。

私の読みとり。このところ、何か積極的にとびだしていくということではなく、Spontaneity で過ごしてきたが、少しずつパワー＝エネルギーがたまってきたようだ。何かをやり出す Spontaneity になりはじめたかな。

エンジェルカードを引く時、私はほぼすべて、肯定的方向で読み取る。

さて、この Spontaneity → Power からどんなことが、近く生まれてくるか。私自身楽しみにしはじめている。

エンジェルカードを引く時、小グループで行うことが多いが、今回も3人グループで行った。そうすると、当人の読みとりに対して、他のメンバーの「入れ知恵」が加わる。そうすると、当人の読みとり以外の「読みとり」ができて、当人の「読みとり」に異なる視野・深まりが生まれてくる。それがおもしろい。

たとえば、Efficiency を引いた人がいる。これをいまどきの日本語に訳して、「効率性」と読み取って、いやな気分になる人がいる。「癒し」を求めているのに、また「あのあわただしい世界でがんばらなければならないのか」というように、である。しかし、Efficiency を 「自分はやっつけられる。やっつけられる力があるんだ」というように読み取ったらと、まわりの人が示唆すると、その人はとても安心する。

私が引いた Power にしてもそうだ。「権力」のように訳すと全く異なった方向にむかってしまう。最近よく使われるエンパワーメントのような意味合いで、私は読み取ったのだ。

同じことは、参加者共通のエンジェルカードとしてひかれた Education についてもいえる。この単語を「教育」と読み、「おしつけ」「つめこみ」といういやな感じに読み取る雰囲気が出てきた。

コーディネイターが何か説明していたが、距離が遠くて聞きとれなかった。そこで、私はしゃしゃりでて、「引き出すという意味ですよ。」とコメントした。その場の雰囲気として、何か「安心感」のようなものが広がったように感じた。

後で聞いた話だが、コーディネイターもそのような読みとりを話したとのことだが、日本語になる過程で十分

には伝わっていなかったようだ。こんなことを考えると、英語ではなくて、日本語のエンジェルカードが必要のように思う。

私はもう一つおせっかいをしてしまった。Resilience を引いた人がいた。読みとりに困っていた。異なるグループだったが、「しなやか」「したたか」はどうですか。ウチナーヤマトグチでは、「したたか」はいい意味で使っていますよ。などと。日本語よりも、さらにウチナーグチでエンジェルカードを作ってみたら、などと思ってしまった。

もう一つ、エンジェルカードは名詞形で作られているが、引いた当人のなんらかのアクションにつながるという点で、動詞形のカードにしてはどうか、と思った。

### **すばらしいドアがどんどん開いてくる夢 久高での気づき3** (2009年2月13日)

久高宿泊交流館に泊まった夜の夢。

前方にとっても小さいドアか窓のようなものが、瞬間的に開く。

そのドアが消えたと思ったら、前より少し大きいのが開く。

また、もう少し大きいドアが開く。

という具合に、ドアはどんどん大きくなり開いていく。

そして、そのドアのまわりが金色に輝いていることに気づく。

金色になってからもどンドンドアは大きくなり、最後は、画面全体に広がる。

そのドアが私を導いていく。

こんな夢は見たことがない。最近では、日常生活にかかわるたわいもない夢を見ることが多く、すぐに忘れてしまう。

あんまりすごいで、恵美子に話した。何かを意味しているかもね、とのこと。朝の集いの一人一言をいう場面で、「夢を見た」と話したら、久高の知人が、「そういうのは、みんなに話したほうがいいよ」とアドバイスするので、夢の内容を紹介した。

ともかく驚いた夢だった。今後は楽しく開いていく象徴だ、とでも思いたい。

### **身体性。感情性豊かなワークショップ 久高での気づき4** (2009年2月14日)

この二日間、ワークショップスタイルで進行したが、スピリチュアルな世界に照準をあてている。

いろいろな思いを、自分の内面へ、あるいは他者との交流を通して外面へと深めていく。そこでは、身体性・感情性豊かに展開していくことにも特徴がある。そのために、歌や踊りも含めた身体交流を多分に含んだ活動が展開される。それは、テンポ早く激しく動きまわるというものではなく、ゆったりと穏やかに進む。

私のワークショップは、これまで知的討論を軸に展開しているので、この二日間の展開は、ある意味で新鮮であり、学ぶことが多いものであった。5年前、2年前とフィンドホーン関連のワークショップに参加したが、その時も、そうした世界にヒントをえて、私のワークショップにもその要素を少しずつついではじめた。

無論、それ以前からも、文化創造活動のワークショップや、子ども指導場面で役立つような集団遊び的なワークショップを行う場合も含めて、私のワークショップにも、身体性感情性にかなり比重をかけたものがあり、知的討論を軸にするワークショップでも、そうした要素を入れ込んでいた。

だが、私のこれまでのものは、かなりリズムカルなものであった。その意味では、ゆったりした流れのありようという点で、フィンドホーン関連のワークショップからヒントを得る点が多い。

そして、私自身が、ゆったりしたトーンが好きになってきたこともあり、近年の私のワークショップはゆったりしたものになりつつある。かといって、内容が薄まるわけではない。

若いころは、エネルギッシュな雰囲気をかなり前面に出して展開することになりがちなのだろう。それは私自身だけでなく、他のコーディネーターのワークショップに参加するときも感じることだ。これなどは、いい意味での加齢が必要なのだろう。

今回の活動のなかで印象的なものを一つあげよう。

全体が二重の輪をつくる。同じ人数の二重の輪である。

全員が目をつむる。そして、片方の輪がまわって、5人分だけずれる。

二つの輪が向き合い、前の人とペアになる。目をつむったままなので、ちょっと手間取るが。

そこで、ペアが両手を握り合い、コーディネーターが示す次のような言葉に沿って、「信号」を送り合う。

「安心」「怒り」「孤独」「愛」などといった具合に。

それらが終わってから、はじめて目を開け、相互に感想を言い合う。

大変興味深い。送り合う言葉が、感性豊かなものであると、目を開けたまま、相手が誰だか知っているを送りにくいメッセージを送ることができる。そのことで、感性豊かな交流が、身体を通してできるし、そのことでスピリチュアルな体験をかかなりたやすくできるという特性があるようだ。

## みぞおちあたりのチャクラが開いた感じ 久高での気づき5 (2009年2月15日)

5年前に、寺山さんがコーディネーターをつとめたフィンドホーン・ワークショップで、寺山さんが、私のハートより下のチャクラが閉じていると話してくれた。

その後、玉城暮らしをはじめ、また上原真幸医師が指導した体操などをするなかで、2年間ぐらいしてハート

チャクラが開いたと感じるようになった。

それ以降、気管支、そして食道と胃の境目あたりについての気づきが進んだ。私の気管支炎、逆流性食道炎も、それらに関係しているのかな、と感じようになった。

そして、最近になって、その下のみぞおち、へその少し上あたりのチャクラがもぞもぞしはじめ、開きかかっているかな、と感じていた。それが、久高で開いていると感じた。

胸から下へとすっと通るものを感じた。さらに、その下の丹田あたりのチャクラも少しだけだが、もぞもぞしはじめているなとも感じた。

このあたりについては、卓球をやめた90年代半ば以降、体重増加してくるなかで、内臓脂肪が増加し、なにか固まった感じがしていた。最近、胃酸を抑える薬を飲んでいることもあって、少しずつ体重が落ち、また、へそまわりのふくらみが減り、少しずつ、そのあたりが動くようになってきた、と感じることと並行している。無論、この4ヶ月ほどの休養もプラスになっているように思う。

身体的な動きと、スピリチュアルな動きとは並行しているようだ。

## 個人・人間関係と癒し 久高での気づき6 (2009年2月17日)

参加者は、コーディネイターを除けば、日本人。そのなかには、もともとのウチナンチュもいれば、沖縄に住むヤマトウンチュもいる。沖縄と本土の双方にかかわっている人も多い。無論、ヤマトウンチュで、今回旅で久高に来た人もいる。外国に住んでいて、今回久高にこられた方もいる。

気づいたことがある。一カ所に住みつづけているという生き方をしていない人が多いことだ。これまでの人生で、二つ以上の場所に住んできた人たちで、今後も現在住んでいるところにとどまる予定はない、という人が多い。

このことは、なにげないことかもしれないし、「そんなあたりまえ」のことと思う人がいるかもしれない。だが、興味深いことだ。特定の地域に「縛られていない」「縛られるのはいやだ」「住む条件がない」人たちなのだ。現住の地域にこだわって生きている人は少ない。

久高が、「古くからずっと続いてきた伝統」のシマのイメージをもち、久高に住む人は、本人はもちろん代々、このシマに住んできた人というイメージをひそませているのとは対照的だ。無論、現実の久高に住む人々がそうだというわけではない。たとえば、久高島から参加した人もいるが、ずっと久高に住んできた人ではない。しかし、そういう「伝統」イメージの久高と、「移動」イメージが強い参加者とは対照的なのだ。

「移動」イメージというというインパクトは強くない。「移住」イメージの方がいいかもしれない。もっとおおげさにいうと、ちょっとこわいが、「漂泊」「浮遊」「流動」イメージの方がぴったりくるという人がいるかもしれない。しかし、現代は、多くの人にとってそういう時代なのだ。

だから、人間関係も、地縁関係はとても少なそうだ。血縁関係はよくはわからない。人間関係は、むしろ新たに出会った人たちと結ぶ関係(カップル関係のほとんどもそれに含まれる)の方が多そうだ。この久高のワークショップ自体もそうした性格を濃厚にもっている。

このことを、私は「結社」(アソシエーション)という表現を使って、いろいろと論じてきた。しかし、「結社」というと、継続的固定的なイメージが強い。私はかなり柔軟にそれを使ってきたが、ここでは、「結社」というよりも、「一期一会」的な気持ちの人が強いと思う。そして、もしかすると、継続的な「個人的関係」を築くかもしれない、と思う人がいるかもしれない。

そうした固定的ではない個人的関係にしても、その人間関係を結ぶことにかかわって、「不安」を感じるなどの難しさを抱えて、その解決、ないは新たな人間関係構築のきっかけとして、ここに参加した人もいそうだ。

こうした問題を強く潜在させているのが、今回の久高のワークショップだった。

その際に思い至るのは、よくいわれることだが、欧米の場合、「個人の自立」を前提として一人ひとりが存在するのに対して、日本の場合、「個人の自立」に対する「遠慮」「躊躇」をもち、まわり・集団への「気配り」を大切にしつつ、「個人」を存在させているということである。

欧米・日本ともに、対人関係に「不安」「流動性」を感じる人が多く、それが「癒し」を求め、こうしたワークショップへの参加動機を生みだしているのだろう。「孤独不安」と「交流不安」の同居といってもいいかもしれない。

共通しているとしても、両者のアプローチには大きな違いがある。今回の参加者の多くは、このなかの日本のアプローチにベースを置きながらも、欧米のアプローチに親和性を感じつつ、なおかつそこに完全に踏み込めるわけではない。そうした参加者特性の中に、欧米由来のワークショップスタイルがおこなわれるということには、新鮮さと距離感がにじみ出る。

そして、私が何度も指摘してきた、アメリカ型のワークショップと、イギリスを含めたヨーロッパ型のワークショップの違いがあり、今回は明らかにイギリス型ワークショップであった点にも留意が必要だろう。さらにまた、「癒し」が主テーマになっている点にも留意しなくてはならない。

さて、もともにもどって、こうした参加者のなかには、まわり・集団との関係で「浮遊」的色彩を帯びつつ、「強い個人」でなく「まわり・集団」に強い気遣いをもつ、というタイプが結構多い。だから、「孤立」をおそれ、「孤立」に対して強くない。他方で、「まわり・集団」にのめりこまれることも恐れる。

この問題は、身体、とくに身体接触をめぐるでも浮上する。「強い個人」ではないがゆえに、身体接触に対する警戒感が強い。「呑みこまれる」という体感をもつ人もいるだろう。と同時に、他者と触れ合うことに安心感・喜びを感じることも存在する。

こうした意味では、「癒し」を求める多様な自助グループでのワークショップめいたものと共通する特性をもっていると推理する。

最初の方にふれかかって言い残したことがある。それは、地縁的世界から距離を置く参加者が多いということである。

その意味では、私がいつもいう「地球起こし」「地域起こし」「人生起こし」のテーマのなかで、「地域起こし」が脱落している。「人生起こし」が「地球起こし」と直結しているのである。かつ個人的色彩が強い「地球起こし」

になっている。そのことと「浮遊」することとは関係があろう。

## 聖地の消費と継承創造 コミュニティと個人 久高での気づき7 (2009年2月19日)

癒しを求めて、聖地にこられるということ全般について、感じたことである。

聖地の癒しを求めてこられる方はほとんどが個人としての癒しが関心の的である。そんなことは「あたりまえではないか、といわれそうだ。確かに、西洋医学でも東洋医学でも、その癒し、つまり治療は、個人としてのものがほとんどである。衛生とか疫学では、集団としてコミュニティとしてが問題になるが、基本単位は個人である。

と同時に、人間関係に困難を抱えて、かつ人間関係の構築のきっかけも求めて、聖地にこられる人が多い。しかし、そこには人間関係の問題があっても、コミュニティの問題がすっぽり抜けている。

よく、気の合ったもの同士で、宗教的生活や農業など、なにかを共同的におこなうコミュニティという話を聞く。しかし、それらは、まずは「気の合うもの」「目的が一致したもの」のアソシエーション(結社)である。コミュニティをつくるとしても、外に開かれているわけではない。多種多様な人が自由に参加できるわけではない。だから、その地域に以前から住んでいる人々と、トラブルが起きる話をよく聞く。

このような方々は、旧来の「共同体」型のコミュニティに距離を置く。その「くびき」から逃れようとする。よく、移住してきて、その地域にあるアパートメントや貸家に住む人が、「区費」の支払を断るケースがある。言い分は、区費を払っても何も得はないし、その地域の人とつきあおうとは思わない、ということである。それでいいのだろうか。無論、旧来の区の方にも改善の余地があることも多いが。

私たちは、「気の合う」人だけとつきあうわけにはいかない。日常的に顔を合わせる人とは、好き嫌いを別にしてつきあっていかななくてはならない。そして、それをよりよいつきあいに行きたい。

こんなことについては、私は20年あまり、制度と結社、全員加入制と任意加入制、アソシエーションとコミュニティなどといったキーワードを使って、いろいろと提案してきた。私の考えでは、この双方につきあえるようにしたい、と思う。

残念ながら、今日は、結果的に、「気の合う」人以外は、「商品」とつきあうようにして、つきあうという関係になってしまっている。

訪問した聖地でもそのような関係になっているのではないかと、思う。自分、ないしは「気の合う」人の「癒し」のための「祈り」を聖地ですることが多そうだ。では、その聖地を継承し守ってきたコミュニティの人たちとはどういう関係になっているのだろうか。そのことを問いかける必要があるのではないかと、思う。いずれは、その聖地を継承し守っていくつもりがあるのかどうか、それは大切な問題だ。そうでないと、その聖地が、「商品」と同じような対象に、つまり消費対象になってしまうのではないかと、思う。

「聖地の消費」といってもいいように思う。



ここ数十年普及した「観光」には、その要素が濃厚だ。だからといって「観光」を責めてばかりはできない。「観光」を通して、それまで自分がもっていた世界を広げ、新たな発見することはとてもいいことだから。そして、その新たなたくさんの発見のなかから、自分なりに、どんなものに参加し創造していくのか、ということへと発展していけばよい。

そんな意味からも、リピーター型観光、滞在体験型観光へと発展していくことが望まれる。場合によっては、移住し、コミュニティの新たなメンバーになるのもいいだろう。以前からずっと住んでいた人と新しい共同関係・共同創造が生まれることは、とてもいいことだと思う。

私たちは、これまで継続してきた聖地を守り大切にしているとともに、私達なりに聖地をつくっていくということもおこなっている。人によって、その比率はさまざまだが。

聖地を守ることと聖地づくりの双方にどう関与していくのか、そのことを個人としてだけでなく、コミュニティとして、どうするのか、という問いが求められてはいないのだろうか。

## 「前世は有名人だった」「ソウルメイトは有名人だ」という人 (2010年5月20日)

昔から「前世は～～だった」「私は～～の生まれ変わりだ」ということはよく聞く話だ。浄土真宗が盛んな地域で生まれ育ち、祖父が熱心な信者だった私は、よく「罰（バチ）があたる」という表現にであったが、その際に前世の話があたりしたので、こういう話は、小さいときからなじみがある。といっても、それを信じている人はそんなにはいなかったように思う。

今では、「前世療法」というのがあるくらいで、西洋医学や東洋医学と組み合わせて登場してくることもあって、結構人気を集めているようだ。沖縄では、ユタ判じで、「あなたの前世は～～だ」というのもあるらしい。

それに似た話で、ソウルメイトというのがある。「私たち二人はソウルメイトです」と自己紹介されたこともある。別に夫婦カップルであるわけではない。

こういったものは、その人なりの生き方なので、その「前世」や「ソウルメイト」とのかかわりで、当人たちの生き方をつくっていけばよい、と私は思う。そうしたものを持つこと自体、難じることはない、と思う。友人といったもの、カップルといったものの、その人なりの持ち方であると言ってよいかもしれない。

そうした人の場合、「前世の人」「ソウルメイト」のを見つけ方には、今の自分の体験や願望が投影しているようだ。ユタ判じの場合は、ユタの体験や願望が反映している。そして、そういう人に支えられたい、という願望が投影していることもありそうだ。

だから、前世の人には、名もない百姓というよりも、王子とか、姫とかいう、前世での有名人が出やすい。だから、そのことを通して、その人の願望が見つけやすいともいえよう。現世では実現しないことを、前世で実現するわけだ。あるいは来世で実現するのかもしれない。

残念ながら、私はそういう体験をまだもっていない。持つとしたら、どんな感じになるか。何かのワザに巧み

な「職人」が登場しそうな感じがする。

## 「ユタとスピリチュアルケア」を読む1 (2012年3月10日)

本の正式の名前は、浜崎盛康編著「ユタとスピリチュアルケア——沖縄の民間信仰とスピリチュアルな現実をめぐる——」ボーダーインク2011年であり、浜崎の他の執筆者は、宮城航一、安次嶺勲、プロハスカ・イザベルである。

本の帯には、「沖縄のユタめぐる民間信仰とスピリチュアルケアの関係を、哲学、死生学、医学、仏教、キリスト教、民俗学など、多角的な視点からとらえる」とある。まさにその通りの本である。

今後、さらに歴史学、政治学、教育学などの分野からの研究が進むと興味深いだろう。

ユタをスピリチュアリティの角度からクールにとらえることを含んで、沖縄におけるスピリチュアリティの問題を考えるのに、示唆に富む本だ。

キーワードの「スピリチュアル」について、次のように分類されている。

- I (狭義) 個人的で霊的な「スピリチュアル」
- II (広義) Iに宗教も含む意味で「スピリチュアル」
- III IとIIとは区別される非霊的・非宗教的な意味で「スピリチュアル」
- IV I、II、III全部を含んだ意味で「スピリチュアル」 P192

有効な分類だ。スピリチュアルのとらえ方は、人によって実にさまざまだし、スピリチュアル自体を反科学的なものとして、否定する人もいるだろう。日常生活で、スピリチュアルなものを感じない人は多いだろう。あるいは、スピリチュアルを言う人を「特異な人」というまなざしを持って見る人もいよう。ユタを「買う」人を前近代的な人だと言う人もいよう。

私は、スピリチュアルに対して、多様な見方・態度があつてよいし、それらの人々が並存というか共存しているということでもいいと思う。そして、意見は異なり対立しても、存在そのものを認めず排除することは許されないことだ。

近年では、WHOも健康の定義でスピリチュアルを入れる方向だ。

私はというと、IIIに分類されよう。海・森・岩などの近くでは、そうした気分が高まることが多い。そのことで、私なりのIを持つとも言えよう。宗教ともかかわりをもってきたが、特定の宗教に固定して関わっているわけではないので、IIと言うわけでもない。

こうした分類を使いつつ、本書はユタに一つの焦点をあてる調査研究にもとづいた叙述をしている。ユタについてよく知らない人が、クールな認識を得る上で有効だろう。

本の帯に「ユタは、沖縄の文化的背景に基づいた、一種のスピリチュアルケア・ワーカーである」というキャッチフレーズが書かれているが、的確な評価だろう。

## スピリチュアルケア 自然との和解 時間との和解 ユタ本3 (2012年3月18日)

スピリチュアルケアにかかわって、「スピリチュアル・ペインを持つ人々が求めるものとして、5つの関係の回復がある」という窪寺俊之の論を紹介している。その中で、私が興味をひいた[4]自然との和解、[5]時間との和解を紹介しよう。

「[4]自然との和解 自然の中での自分の存在に気づき、安心や平安を持つことで、自然から乖離した自己存在から、自然の一部としての自己存在に気づくことからえられる。(中略)

人間はこの大自然の一部であり、死後は大自然に帰っていき存在し続けるのだと考えると確かに何か安心できるような気もします。これはもちろん、死後の話だけではなく、生きている間も私たちは自然の中に入り自然と交わることで自然との一体感を持つことができます。(中略)

[5]時間との和解 死を前にして、残された時間、限られた時間を受け入れ、その中で自分を生かすことは、死を感じつつ残された生命と、苦しみを伴う時間を受け入れることから始まります。

——余命半年などの状態になってしまっても、その半年を受け入れ、最後まで自分らしく、人間らしく生きることは、自分の人生の締めくくりとして重要なことではないでしょうか。

スピリチュアルケアとは、以上のような求めに対するケアであり、それによる生きる意味・存在する意味の取り戻し(再構築)、人間存在の深いレベルに関わる癒しのことだと言えるでしょう。」P196-7

「和解」というからには、対立・敵対があったことを前提にしているのだろうが、そうした構図が、近代社会には広く存在している。そうした在り方そのものを問題にしないでいいが、そういう事態に陥った人が、「死」を前にして、「和解」を求めるといことは、分かる感じがする。そして、それにかかわって書かれた「スピリチュアルケアの方法」も説得力がある。

私にかかわって言うと、[4]自然との和解は、ここ玉城に住み始めて7年半が、まさにその過程であった。また、[5]時間との和解は、老の問題を我が事として考え始めた最近、模索しはじめた、というところだ。

## ケアする人自身がケアされる ユタ本4 (2012年3月22日)

「ケアされる——ケアする」にかかわって、次のようなことが書かれている。

「個々の家族によると思いますが、祖先崇拜では、死に行く者（終末期にある人）に寄り添う心が重視されてこなかった印象があります。ましてや、その思想を体系化し、死にゆく者を支援する体制を形成してこなかったように感じられます。ホスピス・緩和ケアでは、遺族に対するケアを大切な仕事として行っています。ホスピス・緩和ケアに入院中に患者の終末期ケアを家族と担いあったという流れがあるから可能なのです。」 P202

「メイヤロフは、一人の人格をケアするとはその人の「成長と自己実現」を助けることだと言います。たとえば、親が子供をケアするとは子供の成長と自己実現を助けることであり（中略）、教師が生徒をケアすることも生徒の成長と自己実現を助けることです。

メイヤロフのケアの考え方は（中略）ケアの対象が必ずしも人間に限られず「ものやこと」でも良いと言うことです。たとえば、画家が自分の絵を仕上げている（成長させ）、完成させる（自己実現させる）ことも絵をケアするというのです。

さて、そのようにケアすることによって、ケア対象の成長と自己実現を助けるわけですが、そうすることによって、同時に（結果として）ケアする人本人も成長し自己実現することになり、自分が存在する意味を創り出すこととなります。」 P206-7

こうした考え方は、ケアする人がしばしば陥りがちな、ケアは他者のために、自己を犠牲にするという考え方ではない。

他者をケアすることは、自己をケアすることだ、そんなケアのあり方を追求したい、という重要なメッセージのように、私には思える。

# 5、死

## 死の教育 (2005年9月8日)

9月3日の日本生活指導学会で、病院の訪問学級を担当している札幌の小学校教師三浦昌代さんの、ご体験をもとにした「死の教育」について興味深い提案があった。

そのなかで、「教師の死生観、人間観に力点が入りすぎることによって、子どもの死生観、人間観をまったく無視することになりかねず、『一方的な教え込み』に陥りかねない。デス・エデュケーションは、あくまでも双方向の授業であることを何度も教師は確認しながら進めるべきものである。また、デス・エデュケーションは、事実は事実として子どもに正しく伝える義務と教師の死生観、人間観を前面に押し出す危険性を孕んでいるものであることを認識し、子ども一人ひとり感性を大事にしながら、進めることが必要であろう」と提起されている。

全く共鳴できる提起である。死の教育はともすると、特定の「観」を子どもたちに教え込むことになってしまいかねない。特定の「観」には、特定の宗教にもとづくものもあれば、「お国のために」という類もあるし、さらには「生命は大切だ。どんなことがあっても」というものも含まれる。私自身、息子の死に出会うなかで、息子と同じ病気で死んだ子どもについてのある本を読んだとき、著者の特定の考え方を前提にして、当人やまわりの人の心情を強調する点で、強い反発を感じたことがあった。

大切なことは、三浦さんがいうように、「事実を事実として」伝えることと、「子ども一人ひとりの感性を大事」にしながら、「双方向」ですすめることである。三浦さん自身が、当初は自分のもつ「観」を伝えようとしたことから、子どもたちの多様な感性・「観」をコミュニケーションすることへと転換した。私もこのことが大切だと考える。

死は確かに「絶対的」だという性格をもつ。だが、それは死にかかわる人々が、絶対的になものに「帰依」することを求めると理解したくはない。「浄土」「極楽」「天国」へと旅立つことを「祈る」ことに終始したくはない。もっと現実的に、死にかかわる人々の相互関係がいかに豊かになっていくか、という角度から考え深めるものにしていきたいと考える。

予め設定されたものを教え込むのではなく、死をめぐる多様な感じ方・考え方を出会わせるなかで、おのおのが発見・創造しつつ深めていくこと、それが大切なのだと考えたい。その意味では、死の教育も、参加しているもののコミュニケーションを豊かに深めていくことが軸になるのだ。

その意味では、死をめぐる事態のなかで、どういう質のコミュニケーションが交わされていくか、それを大切にしたい。8月に父を亡くし、葬送の集まりにかかわったが、そのなかで父のことについての話がほとんどでなかったことが私には異様に思えた。高齢で、「長寿を全うした」に近い状態であったのであるにしても、何か寂しさを覚えてしまった。その話を出さない・遠慮するのが習慣なんだろうか。実家を離れてもう45年もたつ私には、そのあたりの事情はよくはわからない。

## 『誇りを持ってわきへどけ』 死にかかわるケストナーの言葉 (2009年3月16日)

知人の死とかに出会うと、誰でもそうだろうが、死について思うことがある。先日、偶然「岡本喜八・みね子の300日」というテレビ番組の再放送を見た。そこで、ケストナーの次の言葉が紹介されていた。

「人生を愛せよ 死を思え 時が来たら誇りを持ってわきへどけ」

すごく印象深い。たった3行だが、蘊蓄が深い。そうありたいと思う。この番組では、夫がマッサージをしてくれる妻に、「どなたさまですか」と問うシーンがあった。私の父にも同じことがあった。

また、妻が散歩している時に、娘に夫が「ずっと愛している人がいる。その人も私を愛しているはずだ。結婚したいが、いいかい」と語りかける。娘が「誰」と聞くと、「今、散歩にいていて、いないけど」とこたえる。こんな印象深いシーンが続出だった。

私は涙もろい。年をとればとるほどそうなってきた。私の父親と同じだ。この番組をみながら、結構泣いてしまった。

## 死 あるがままを受け入れる 米沢慧「自然死への道」 (2011年7月13日)

米沢慧「自然死への道」(朝日新書2011年)のなかの、死を間近にした時にかかわる、以下の叙述は注目される。

「ホスピスケアとはこのようなイノセンスの表出(無垢なる願いを消すのではなく、むしろ、うながし受けとめることにちがいない。なぜなら、さいごのイノセンスは「生まれてきてよかった」「生きてきてよかった」という引き出しを目一杯開放することだからである。その後に死の受容がやってくるというように。) P210~1

「いのちの物語は死を前にしても「和解」への道をたどるとはかぎらない。さいごまで予断をゆるさない。「臨床はハッピーエンドを求めてはならない」「病む人のために、病む人とともに、あるがままでもいいのではないかと徳永医師は言う。」 P221

「〈明け渡しと降伏には大きなちがいがある。降伏とは、たとえば致命的な病気の診断をうけたときに、両手をあげて「もうだめだ。これでおしまいだ!・」ということだ。しかし、自分を明け渡すことは、いいとおもった治療を積極的に選び、もしそれがどうしても無効だとわかったとき、大いなるものに身をゆだねる道を選ぶことである。降伏するとき、われわれは自分の人生を否定する。明け渡すとき、われわれはあるがままの人生を受け入れる。病気の犠牲者になることは降伏することである。しかし、どんな状況にあっても、つねに選ぶことができるのが明け渡しなのだ」

〈許す人生を選ぶか許さない人生を選ぶかは、その人がきめる問題である。だれもがそのいずれかを選択する

ことができる。皮肉にも、傷つけた人より傷ついた人にとって重要な問題であり、傷ついた人が癒されるという意味で、許しは自愛的な行為だともいえる。死の床にある人が、それまでは得られなかったところの平安を見いだすのは、死とはともあれ手放すことだからだ。許しも手放すことであるという意味では、死とおなじだ。許さないということは、むかしの傷や怒りにしがみついていることである」 P 224

これらの叙述の中心的な文を並べよう。

「無垢なる願いを消すのではなく、むしろ、うながし受けとめる」

「あるがままでいい」

「あるがままの人生を受け入れる」

「許す」

「手放す」

これらと対照的な言葉として浮かんだ言葉のいくつかを並べよう。

理非曲直をつける 正邪・正誤を判断し結着をつける 戦う 競う

私たちは、この対照的なありようのはざまに生きている。人様々だ。といっても、人生前半では、「結着をつける」型が支配的で、「あるがままを受け入れる」のは、人生後半に多くなりそうだ。

だから、上の一連の文は、死の直前だけでなく、人生後半、人によっては、それ以前からじっくりと深め、受け入れていくのだな、と思う。最後まで受け入れない人も多いが。

## 葬送の変化 宮本本36 (2012年4月3日)

「変わる葬送の実態—葬送の個人化—」という項目で、次のように書かれている。

「家族の変化と長寿化は、人生の最後にある葬送に関して大きな変化をもたらしている。まず、家族によって死者（先祖）の遺骨が継承されていくという葬送のシステムが崩れてきている。また、少子化のため、跡継ぎの確保が困難になって墓を守る者がいないケースが増加している。また、人々の意識の変化もある。現在の高齢者世代は、親に対しては伝統に従って、祖先祭祀の観点から葬ってきたが、自分の意思で選択した方法で、自己決定によって葬ってほしいと考える人が増加している。」 P175

とくに都市地域でそう言えようが、人口減の著しい農村地域でも、同様の問題が生じていそうだ。

ところで、詳しいことはまだ学習していないが、今日、広く見られる葬送方式は、どれくらいの歴史をもっているのだろうか。武士などの上層階層はかなり古いとしても、一般庶民の場合は、200年もさかのぼらないのではないか。上層階層の方式が徐々に一般庶民にも普及していく過程があるのではないか。もしそうだとすれば、今日

に至るまでの人口増の時代に一般化したと言えるのではないか。それはその時代に典型的な家族・親族と地域共同体のありようと結びついていただろう。

その家族・親族、そして地域共同体のありようが激変している近年、その変化は止まることをしらず、今後も続くだろうし、それは人口減の時代的ありようと結びついているだろう。上に紹介した変化は、こうした事態を反映しているだろう。

とすると、人口減と結びついた家族・親族および地域の変化を反映した葬送を模索創造する過程の進行開始が、上記の変化を作り出しているとも言えるだろう。

私が住む沖縄でも、最近、「無縁社会」が話題になっているように、あるいは門中墓ではなく、永代墓の広がりや話題になっているように、変化がきざしてきている。100年以上以前に、一般庶民に広がった門中制度や葬送のありよう、地域共同体による葬送の運営関与が大きく変化してきている。

私個人も、どうすればよいのか、考え始めている。

## 『別様な自己』と「自己同一性」「死は生の一部」生活本11 (2012年9月25日)

「第14章 高齢者の生活世界と社会的受容」のなかには、高齢者にかかわって、これまでの「常識」とは異なる捉え方の紹介がなされている。2点紹介しよう。

「認知症の世界の側からの問いかけともいうべき記述を、まず、天田城介の力業から引用しよう。

「むしろ、彼／彼女らの自己は『失われてゆく自己』ではなく、『かつての自己ではない』『別様な自己』という“自己の偶有的可能性”を開示するものである。我々が『かつての自己でない』ことを『失われてゆく自己』として感受してしまう機制こそ、我々が近代社会においてもっとも強力に人々を強制する<自己同一性>規範という力に絡め取られているということを示す証左である。」」P253-4

次の、小澤勲論の紹介も興味深い。

「「自己同一性への強迫的こだわりが、かえって自己同一性の保持を危うくし、大きなゆれを招く。その悪循環が認知症者を追いつめる、と述べた。ということは、この悪循環から解き放つことができれば、逆に彼らの自己同一性の崩れを最小限にできる、とは考えられないだろうか。」」P254

こうした捉え方をすることが、しばしばいわれ、そのことに拘る(囚われる)ことによく出会う「生涯貫き通す」「一筋の」生き方というものを相対化してくれるだろう。これは、本人自身の自己把握、他者の当人理解の双方にかかわることだ。

こんなことも考えたい。アイデンティティは、関係性のなかで形成されるという把握が広く見られるが、「自



己同一性への強迫的こだわり」を相対化し、『別様な自己』と把握することは、関係性をも『別様』のものとして形成していることにもつながるのではないか。

興味深い問題なので、考え続けたい。この問題ともかかわるが、生と死のとらえ方についての本章の諸論の紹介にも注目した。まずよく知られたベティ・フリーダンの論だ。

「私は、各個人が死は生の一部であるという現実に向き合うことが、老いを真に生きるために必要であると思っている。」（『老いの泉』）

そして、柳澤桂子論である。

「生命の歴史のなかでは、生と死はおなじ価値をもつ。生きている細胞より、死んだ細胞の数の方がずっと多いという意味において、それは死の歴史でもあるといえる。36億年の生命の歴史のなかに編み込まれた死を避けることはできないし、それは避けてはならないものである。死によってこそ生は存在するのであり、死を否定することは生をも否定することになる。

多細胞生物にとって、生きるとは、少しずつ死ぬことである。」P255

人間を個人としてとらえるだけでなく、関係性の中でとらえるという発想を含んでいるし、さらには、ヒトという種のなかで把握することを含んでいる。さらには、ヒト種にとどまらず生命体全体の把握などと広がって行く。このあたりになると、宗教的な把握とも関連してくるだろう。

## 帯津良一さんの壮大で勇ましい死生観（2013年3月16日）

貝原益軒の「養生訓」を紹介コメントした帯津さん本のなかに、次のような一節がある。

「ここで語られている養生とは、身体を労り、病を未然に防いで天寿を全うするという、どちらかと言えば消極的で守りの養生である。

しかしこの考え方は、あくまでも身体を対象とするもので、死を以て終われりとするところが私には物足りない。これからの養生は焦点を身体から生命に移し、生命のエネルギーを日々高めていって、死ぬ日を最高のレベルにもっていき、その勢いで死後の世界へ突入する。それまでには虚空へ還るための準備期間であり、地上エネルギーを充填した我々は、また百五十億年の彼方へと旅立つ。それが「死」なのだと思う。こうした死を前にして、クライマックスともいえる現在の生命の躍動が待っているのだ。こう考えると楽しくなるではないか。」（帯津良一編著「図解雑学 養生訓」ナツメ社2012年P22）

この考え方は、帯津良一「死を思い、よりよく生きる」（廣済堂2007年）に、より詳しく述べられている。

私は、「アンチエイジング」「若さを保つ」「不老長寿」「病と闘う」といった、よく言われる考え方を好まない。引用の冒頭にあるような貝原の考え方の方に馴染みを感じる。

帯津さんは、それを「超えて」壮大かつ勇ましく述べている。現在の私は、それに距離を感じる。それにしても、「死」について自分なりの考えを持つようにしなくてはならないと思う。その際、いたずらに死を敵対視し、恐怖をあおるような発想は避けたい。その点では、帯津さんの考えは参考になる。

## 6、追悼

### 近藤郁夫さん逝く (2008年9月23日)

近藤郁夫さんの訃報が入った。彼は私とほぼ同世代。もう30年ほどのつきあいだ。

生活指導研究をともに長くつづけてきて語り合うことが多かった。私が、発達の視点をもった生活指導研究をしていた80年代はじめ、いろいろと示唆を受けた。私の仕事を彼はとても好意的に認めてくれてくれて、うれしく思ったこともあった。

同じ80年代、日本生活指導学会の創設時期をともに担った間であり、名古屋南部での共同調査活動もおこなった。90年代に入ると、彼は学会の事務局長としても尽力してくれた。

また、対話とか共同とかいったテーマにかかわって90年代初頭によく討論した。

そして、90年代半ばころだったか、かれは「中年の生き方」というテーマで、学会で問題提起をした。そんな彼の問題提起が、その後の私に「人生創造」を考える、大きなきっかけを与えてくれた。

80年ころには、大学教育実践をともに語り合う関係でもあった。お互いの実践記録を交換したりもした。

かれの人柄は、とてもやさしく面倒見のいい好人物だ。頼まれると断りきれないタイプだったのだろう。大学の学生部長という激職を引き受けた。私は彼の健康がとても気になって、声をかけたりもした。

その彼が、鈴鹿連峰の御池岳にはまって、かなりの頻度で登山をし、その山頂近くにたくさんの「池」をみつけた。それらの写真集、探索記を、私は何冊もいただいた。私自身が体調をくずしたとき、その彼の本を読みながら、とても強いインパクトをいただいた。一度連れて行ってほしいという希望は実現しなかったが。

かれはたくさんのやりたいことを残したかもしれない。かれは、「無情」「無常」を感じつつ、人生をかれらしく歩んだといえるかもしれない。充実を感じたことも多かっただろう。このあたりのことは、私には深くはわからない。

それにしても、大変豊かなものを彼は創り出してきた。それに響きあいながら、私も歩んでいきたい。

### 城丸章夫さんとの思い出 (2010年5月28日)

城丸さんが、27日逝かれた。93歳。

城丸さんと私の出会いは、1970年代だ。ご一緒に仕事をさせていただいたことのなかで記憶に鮮明なのは、全国生活指導研究協議会の「幼児教育分科会」の担当委員の時だ。城丸さんはよく話すので、私が司会をしているとき、予め「時間制限」をして、途中でストップをかけたり、「今は待って下さい。出番の時を言いますから」としたりするほどだった。楽しそうに従って下さった。

城丸さんの話は、自分の高説を話して、相手をそれに従わせるというものとは異なり、自分が関心を持ち、参加者が共有したいことを指摘して、参加者に新たな発見をしてもらう、といった感じだった。私は、実践の事実のなかから学び、理論を構築していく過程について、多くを学ばせていただいた。

城丸さんは、新鮮な感覚、鋭い感覚の持ち主で、はっと気付かされることが多く、彼の論文から多くのことを学んだ。師匠一弟子という関係ではないが、彼の提案を受けて考えたことが何回もあった。

たとえば、「民主的交わり」の問題提起は、私には大きく、「子どもの発達と生活指導の教育内容論」（1985年 明治図書刊）には、彼から学び、刺激を受けたことが多い。軍隊教育や平和教育、道徳教育などでも多くを学ばせてもらった。

一緒の仕事ということで言うと、1983年12月創設の日本生活指導学会の設立準備過程、発足後数年間は、頻りに御一緒させていただいた。生活指導学会が、心理・医療看護・福祉・司法・教育など多様な分野からの学際的なものになっていくについては、城丸さんの功績はすごかった。いろいろな分野のかたをよく御存じで、いろいろな方に声をおかけになった。城丸さんの縁で、学会にかかわられるようになった方も多いただろう。

では、学際的な論議や運営をどうするか、それについても、城丸さんから出てくる意欲的な提案が生きることが随時あった。城丸さんの新鮮な感覚、出会いと組織を豊かにするルールづくりなど、多くのことを学ばせていただいた。

もう一つ印象的な記憶がある。私が沖縄を離れて、愛知に移る直前、沖縄でお会いする機会があった。そのとき、沖縄にとどまって働くことの大切を論されたのだ。沖縄にそれだけ注目し、大切にされていたのだ、と思う。結果的に、私は沖縄に戻って来てしまった。

思い出は尽きない。まずはここで区切ろう。

## 平良勉さんの思い出（2010年5月23日）

5月21日、逝去なされた。大変お世話になり、思い出深い方だ。

1973年、私が琉球大学教育学部に赴任して以来、多くの場面で出会い、お世話になるとともに、共同の仕事も多くさせていただいた。

まず「水泳実習」。琉球大学教育学部小学校課程は当時、平良先生を中心に水泳指導に熱心で、夏には合宿で「遠泳」なども行っていた。青年時代、膝関節とか気管支とかのこともあって、スポーツ不完全燃焼であった私は、この時期、「青年期を取り戻すべく」体育館・運動場・プールなどにもよく通った。

そこで、平良先生と出会い、「ドル平泳法」講習会に誘われ、さらに「遠泳」合宿にも誘われた。私は喜んで出かけていき、「ドル平泳法」の指導法、「遠泳」指導を彼から習った。「遠泳」中の学生に黒砂糖を配ることを担当した際に、黒砂糖を投げていたので、かれにうんと叱られたのも、今になっては楽しい思い出話だ。

さらには、「ドル平泳法」を開発した学校体育研究同志会の全国合宿（志賀高原）にも、彼に同行し参加した。「宴会」での議論は面白く、朝方3時まで議論していたのは、彼と私を含めて数名だった。

そして、私は、「遠泳」合宿でのキャンプファイア行事指導にもかかわるようになる。彼との協同の仕事は継続

していく。後に、「遠泳」を含む、新入生向けの教育学部行事となったものだ。そのあたりのことは、琉球大学三〇年誌か四〇年誌に書いた。また、この取り組みで行った行事指導は、教育研究上も重要な提起を含むもので、このことは、何度も原稿化した。

また、一九七〇年代、沖縄の民間教育研究団体の連絡組織を作る際にも、平良さんには代表格の仕事をしていただき、私は事務局長的役割をとった。

一九七〇年代末から八〇年代にかけて、教育学部の教育改革に取り組む大がかりなプロジェクトの際にも、多くの事をしていただく。

体育学科の学生指導にかかわっても共同させていただくことが多かった。今日の沖縄体育界の中心を担っておられる方にも、当時のメンバーがたくさんおられる。

我が家は彼の家に近く、かれの家での「飲み会」には何回も参加した。

私が愛知から沖縄に戻ってきた二〇〇四年には、わざわざ玉城の我が家までお出ましいただいた。その時が最後の出会いになってしまった。

彼が果たした役割・功績は巨大だ。先駆的であるとともに、次世代を育てる上でも抜きんでいた。まさに深い尊敬に値する方だ。

個人的にも、やんちゃな私を叱り教え励まし、たくさんのことを共同でして下さった平良さん。

ありがとうございました。

## 愛知の教育での、「当たり前」という異世界の創造——角岡正卿

(2010年7月5日)

3月に逝去された角岡正卿さんを追悼する「角岡正卿追悼文集」を、角岡さんが指導的役割を果たしてこられた愛知生活指導研究協議会が作成され、私にも届けられた。私がこのブログに書いたことも転載されている。加えて、彼自身がパソコンに残した『自分史』も合わせて届けられた。

文集に寄せられたものは、生活指導研究協議会関係者による執筆になるが、角岡さんとの実に様々なかかわりがある。角岡さんの魅力のなせるものだと思う。多面に活躍された角岡さんであるので、おそらく絵画・美術・演劇などの関係者からも、別の形で追悼的なものが集められているであろう。

この文集は、教育関係者ばかりという特性が良く出ていると思う。そして、当然のことながら、愛知の教育関係者が多い。その愛知の教育関係者には「当たり前」だと思われていることに、彼は挑戦してきた。異なる視野から問題提起をし、実践で表現してきた。絵で表現してきたと同様に。

『自分史』によると、5～7歳の2年間の満州時代を除くと、愛知におられた。私の体験から考えると、愛知に生まれ育った人は、愛知の中にずっといる率が高そうだ。大学生などでも、愛知県内の自宅通学生の率が高かった。愛知県内の女子学生から「他府県の大学に行きたかったが、親が許さなかった」という話をよく聞かされた。経済的理由は少ない。そういう慣習とでもいえそうだ。

外に出るよりも、守っていれば大丈夫、というだけの豊かな経済力を誇り続けてきたことも一因だと、私は思う。その経済力は、江戸時代以前から続いてきた。今でも他府県から仕事を求めての流入が多い。沖縄からも多

い。というより、近年では、かつては沖縄からの移動の主力であった関西への移動以上に多いかもしれない。

そして、他府県から愛知に移動した人々は「郷に入りては郷に従え」で、愛知になじもうとしてきた。関西ほど、県人会は活発でない。九州出身者が多いのだが、その子どもたちは、親の世代とは異なって、先の世代が生育した地との付き合いは希薄だ。だからといって、居住地で、元々の愛知の方たちとの付き合いが深いわけではない。元々の愛知の文化と、移住してきた人が身につける愛知の文化とは距離があるように思う。たとえば、おおよそにおいて、移住してきた人々は都市的生活を送る。

こうした距離は、教職員の中でも、元々の愛知の人と、移住してきた人々との距離となってあらわれることもある。そのなかの元々の愛知の流れの中に、愛知の教育の主流は置かれている。移住してきた人も、その流れの乗ることを否応なく迫られる。

愛知の教育は、象徴的には偏差値だが、細かい数字による管理、その管理に従うことを軸に進められる。それは長い歴史的な蓄積のなかで形成されてきた。その世界しか知らない人にとっては、どうってことはないかもしれないが、異なる世界から来た人、異なる世界を知っている人、異なる世界の空気を知っている人にとっては、驚きとなる。

こうした愛知の教育に対して、異議を表明することは大変難しい、と思える。角岡さんのように、異なる世界から来たわけではない、元々の愛知の人が異議を表明するのは特に難しいかもしれない。だが、考えようによっては、たやすい。というのは、主流愛知で「当たり前」のことにに対して、主流愛知以外で「当たり前」のことを提出することだけの事だから。無論、それはすぐに抑圧される。

角岡さん自身が書いた『自分史』は、愛知の教育界のなかで、主流愛知から受けた抑圧の物語だらけだし、それとは異なる世界の発見と提出の物語だらけだ。

では、角岡さんの異なる世界の発見と提出の源は、どのようなものか。『自分史』によると、満州にかかわる幼年期体験。農業体験。絵を中心とする美術の世界。社会発見・社会関与でもあった青年期体験。全生研を中心とする日本各地の教師たちとの出会いと共同創造。ヨーロッパ・中国を中心とするたびかさなる海外旅行。

異世界との出会い・交流・協同は、人々が今生きている世界についての再発見・再創造の契機を与える。今生きている世界の中だけに生きている人には見えにくいことが、見えてくる。

しかし、いくら海外旅行など異世界に触れる体験をもっている、逆に、自分が今いる世界の絶対化に至る人も多い。再発見・再創造に至るには、角岡さんのように、新鮮かつ柔軟な感覚、そしてしたたかな姿勢が必要だろう。彼が、絵や演劇などを通して、常に創造活動をおこなっていたからこそ、できたことだろう。教育実践も常に新鮮な創造活動として展開していた。既存のものにヒントを得ることはあるが、それを自らの新たな創造として展開していたところに角岡さんの魅力がある。

## 坂本光男さんの追悼・・・追悼の辞を書くことが多くなった

(2011年2月12日)

このブログ記事でも、追悼文・故人の思い出話が結構増えてきた。同世代、ないしは私より10～20才年長の方で、故人になられる方がだんだん増えてきたのだ。男性の方が多い。元気な70代80代の方も多いが、60代になるかならぬかで他界される方も目に付く。多方面で活躍してきて働き過ぎで体調を壊す方も多い。

大まかに言うと、20世紀半ばに生まれ、戦後社会のなかを必死に生きて「頑張っ」てきた方が多い。その意味で、戦後の時代を作ってきた人が多い。特に60年代70年代の日本社会を担ってきた人が多い。

と同時に、80年代から少しずつ明らかになり、90年代に入るといよいよ明瞭になってきた時代変化のなかで、それへの創造的対応で格闘された方も多い。そのあたりは複雑だ。人によっては、60年代70年代の流れをさらに発展すべきであり、未完であるその課題をやりぬくための奮闘が必要だ、という人がいるし、他方、むしろ60年代70年代のありようの変更が迫られているのに、その対応が遅れているという捉え方もある。無論、創造的に新たな生き方を実践されている方もいる。

そうした課題意識をもっていると、60歳代以上の方々との出会いには、多様な豊かさを感じるとともに、複雑なものを感じさせられることも多い。

そんなことに思いを致しながら、今回坂本光男さんの追悼文を書いた。中学校教師で、生活指導実践を中心に教育運動をリードしてきたお一人だ。

追悼文集への寄稿を依頼されて、次のように書いた。

.....

#### 生活指導・生き方の時代的提起

日本の生活指導は、世界的に見て大変独創的で、高度な水準なものである。その水準を飛躍的に高めた一つに1960年前後から1960年代にかけての集団づくりの営みがある。

それは、「豊かさ」と民主主義を希求する時代背景のなかで、「豊かさ」と民主主義にかかわる子どもたちの力量を高めようと、日本の民間教師たちが、独自に実践の中から作りだしたものである。

その担い手・リーダーのお一人として坂本光男氏がいる。生活指導の実践と研究運動を通して、民衆的基盤にたった時代創造にリーダーシップをもってかかわる姿勢を強く持つておられた。それ以降も、それらをさらに深め広めるべく奮闘されてきた。だから、それ以降の運動の中でも、リーダー的役割はいうまでもなく、いわば象徴的存在として活躍されてきた。

時代が進み、社会的変化が激しくなるなかで、生活指導の実践・研究・運動も、新たな水準が要求されるようになったことはいうまでもない。そして、1980年代後半以降、様々な模索試行が展開されてきた。にもかかわらず、時代と社会の必要に対応しきれているかという「いまだし」の感はぬぐいきれない。

それは、その前提に、1960年代までに形成された蓄積・財産の水準の高さがあり、それらをどう評価し、どう継承し、どう発展させ、どう組み替えていくかという、大きい課題があることの反映であるかもしれない。

今日、1960年前後、ならびに1960年代に存在した歴史的課題に匹敵する、ないしはそれ以上の大きな課題に直面し続けている。そうした歴史的課題に取り組むにあたって、坂本さんたちが築き上げてきた歴史から

おおいに学び検討していくことが求められている。それは世代を超えて、今日、生活指導にかかわるものの避けられない課題である。

さらに言うと、生活指導は「生き方」「人生」の追求でもあり、実践相手の子どもたちだけでなく、実践する教師たちを含めて大人自身の課題でもある。時代時代に人々はそれを追求してきたが、戦後は、「豊かさ」と民主主義を希求する新たな生き方・人生を創造する時代でもあった。坂本さんは、その移行期において、一つの時代的モデルともなり、多くの人が、彼からから学び、彼を追った。

今日、人々、わけても生活指導にかかわる人たちが、どのような生き方・人生を創造していくのか、その点でも学ぶことの多い坂本さんだ。その創造でもって、坂本さんの貢献に報いる責務が、後に残されたものにあるのではなかろうか。



# 7、人生創造

## 「人生創造」ワークショップ (2003年9月1日)

現代の若者たちが、「未来から逃走」し、自らの人生を創造することで、困難を抱えているという認識をもちはじめたのは、90年代半ばのことだった。そんなこともあって、未来教育・人生創造ということを提案しはじめたのだ。

そのテーマでワークショップを展開しはじめたのは、1997～8年の大学一年生を対象にした「基礎ゼミ」であった。それ以来、多様なワークショップを創造してきた。そして、今、大人たち自身の人生創造にもかかわってのワークショップの必要を感じてきた。若者たちだけでなく、大人たち自身が人生創造での試行錯誤・模索状況にあるからである。ということ意識して、生活指導学会でのワークショップ「人生創造」をおこなったのである。また、全生研大会でも自主企画としておこなった。

双方とも、参加者自身が人生創造を考えるということも含んではいるが、人生創造に関与する実践をどのように展開するか、ということ当面の目標とするものであった。実際のところは、参加者が、「人生創造」などということについて、多様な人々と交流すること自体が、新鮮な驚きと豊かさをもたらしているようである。ということもあって、この9月には、この両者を含んだワークショッププログラム・展開報告を執筆しようと考えている。

## 単行本『〈生き方〉を創る教育』の執筆 (2004年5月7日)

ここしばらくホームページの随想執筆が滞った。単行本『〈生き方〉を創る教育』の最終仕上げ作業のためでもあった。近年は、ワープロ入稿であるから、入稿ができれば、本製作は早い。ということで、6月発刊ということに繰り上がった。今回の仕事もまた、大月書店の鹿沼さんに大変お世話になった。

当初は硬い理論書のつもりであったが、いつものように丁寧に原稿を読んだ彼からたくさんのアドバイスをいただき、それをもとに加筆するなかで若い学生たちにも親しみやすいものへと「化けて」いった。原稿執筆というものは、自分の文章のなかに「はまりこんで」、「第三者の目を失い」がちである。そこから救いだし、読者との対話作業へと引き戻してくれる、というのが編集者の貴重なお仕事だとつくづく感じさせられる。

今回の単行本のタイトル決定も何度も往復して決まった。これまでの大月書店発行の私の本は、彼のアイデアによるところが大きい、というか、ほとんど彼の「功績」である。私には少々恥じ入るような「授業のワザ一挙公開」もそうであった。今回もシンプルであるが、主張したいことが端的に表現されるものとなった。

その〈生き方〉ということという、私自身の個人的体験と社会的必要とが重なるものであった。単行本の

「あとがき」で、そのことについて次のように書いた。

「1999年から2000年にかけて一年間トロント大学で研究活動をしていたころ、実に多様な生き方をしている若者たちに出会いました。地球上のいろいろな地域に滞在してNGO/NPOなどで活動するのはごく自然の姿でした。自分で学資を稼いで大学に入学してくるのも珍しくありません。ある高校の家庭科教室に貼ってあった、生徒たちのアルバイトの統計グラフについて尋ねたところ、その収入の多くは大学の学資の準備のためのものとのことでした。

トロントの半数の人がカナダ生まれでないとのことで、小中学校には移民・難民の子どもたちも多く、かれらはすでに多様な世界を体験していますので、自分の生き方創造に向けて積極的に動いています。日本からも実に多様な創造的な生き方をしている人が集まってきていました。そうした方々の圧倒的多数が女性であることが印象的でした。私たちのアパートの部屋は、しばしばそうした創造的な生き方をする多様な人々の出会いの「パーティ会場」に化していました。

こうしたことはトロントに限りません。このところ関心が集中しているイラクを含む実に多様なところで、日本人も含めて多くの若者たちが、実に創造的に活躍しています。親しい友人たちがたちあげたネパールのNGOに私もかかわりましたが、そこにも実に多様な世代の人たちが創造的な活動を展開しています。近年の私のゼミや講義の卒業生たちにも、ジンバブエ、パプアニューギニア、ブータン・・・とさまざまな地域で活躍するものがあります。身近にそういう創造的な生き方に出会うようになってきたのです。こうした新たな生き方が、いろいろなところで、いろいろな世代が、いろいろな形で展開しているのです。

こうした世界の多様な生き方創造例を紹介しながら、人生創造の物語をつくるワークショップを行ったところ（2002年12月福島大学教育学部）、実に多様な発見・創造があるものとなりました。それに類したワークショップを、多様な生活指導実践にかかわる人を主な参加者とする「人生創造」ワークショップを日本生活指導学会（2003年8月）でも行いました。これまた実に多様な発見・創造があり、時間不足で困ってしまうほどでした。また、一般の大人対象の同様のワークショップも行ってきました。多様な世代・職業の方々がありますので、出会いそのものが物語になってしまいます。建築関係で働く10代の人、タクシー運転業の女性、フリーターの若者、NGOで働く人といった多様な人々が、ワークショップで出会うこと自体がとても興味深いものになるのです。」

このあとの私の個人生活も研究生活も、こうしたことの探求が続きそうだ。

## 人生再創造を考え始める人 (2004年5月28日)

私が退職して新たな人生計画に歩みはじめるという話を聞いた元同僚をはじめ、同世代の人たちは、以前では「どこか別の大学に行くのですか。体をこわしたのですか」という反応で、新たな人生計画を本気に聞いてもらえなかった。退職したあとでも、「今、どこの大学に勤めておられるのですか」という質問をうけることさえある。

しかし、最近では、「うらやましいなあ、私もそういうことを考えたいなあ」「そんな話を配偶者にしたら、

「財政計画はどうするの」と叱られたなどという話が耳に入り始めた。静かにではあるが、50代の人々が生き方を再検討しはじめる動きは広がっているように思う。「人生後半期の生き方」のワークショップなどを是非やろうという人も出てきている。このホームページの掲示板などが、そんな話の情報交換の場になれば、とも思う。

## アンソニー・ギデンズ『モダニティと自己アイデンティティ』を読む (2006年10月25日)

ホームページの「理論・思想ノート」ページに書いた、自己展開サイクル・自己遡及性（自己準拠性）について調べているうちに、ギデンズのこの本に出会った。この書籍は、「生き方」を考えるうえでもいくつかの示唆を与えるものである。この「生き方」のページで紹介検討をしていきたい。「後期近代における自己と社会」という副題をもつ原著は1991年に出版されたが、日本語訳はかなり時をおいた2005年にハーベスト社から出版された。

### I

ギデンズは、イントロダクションで、「モダニティのポスト伝統的秩序のなかで、そして新たなかたちでの媒介された経験を背景として、自己アイデンティティは再帰的に組織される試みとなる。自己の再帰的 (reflective) プロジェクトは、一貫した、しかし絶えず修正される生活史の物語にその本質があり、抽象的システムを通じた複数の選択のなかで実行されるものである。」(P5)と述べる。

このなかのアイデンティティという用語を「生き方」という用語に置き換えると、私が<生き方を創る>とか<生き方創造>と述べてきたことと重なる。実際、あとでみるように、ライフスタイルという表現をギデンズは使用もしている。また、ギデンズの「選択」という用語に対して、私は「創造」という用語を多用する。そして、私は社会創造・関係創造と生き方創造とも結びつけることを強調してきた。そして、後にみるように、ギデンズの論もそうした性格を含んでいる。

また、reflective という用語は、self-reference という用語とも重なる部分が多く、私のいつてきた自己展開サイクルと似た概念であろう。さらに、いくつかギデンズの論を紹介しよう。

「個人は多様な選択肢のあいだでライフスタイルの選択を切り抜ける必要に迫られるようになる。もちろん、標準化の方向に働く力も存在する——とりわけ商品化の力が目立っている」(P6)

「生活設計が自己アイデンティティの構造化の中心の特徴となる」(P6)

「個人の生活の変遷はつねに心的な再組織化、伝統的文化においてしばしば通過儀礼というかたちで儀礼化されたものを要求する」(P36)

「モダニティという環境では、変容する自己は個人的変化と社会的変化とを結びつける再帰的な過程の一部として模索され構築される」(P36)

### II

このように、アイデンティティの用語は、「ライフスタイル」「生活設計」「生活の変遷」といった用語と結びつけられている。そして、「つくりあげる」もの、あるいは「構築する」ものとしての「アイデンティティ」とか「生活史」について、次のように述べられる。

「自己アイデンティティは、一人の人間の行為システムが継続している結果として与えられるものではなく、むしろ、人間の再帰的な活動のなかでつねに作られ、維持されなくてはならないものなのである。」(P 57)

「自己アイデンティティは、個人が所持している弁別的特性ではないし、特性の集合ですらない。自己アイデンティティは、生活史という観点から自分自身によって再帰的に理解された自己である」(P 57)

「ある人のアイデンティティは(中略)、特定の物語を進行させる能力のなかにあるものである。」(P 59)

この物語という表現なども、私が多用するものである。そして、過去と未来の流れのなかで論が展開され、次のように主張がなされる。

「自伝は過去への修正的介入」(P 78)

「過去の再構成は、未来に起こりうる人生の軌跡に対する期待とともに進むものだ。」(P 79)

「パターンへの執着は未来への恐怖の現れであって、それを克服する手段を与えるものではない」(P 80)

「私たちは私たちが現にそれであるものではなく、私たちが私たち自身から作りあげているものである。」(P 82)

### III

今日の時代を指すハイ・モダニティの社会と自然についてギデンズ、はこう述べる。まず前近代における宿命・運命・伝統・権威とかかわってである。

「そのような(自然の支配と歴史の再帰的な形成を目的とする)システムにおいては、宿命や運命は何ら正式の位置を占めない。そのようなシステムは、人間による自然的世界や社会的世界の開かれたコントロールとでも私が呼ぶものを通じて(原理的には)機能する。」(P123)

「非近代文化はすべてその哲学の中心に宿命や運命の概念を何らかのかたちで組み込んでいるということはある程度確信を持っていえる」(P123)

「ハイ・モダニティの条件下では、社会生活の多くの領域において—— 自己の領分を含めて—— 決定的な権威が不在である。前近代文化とは比べものにならないくらいに、権威を主張する数多くの者が存在する。(中略) 伝統は重要な意味で単一の権威であった。かなりの前近代文化においても敵対する伝統間の衝突は存在したが、多くの場合伝統的見解や方法が他の可能性を排除していた。」(P 220)

「宗教秩序が比較的多様であった大規模な伝統社会においても、近代的意味での多元主義はまれであった。正統が様々な異端に対峙していたのである。加えて、ローカルな共同体と親族システムが、安定化する権威の二つの源泉であった」(P 221)

「モダニティが全体として重きを置いているのは、コントロール —— 世界を人間の支配に服従させること —— であるとよく言われ」「正しいが、このようにぞんざいに言われるのであれば、相当の修正が必要になる」として、「私たちが目撃していることは、知識と権力の内的準拠システムの出現なのである」と述べる。そして「『自然の終焉』が意味していることは、自然的世界が大部分『創出環境created environment』になっ

たということだ。『創出環境』とは、その動力と力学を、人間活動にとって外部的な影響からではなく社会的に組織された知識・主張から引き出しているような、人間が準拠システムから成り立っているものである」(P163)

この「自然の支配と歴史の再帰的な形成」とか「創出環境」という把握は支持できるとしても、自然支配の「ハイ・モダニティ」の世界に対して、私は自然のなかで生きる(自然とともに生きるではなく)ことを強調するエコロジカルな発想に近いスタンスをもっている。だから、私の論における「生き方を創る」発想は、人類中心主義的な自然支配の発想とは異なる。私がそう主張することは、「再帰」「準拠」という用語を(ハイ)モダニティのありようと結びつけて、以降いくつかの個所で示すような、ギデنزの論の展開に対して、それとは異なる理論展開を私につきつけている、ということにもなる。

#### IV

次は、規範とか道徳にかかわってである。

このようにモダニティにあっては、社会にとどまらず「自然が内的準拠システムとなりつつある」(P163)のだが、「伝統、自明視された習慣、あるいは外的な自然に対する実利的な適応に従って社会生活が組織化されるなら、社会生活は、モダニティの力学の基礎となる内的準拠性をそれだけ欠いていることになる。内的準拠性が発達する過程において決定的なのは道徳性の消失である」(P164)と指摘する。そして、未来と過去との関係に触れて、「社会システムが内的に準拠するようになるのは、あるいは少なくとも全面的にそうなるのは、社会システムが制度的に再帰的になり、それにより未来の植民地化に関連するようになってからである。」(P164)、「過去を現在と調和させることは、伝統が内包する規範的教えに固着することによって達成される」(P164)と述べる。

これらの叙述は、ナショナリズムと新自由主義を癒着させる論者たちが、「規範」「道徳」を強調していることを考えるとき、その批判的検討に示唆を与えるものを含んでいよう。

また、このような指摘も興味深い。

「自然は、自然世界がますますモダニティの内的準拠システムによって組織されているという意味で、『終焉を迎え』はじめています。モダニティにおいては、人々は二重の意味で人工的な環境に住んでいる。第一に、大多数の人が住む、作られた環境がひろがっているために、人間の生活場所は自然から切り離されてきており、その自然も今や「田舎」とか「未開地」といったかたちで存在しているに過ぎない。第二に、自然に起こる出来事が社会的力によって規定されたシステムにいつそう引き入れられるに従い、深い意味で、自然は文字どおり存在することをやめるのである。」(P187)

ところで、先に私が述べた「自然のなかで生きる」という考え方、あるいはスピリチュアリティに注目する考え方が、伝統的社会における規範とは異なる形で、新たな問題整理枠組みを必要とする問題であるが、こうした問題にもギデنزは論及して、次のように述べる。

「私たちは新たなかたちでの宗教的感受性や霊的な営みを至るところで見ることができる。このことの原因は、後期モダニティの根本的な特性にある。予想では、世界は、より確実な知識とコントロールが支配する社

会的・物理的世界になると考えられていたのに、実際には相対的に安全な領域が根源的懐疑やリスクの不穏なシナリオと交錯しているようなシステムが作り上げられようとしている。(中略) 新たなかたちの宗教や霊的体験は、最も基本的な意味で抑圧されたものの回帰を表しているのだ。というのも、それらは近代的制度があまりに徹底的に解体しようとしている実存の道徳的意味の問題に直接取り組んでいるからである。」

「ハイ・モダニティという時代は根本的な変移の時代である —— モダニティの終わりのないダイナミズムの継続であるだけでなく、より深遠な構造変容の前兆となるものである —— からだ。内的準拠システムの拡張は、臨界に達している道徳的／実存的問題は、集団的レベルでも日々の生活でも、中心的な舞台に立ち戻ってくる」(P236)

## V

自然と社会が内的準拠システムになるなかでは、そのなかに生きる人々も内的準拠システムによる人生創造をすることになる。

「内的に準拠する社会システムの発達は、自己の再帰的プロジェクトの発端となるものである。内的に準拠する人生を作りあげるとは、同時代のいくつもの社会変化によって決定的な影響を受ける。これらの社会変化は、(中略) 人生を他の周りの出来事から区別された、閉じられた軌跡として『まとめあげる』」(P165)。

それは、子ども・教育をめぐる前近代から近代への大変容と並行する。

「前近代では、ヨーロッパにおいてはもちろん、そしておそらくほとんどの他の非近代文化でも、子どもはその人生のきわめて初期から、家庭的領域だけでなく非家族的領域でも、大人と相互行為する集会的環境のなかで生活していた。『子ども期』という分離した領域の出現によって、成長経験は外部の活動領域から一線を画したものとなった。子ども期は隠蔽され、家庭に囲い込まれ、同時に公式の学校期の中心的影響を受ける。」(P172)

## VI

だが、内的準拠システムで生きるということは、外的なものから隔離されるという面と同時に、再帰的にふるまわなければならない、という困難さをも生む。そうしたところからでてくる問題にかかわることとして、ギデンスは次のように述べる。

「自己の再帰的プロジェクトにおいては、自己アイデンティティの物語は本質的に脆弱である。はっきりとした自己アイデンティティを作りあげるという課題は、確固とした心理的利益をもたらしてくれるかもしれないが、それは確かに重荷でもある。自己アイデンティティは、変わりやすい日常生活の経験や断片化する近代的制度などを背景として作られ、多かれ少なかれ再秩序化されなくてはならない。」(P210)

「(リスク文化を生きること)の困難さは、リスク計算自体によって生み出される不安、および『ありそうもない』偶然を排除すること、つまり生活設計を取り扱い可能な大きさに縮めることの難しさにある。」(P206)

「ある人は、自分につきまとう不安を減らすために、伝統あるいは既成のライフスタイルに逃避するかもしれない」(P207)

これなどは、私のいうストレーターに該当する指摘といえよう。

## VII

セラピーも、こうした論議に深くかかわって把握される。

「セラピーは新たな不安に対処する単なる手段ではなく、自己の再帰性の表れなのである。」（P 37）

「セラピー的営みは経験の隔離とモダニティの内的準拠システムを背景に行われるものである。すべてではないが、多くのセラピーが何よりもコントロールを目的としているということも驚くに値しない。そのようなセラピーは自己の再帰的プロジェクトをただ自己決定としてのみ解釈するのであり、それによって人生を外的な道徳的配慮から切り離すことを追認し、強化しさえするのである。」（P 204）

「セラピーが重視されるという事態は、純粋な関係性が支配的になればなるほど、ある人が自分について『これでいい』と感じることを可能にする徹底的な理解がますます不可欠なものになるという事実を表している」（P 211）

さらに身体の外観についても、次のように指摘し、拒食にも注目する。

「外観は、大雑把に言うなら、またこれまで論じてきた考え方からしてみれば、自己の再帰的プロジェクトの中心的要素になってきているのだ」（P 102）

「身体の外観のナルシスティックな開拓への大規模な動きのようにみえるものは、実のところ身体を活発に『構築』し制御することへの深い関心の現れなのである。ここには身体の発達とライフスタイルとのあいだの欠かすことのできないつながりがあり、そしてこのつながりは、たとえば特定の身体体制の追求にはっきり現れることがある。」（P 8）

「拒食と明らかにその対応物である強迫的な過食は、明確な自己アイデンティティを創出し維持しようという個人の欲求—— および責任 —— の犠牲として理解されるべきだということになる。それらは、いまや日常生活環境に本質的なものとなった身体体制のコントロールの極端な例なのである。（中略）拒食は再帰的な自己コントロールの病理として理解でき、それは自己アイデンティティの身体的外観という軸のまわりをめぐることで、そこでは羞恥不安が支配的な役割を演じている。」（P 118～9）

さらに時間についても述べる。

「自己実現は、時間をコントロールすることを意味する。」（P 84）

「時間をコントロールする姿勢は、未来を現在へ引き込む再帰的な試みを生み出すと同時に、それを拒否したり時間的な混乱を引き起したりすることにもつながる。『放浪する』ティーンエイジャーは、未来のキャリアについて考えることを拒否し、『未来に何の思考も与えること』もせず、この方向付けを拒否するのであるが、それは特に支配的になっていく時間的な展望に対する反抗としてそうするのである。」（P 96）

このあたりは、拙著『<生き方>を創る教育』のなかで、日本の若者が未来から逃走している状況を指摘したことと重なっている。こうした事態は若者たちだけではない。

「潜在的な大規模災害をいかに避けるのかということは、もはやあまり考えられなくなってしまう。大半の人はそういった可能性を生活から閉め出し、私化された『サバイバル・ストラテジー』に集中し、より大きなリスクのシナリオを覆い隠す。自分を取り囲む社会環境をコントロールできるという希望を断念す

ることで、人々は純粋に個人的な関心事、心的・身体的な自己改善にひきこもってしまう。ラッシュはこの状況を歴史の消失に、つまり過去に遡り未来へと続いていく世代のつながりに属しているという意味での歴史的継続性の喪失に、結びつけている」(P193)

### VIII

こうした個人の再帰性の問題は、個人のライフスタイルの問題としても表れるが、ギデンスは次のように述べる。

「ライフ・コースは『移行』の連なりとみなされる」(P87)

「モダニティは個人を複雑多様な選択に直面させ、さらにそれは根拠づけられていないゆえに、どの選択肢を選ぶべきかについては、ほとんど助けてくれない」(P89)

「私たちは選択するしかないのである。ライフスタイルは、単に功利主義的な必要を満たすだけでなく、自己アイデンティティの物語に実質的なかたちを与えるがゆえに、個人が受け入れている多かれ少なかれ統合された実践のセットとして定義されうる」(P89～90)

「モダニティの再帰性は、より大きな確実性が得られる状況においてではなく、方法論的な懐疑の状況において機能するものである。最も頼りになる権威でさえ、『追って知らせのあるまで』信頼されうるに過ぎない。そして日常生活の大部分を貫いている抽象的システムは通常、固定的な活動のガイドラインや処方ではなく、複数の可能性を提供する」(P93)

### IX

ライフスタイルの問題は、ライフポリティクスの問題としても論じられる。

「解放のポリティクスが生活機会の政治であるのに対して、ライフ・ポリティクスはライフスタイルの政治である」(P242)

「ライフ・ポリティクスは、グローバル化する影響力が自己の再帰的プロジェクトに深く浸透し、逆に自己実現がグローバルな戦略に影響する。そのようなポスト伝統的環境において、自己実現の過程から出てくる政治的な問題なのである。」(P243)

#### 「解放のポリティクス

#### ライフ・ポリティクス

- |  |  |
|--|--|
| 1. 伝統と慣習の固定性からの社会生活の解放                 | 1. 選択の自由と生成的権力(変更能力としての権力)から発する政治的決定                       |
| 2. 搾取、不平等、抑圧の減少あるいは撲滅。権力・資源の分断的分配に関わる。 | 2. グローバルな相互依存の文脈における自己実現を促進する、道徳的に正当化可能な生活形式の創造            |
| 3. 正義、平等、参加の倫理が示す要請に従う                 | 3. ポスト伝統秩序において、また実存的問題の背景の下に「いかに生きるべきか」に関わる倫理を発展させる」(P243) |

### X



個人レベルにおける再帰性の問題は、人々の間における関係性の問題につながっていく。

「大半の前近代的環境においては、経験の断片化は不安の主な源ではなかった。近代的な意味での親密な関係が一般に欠けていたとはいえ、信頼関係はローカルなもので、人格的な絆によってまとめられていた。しかしながらポスト伝統的な秩序においては、行動の選択肢に関してだけではなく、個人に対する『世界の広がり』という意味でも、無限大の可能性が姿を現す『世界』とは、すでに述べたように、個人からのびている時間と空間の継ぎ目のない秩序などではない。世界とは、様々な回路と源泉を通して現前に介入してくるものなのである。」（P 214）

「環境が多様であることは、少なくとも多くの状況では、自己の統合を促進するものでもありうるのである。このような事態はむしろ、先に論じた田舎の生活と都会の生活とのあいだの対照に似ている。異なった環境の諸要素を統合された物語へと積極的に組み入れるような、独自の自己アイデンティティを作り上げるために、多様性を利用するような人もいるだろう。コスモポリタンな人とはこのように、多様な環境でくつろぐことを長所としているような人を言うのである。」（P 216）

この叙述などは、私の異質協同論に近い。また、このところを行っている「自己・世界の発見・創造」ワークショップとつながるものでもある。

## X I

そして、よく知られているギデンズの「純粋な関係性」を軸にして、以上のことが論じられていく。まず「純粋な関係性」についての説明である。

「純粋な関係性とは、外的な基準がそこでは解消してしまうような関係である。純粋な関係性は、当の関係自体が与える見返りのためだけに存在している」（P 7）

「ギリシャ人は今日的意味での『友人』に当る言葉を持っていなかった。フィロスという言葉は、「（中略）『身近で親しい』者すべて」を指すのに使われていた。ある人のフィロスのネットワークは大部分その個人の社会的位置によって決まっており、自発的な選択の余地は限られていた。このような状況は多くの伝統文化の特徴であり、そこにおいては、『友人』という概念が存在したとしても、それは外部の人間——見知らぬ人、潜在的な敵——と対比される身内を主に指していたのである」（P 97）

「パートナーが多様な可能性から自発的に選ばれるというのは、近代的な性関係と友人関係のシステムに特徴的なことである」（P 97）

「ある程度長持ちする性的結合、婚姻、友人関係は、今日ではすべて純粋な関係性に近づいていく傾向にある。（中略）ハイ・モダニティは、純粋な関係性（中略）が自己の再帰的プロジェクトにとって基本的に重要なものとなる」（P 97）

「結婚はますます、それが他者との緊密な接触から得られる情緒的満足のゆえに始められ、そうであるかぎりでも存続するような関係になってきている。（中略）近代の友人関係はこの特徴をさらにはっきりさせる。友人とは、ある人が関係それ自体による見返り以外によっては促されないような関係を持っている誰か、として定義される。」（P 100）

## X III

そして、「純粋な関係性」の生成・展開にかかわってである。

「純粋な関係性は、ハイ・モダニティの他の多くの側面と同様に、諸刃の剣である。それは自発的なコミットメントに基づいた信頼や緊密な親密性を育てる機会を与えてくれる。それが達成され相対的に安定する場合には、基本的信頼と養育者への信頼感が強く結合しているゆえに、そのような信頼は心理的に安定をもたらすものにある。この結合は、人間関係の領域に対してと同様に、対象・世界に対しても安心感を保持しているので、その重要性はかなりなものである。純粋な関係性は自己の再帰的プロジェクトを形づくるための鍵となる背景である。」（P 2 1 1）

「純粋な関係性や、それを含む親密な関係のネクサスは、自己の統一感にとっての莫大な重荷を生み出す。関係性が外的規準を欠いているかぎり、それは『信実性』によってのみ道徳的に利用可能になる。信実性を持つ人物とは、おのれを知っており、その知識を言説的に、あるいは行動の領域で他者に明かすことのできるような者である。他者と信実の関係にあるということは、道徳的な支えの主要な源となる」（P 2 1 1）

「純粋な関係性は、開かれたかたちで、途切れることなく、再帰的に形成される。（中略）純粋な関係性に伴う自己検証は、自己の再帰的なプロジェクトにはっきりと結びついている。『私はどうなのか？』という自分への問いかけは、関係性が与える痛みと見返りに直接に向けられたものである。」（P 1 0 2）

ここで、「純粋な関係性」も「再帰的に形成される」という指摘に注目しておきたい。

「コミットメントは、純粋な関係性においては、本質的に前近代において緊密な個人的絆が持っていた外的係留にとって代わるものである。（中略）緊密な関係性における『コミットした人物』とは何なのだろうか。それは近代的な関係性に内在する緊張を認識しつつ、それでもなお、少なくともしばらくは関係をやってみようとする者であり、唯一の見返りは関係性自体に内在するものであるということをおきまえている者である。友人とは定義上、コミットした人物のことである」（P 1 0 3）

「純粋な関係性は実質的な互酬性なしにはありえないのである。（中略）自己の再帰性が鋭く洞察的な自己知識を作り出す理由のひとつは、それによって緊密な関係性における依存を減らすことができるからである。

（中略）うまくいっている関係性とは、各々の人間が自律しており、自分の価値に確信を持っているような関係である。」（P 1 0 4）

#### XIV

そして、親密性とかかわって叙述が展開する。

「親密性は、双方がプライバシーの範囲を明確にしていることを必要としている。というのも、緊密さが依存にとって代わられないためには、自律と、感情と経験の共有とのバランスが達成されなくてはならないからである。このような考え方からすれば、明らかに、親密な関係は性的な絆と混同されてはならないということになる。発展した親密性は性的ではない関係性すなわち友人関係においても可能になる。対立の多い関係でも性的活動が活発なことはありうる。他方で、性的な関係は、しばしば親密な関係を達成することの一部である。」（P 1 0 7）

「自己アイデンティティは自己啓発と他者との親密な関係の発展とが結合した過程を通して、達成されるのである。」（P 1 0 9）

「純粋な関係性は主にセクシュアリティ、婚姻関係、友人関係の領域に姿を現す。(中略)親子関係およびそれより広い血縁関係は、純粋な関係性の射程からは部分的に離れたところに留まりつづける。その両者は、外的な基準に実質的に結びつけられつづける。この場合の外的基準とはすなわち、関係の維持の鍵となる生物学的なつながりである。しかしそれらも、純粋な関係性を生み出している力の一部によって浸食され始めている。血縁関係から伝統的義務や拘束が剥ぎ取られているかぎり、血縁関係の継続は上述した純粋な関係性の質にかかってくるようになる。」(P109~110)

## XV

自己展開サイクルとか、結社とか、異質協同とかを主張してきた私にとっては、それらの主張が、ギデンズのこれらの論とかかわせると、どのように位置づき、そして彼の論をいかに受け止めて、私の論を発展させていくか、という課題が存在する。

ギデンズがいう純粋な関係性にまで達する可能性はあるにしても、そこに達していない多様な関係性が存在する。「純粋な関係性」を志向するにもしないにしても、そうした「純粋ではない」関係性のなかで、人々は関係性をもつ。そこで、私はギデンズのいう「友人関係」における「純粋な関係性」を志向するような人々の協同の動き、結社への動きに注目している。そしてそれらのなかで、私がいつか自己展開サイクル、ギデンズのいう「再帰」「内的に準拠」する動きを重視しつつも、かつ閉鎖的な関係ではなく、多様な人々と出会うなかでの発見・創造を重視するような志向性を重視する。

それらは、社会全体レベルとも親密圏とも重なりつつも、それらに収斂はしない独自のレベルで展開する。

そしてそれらを、モダニティ様相をもちつつも、自然支配のようなものを越えて、新たなレベルで追求していくことが必要だと考える。

## 競争・格差社会での「人生選択」から「人生創造」への転換を

(2006年3月24日)

20日の大阪高生研での集まりで、拙著「「ストレーター」秩序を超えて、若者の〈生き方〉を創る教育へ向かうには」(2005中京大学『教養論叢』掲載)について、討論していただいた。その討論のなかで、「90年代後半から続いてきた若者の生き方の大転換における過渡期的状況に、ここ数年のうちになんらかの収斂状況が生まれてくると予測する」と書いた拙著に対して、どのように収斂するのか、と問われた。

その問いには、現段階では明瞭にこたえる状況にはないがゆえに、このように表現したのであるが、その収斂に対しての問題提起は可能であろう。その点についていくつか述べておこう。

1) ストレーター秩序の崩れが進行し、その秩序のなかを進む、いわゆる「勝ち組」人数はこれまでも50%にはるかに届かないものであったが、それが激減していくだろう。多少なりとも安定的な職業に就く平均的年齢は、かつての10代末から20代の状況が、今日では、20代から30代へと以降してきているが、それが30代へと移行していくだろう。

2) そうしたなかで、若者たちは受動的な職業選択ではなく、職業定着を創造的に追求していくことになる

う。

3) そのなかで、「いい点数さえとれば」型の進路指導ではなく、当事者の進路創造を促進する進路指導へとシフトせざるをえないだろう。

こんなことをふまえると、これまでのストレター秩序のなかでの思考を続けていると、競争格差秩序のなかで、ストレターを続ける勝ち組と、フリーター・ニート化においこまれる「負け組」との間の格差的選択においやられる状況がひろがっていくであろう。その両者とも、「職業にあわせた生活・人生」に追いやられている。教育にひきつけていうと、「ツメコミ型」人生である。よって、その状況をいかに突破していくかを焦点としていきたい。

それは、この「勝ち組」「負け組」以外の道を創造することである。「生活・人生にあわせた職業」を追求することである。人生創造の一環としての職業創造である。そのタイプにはいろいろあろう。数的にはかなりの量を占める企業の雇用者にあっても、自分の生活・人生にあわせて勤務する志向性を強める人々である。さらに、自営業・協同的な仕事などでもその傾向が強まろう。「ロハス」とよばれる方々も当然ここに入るだろう。

「ツメコミ型」人生に対していうと、「ワークショップ型人生」とでもいえようか。

この三つのタイプの三すくみ状況がひろがっていくつつ、三つの比率が大きく変化していくだろう。過去については独断的な推理で、将来については願望的な推理で、比率をならべてみよう。「他」というのは、流動的な人・無業者などである。

	「勝ち組」人生	「負け組」人生	他	創造型人生
バブル以前	両者「未分化」で計50%		45%	数%以下
現状	30%	20%	40%	10%
10~20年後	10%	15%	35%	40%

## 名古屋管理職ユニオンの方々との「人生創造話」 (2006年3月25日)

21日は当初、「人生後半期の人生設計」というワークショップを行なう予定であったが、都合で座談会という形になった。しかし、最初に行なった私のテーマにかかわる問題提起をきっかけにして、参加者から実に多様な体験話がでて、私にとってきわめて有益な場となった。

職場のリーダー的存在であった方が、突然ささいな理由でリストラをいいわたされ、深刻になってこのユニオンにかけこんで相談し、そのなかで事態を前向きに解決する方向へとすすめてきた体験をもつ方々が多かった。

一つの職場に長い人、あるいはいくつかの職場・職業を変えて働いてきた人、体験は様々であるが、今はたくましく生きてこられたことを前向きに、私にいわせれば「人生創造」的に生きている方々である。この組合の委員長をしておられる方は、数年前一度お会いした、当時大学教員であったかたで、今年の正月、彼が沖縄

を訪問された際に、偶然、近くに私が住んでいることをお聞きになって、我が家を訪問された。かれ自身も大  
学サバイバル時代に、いろいろな口実をつけてリストラ対象になったが、彼自身が法律専門家であったので、  
正当に対応して、前向きに事態を解決され、今は退職して、このユニオンをになっておられる方である。その  
方と話が盛り上がり、「人生後半期の人生設計」について、みんなで考えてみようということで、こんな企  
画になったのである。

さて、当日参加された方々は、これまでのつらい体験がありながら、新たな人生構想をもっておられ、仕事  
起こしとか、移住生活とかに関心を強くもっておられ、移住の実際などについてもいろいろと尋ねられた。

こうしてみると、リストラ時代の今日、多様な生き方を現実に追求されている方がとても多いという実感も  
もった。我が家の近くにもそうした体験をへて移住されてこられた方が多い。

前の項で述べた「人生選択から人生創造へ」というテーマが、人生後半期の人々にもなじみやすいテーマに  
なっていることを実感した会であった。

### 第三回「人生ユンタク」「仕事起こし・人生起こし」の報告 (2006年5月21日)

20日に開いた第三回人生ユンタクには、たくさんの方がお集まりいただいた。参加者の年齢・職業など、  
すべてにわたって、本当に多様な方々であり、とても出会いが楽しい時間となった。

進行は、まずは「仕事起こし・人生起こし物語」を参加者一人ひとりがつくることから始めた。私が用意し  
た参考カードを使ったり、各自が自由に言葉をつくったりして、たとえば —— 「私たち」は、子どもたち  
が家をでて「空の巣症候群」に陥っていましたが、「テレビドラマ」を見たことがきっかけで、「田舎暮らし」  
を始め、「多様な出会い」があり、「極楽生活」を送っています —— という具合にである。

参加者自らをモデルにしてつくる人、まったく仮想の話をつくる人、これまた多様な興味深いものとなった。

この物語づくりをきっかけにして、ユンタクがはじまった。途中で、「あいさつ」の話で盛り上がったついでに、「古今東西あいさつ」をすとか、教師や親がほめることが下手だという話がでたついでに、「隣の人、隣の隣の人をほめる」ということをしたりもした。

こんななかで、参加者ひとりひとりがしてきた、している、していきたい「仕事起こし・人生起こし」の話  
題が沸騰していった。大半の人が転職、退職、起業、そして転居・移住を経験しており、そうしたなかで見て  
きた、経験してきたことをもとに、創造的に生きてきたこと・生きていること・生きていきたいことを語りあ  
っていった。そしてそれらは、多様な人々のつながり・関係のなかで発展していくことも語られた。

この「人生ユンタク」は、私にとってもいつも新鮮さな出会い・発見をもたらしてくれる場である。今回は、  
参加者の投票の結果、「健康」となった。実に多様な健康の話題が沸騰しそうな予感がする。

### 生活・生き方・人生は研究対象か 生活指導学会討論にかかわって (2010年9月4日)

5日の日本生活指導学会大会フォーラム「2010年代の生活指導と生活指導研究」では、生活・生き方・人生にかかわる提案が登場してくる。

人によっては、「生活・生き方・人生は研究対象か」という疑問を投げかける人がいるかもしれない。それは、個々人の選択する問題であって、研究対象にふさわしくない、と考えるからだろう。あるいは、それは、小説や演劇などが扱う分野であって、「科学的研究」ではないだろう、という考えがあるかもしれない。

しかし、それらは、実際に研究対象にされてきた。生活・生き方・人生観にかかわる各種調査の多さがそれを物語るだろう。

対象者への関わりのありようを研究する生活指導分野にあっても、対象者がどのような生活・生き方・人生をしているかという事実を出発点にして、どのような生活・生き方・人生をするよう働きかけるか、を研究対象にする以上、対象者の生活・生き方・人生をも間接的な形で研究対象にすることが一般的であった。

しかし、生活・生き方・人生のありようを直接対象にした研究は、意外に少ない。大会発表も数えられるほどである。

その意味では、意識的にこうした研究に取り組む必要があるだろう。

そこで、この分野の研究対象を整理しておこう。

#### 1) 関係のありかた

##### 1 1) 人間相互の関係

##### 1 2) 人間と自然との関係（身体的自然としての、自分自身との関係を含む）

#### 2) 生活（「暮らし」という表現もある）

##### 2 1) 衣食住

##### 2 2) 生活ルール 家族 職場 学校・施設など

##### 2 3) 金銭生活

##### 2 4) 社会生活 法的・倫理的ルール

#### 3) 人生・生き方

##### 3 1) 領域 身体（健康・病） 職業 学習 交際 余暇 など

##### 3 2) 世代 子ども期 若者期 成人期 中高年期 など

#### 4) 社会そのもの・・・これは、1 1) など他のものに含めうる

##### 4 1) 社会全体 世界 国家 地域 など

##### 4 2) 「中間集団」 職場 学校・施設 結社

#### 「生活・生き方・人生」の構想の基盤

これらを検討討論する時、どのようなものをイメージするのか、対象者の「生活・生き方・人生」についてどのような「基準」で評価し、かかわるのか。

意外に意識的でないものが多い。研究者が基盤とするものから見て、「常識」「標準」「平均」的なものを前提にすることが大勢を占める。

例 法を犯さない。義務教育学校に登校するのは当然だ。真面目に生きる。「自己責任」。自分で働いて収入を得て生活すべきだ。など

なかには、そうした「常識」「標準」「平均」とは対抗的に構想する例もある。

例 ファーストではなくスローに。競争より共同を。自然と闘うのではなく、自然との共生を（地球にやさしく）。「郷に入りては、郷に従え」ではなく、違いを生かす。一方向型ではなく双方向型。

## 身近なことから歴史を発見する「〇〇さんの人生」ワークショップ（2010年11月15日）

1973～1990年、私は琉球大学教育学部で「日本教育史」を教えていた。試行錯誤の連続だった。苦労したのは、学生たちに「日本教育史」を自分自身とかわらせて考えることができるようにすることだった。歴史というと、知識の暗記科目だというイメージが受験を通して身につけている学生たちだった。

1980年代の初めだったかに初めて試みたのは、我が家の「家系図づくり」だった。受講生に、親族にインタビューして「家系図」をつくるなかで、「教育史」を発見させていく作業だ。当時だと、戦前戦後の変化を発見させていくことが十分可能だった。とくに沖縄では、その変化は激しくドラマ性に満ちたものであった。

その中で、教育史に関心を持った受講生も出てきて、大学院に行き大学教師になった人もいる。

その後、90年代後半に、過去の歴史だけでなく、生き方創造にかかわって、未来の歴史創造をも考えることを、中京大学の『生活指導』関連科目の授業で追求した。また、全国各地で、大学教員あるいは学生対象に、同様のワークショップをしてきた。

そうしたこと一連のワークショップをもとに、最近「浅野誠ワークショップシリーズ5 人生創造」を出したのだ。理論的な問題提起は、『<生き方>を創る教育』（大月書店2004年）でも書いた。

このワークショップシリーズに掲載したワークショップのいくつかは、沖縄の大学でも実際にしてみた。

最近、「〇〇さんの人生」に絞って、ワークショップをしてみた。まず、身近な40歳以上の方を対象にして、そのかたの40歳までについてインタビューして記入用紙に書き込むという事前課題をお願いした。大半の学生が、父母祖父母へのインタビューをした。

ワークショップ場面では、お互いに記入用紙を見せ合う中で、発見する作業を6～8人相手にくりかえすことから始めた。

次に、関心分野・テーマを共有する数人でチームをつくり、発見事項を3つに絞り込み、全体にプレゼンテーションし、討論するという流れだ。

この流れの中で、肉親の事を聞くというほぼ初体験の事になかで、新鮮な発見をたくさんしたようだ。たとえば、こんな類いの発見だ。

- ・高校に通いながら、農業手伝いをしていた。
- ・子どもが多いので支出が増えた。
- ・父母は共働きなので、家事育児に専念したわけではない。
- ・40代で出産した
- ・結婚で退職した。
- ・最近の子どもはカネがかかる。
- ・戦争を体験している。
- ・40歳ぐらいで住宅を購入している。

多くは、父母なので、1980年代の様子を反映しているが、1980年代終わりから1990年代初め生まれの現在の学生たちには、大変新鮮な発見だったようだ。

そして、分野・テーマ別の検討のなかで、時代差、地域差、男女差を発見し、さらに自分たちの将来人生をどう構想するかまで話は広がっていく。

このワークショップは、インタビューという事前準備に手間がかかるが、それだけに強い刺激と深い発見を若者たちにあたえるものなのだ、ということを確認した。おすすめワークショップの一つだ。

このワークショップの詳細は、『浅野誠ワークショップシリーズNo.5 人生創造』の活動紹介のなかのNo.6に書いてあるので、参照してください。

## 生き方・人生一歩ログ記事の振り返り・再発見 (2010年11月19日)

2007～8年に、カテゴリー「生き方・人生」の記事を40書きました。それをさらに分類してみると、多いのは次です。

- 1) スローライフ・ロハス関係です。
- 2) 沖縄移住関係です。
- 3) 中高年の生き方です。
- 4) 以上の他には、仕事、病、人間関係の持ち方、偏差値にとらわれた生き方、格差社会のなかでの弱者の生き方、働きかた、自然との関わり、家族、追悼、個人例などです。

ほとんどが、エッセイ風です。読書コメントもあります。また、どなたかの出会いに触発されて書いたものもあります。新聞やテレビ報道で考えたものもあります。



このブログスタートした時と、「沖縄田舎暮らし」本を出版した時が同時でしたので、1) 2) 3)が多いのは、自然な流れでしょう。

2) では、若者の移住と中高年の移住のおのおのについて、いろいろとコメントしました。これらの記事を読んでメールやコメント欄などでお便りを寄せられた方もおられました。

出版した本は、玉城移住後3年足らずの時で、それまでのホームページ「随想」欄をもとに編集して作成しました。もうその倍の6年余り住んで、さらに多様な体験をし、様々な発見をしました。

働き方とか、スローライフとか、自然とのつながりなどは、私からの問いかけのメッセージがかなりあるものです。

## 宮本みち子編著「人口減少社会のライフスタイルを読む」 (2011年10月27日)

本書は、店頭で見つけた本で、放送大学のテキスト用だ。出版社は放送大学教育振興会で、出版年は2011年である。放送大学テキストは、専門外分野について学ぶうえで好都合である。そして、現代的課題に向き合った研究の上でも最前線のものが含まれている点で、もっと活用されてよいものだろう。

さて、本書の魅力は、「人口減少社会」と「ライフスタイル」を結びつけて論じられている点にある。『生き方』とか「人生創造」をテーマにしてきた私にとって、予測される社会の激変とかかわらせて論じることは、私自身のテーマである。

ということで、本書については、通常の読書コメントとはスタイルを変えたい。記述内容について紹介コメントすることより、記述内容が提起することについて、私が考えることを中心に書きたい。記述内容をきっかけにして、私なりの論を展開することが中心になるということである。

最初に、「人生創造」「ライフスタイル」に、今後強力な影響をもたらすであろうことは、「人口減少」だけではない。本書第15章に、福祉国家にかかわって、「今日の先進諸国に共通する課題」として、次の四つが書かれている。

- 1) 家族の変容
- 2) 国際化の進展
- 3) 人口の高齢化・少子化
- 4) 環境問題

私は、4)を広くとらえ、地球・人類の存続(持続可能性)問題として考える。

また、人々の働き方のありようの変更の問題は避けて通れない課題だ。

この両者を結びつけて、自然を搾取・収奪し、生産力・経済力成長を前提とするありようからの脱出をも課題としなくてはならない、と考える。

だから、「人口減少」を食い止め、人口維持していけることを、課題とはしない。むしろ、地球上では人口過剰状態が、この200年間、継続してきた。過剰人口を適切に減少させることさえ必要だし、生産や経済を縮小することも必要だ、と考える。最近、よく使われる「定常化」も、過剰社会である現状を「定常」にもっていく、というよりも、縮小して定常状態にもっていくという視野が必要だと考えている。

## 「ライフコースの非定型化(脱標準化)」なのか 宮本本8 (2011年11月19日)

佐藤龍三郎執筆の第3章に、次のような指摘がある。

「少子高齢化・人口減少時代におけるライフコースの変化の特徴は、「遷延」, 「多様化」, 「非定型化」という3つのキーワードで表せるのではないと思われる。

まず「遷延」であるが、これは1つのライフステージから次のライフステージへの移行が延びることつまり、ライフステージ各段階の滞在時間が延びることを意味する。とりわけ青年期から成人期への移行 (transition to adulthood) は、少子化や未婚化の動きとも絡んで、いま人口学や社会学で特に注目されているテーマの一つである。また高齢になっても健康が維持でき、働き続けることができれば、実質的に中高年期から老年期への移行を遅らすことになる。さらにいえば、寿命が伸び続けていることは、老年期から死への移行が遷延しているともできる。親と子の関係でいえば、世代間の間隔も延長する。

次にライフコースの多様化、これは複線化といってもよいであろう。例えば、家族形成の面でいえば、かつて第二次世界大戦後間もない頃の日本では、皆婚すなわちほとんどすべての人が一度は結婚し、生涯未婚の人や子どもを持たない人はごく少数であったが、今日では生涯未婚の人や生涯子どもを生まない人(無子)も増えつつある。つまり、人生の道筋が決まり切った1本だけでなく、多数の枝に分かれ、人によりさまざまな人生の道筋を辿るようになっていくということである。

ライフコースの非定型化(脱標準化)とは、いったん定型化(標準化)したライフコースがその後揺らいでいるという意味である。日本では、戦後の高度経済成長などにより、1960~70年代に学校卒業後の一斉就職、終身雇用、就職後間もなく結婚し、女性は、結婚後間もなく2子を産み終えるといったライフコースの定型化が見られたと考えられる。この定型的パターンは、とりわけ1990年代以降、働き方や家族のあり方が変化する中で崩れつつあるとみられる。」P62-3

これらの指摘には、しばしば出会う。だから、特異な指摘では無い。むしろ「定説」的さえある。

だが、私は、それに異を唱えたい。例をあげよう。

「青年期から成人期への移行」が延びていると書かれるが、それは、日本で青年期が普及一般化した数十年前を「標準」として考えた場合、そう言えるのだが、青年期をもたないことが普通であったそれ以前の時代を「標準」にすれば、そういう指摘はできない。

また、「働き続けることができれば、実質的に中高年期から老年期への移行を遅らす」という表現にしてもそ

うだ。平均寿命が60歳以上になり、大半の人が老年期をもつようになった数十年前の時期を標準にすれば、そう言えるかもしれないが、平均寿命が50歳代、ないしはそれ以下であった数十年以上前の時代では、「老年期」を持つ人は限られており、「中高年期から老年期への移行」という表現が当てはまる人は限られていた。

「1960～70年代に学校卒業後の一斉就職、終身雇用、就職後間もなく結婚し、女性は、結婚後間もなく2子を産み終えるといったライフコースの定型化」といわれるが、そのスタイルを取るものがたくさんいたであろうが、「標準化」「定形化」までしていただろうか。私の周辺を思い浮かべてみたところ、該当する人がなかなか見いだせない。非婚の人も多いし、子どもが3人以上、ないしは1人、ゼロというのが結構いて、むしろ「標準」でない方が多いのが、私の見聞だ。

こうしてみると、「標準化」「定形化」というのは、事実としてよりも、考え方・イデオロギーとしてそうなのだろうか、と思ってしまう。そして、「標準化」「定形化」と言われるものの多くは、引用文がそうであるように、1960年前後に成立したもののようだ。

それ以前の時代ではないのだ。そして、その時代からもすでに半世紀以上経過している。その時代を「標準」に、「遷延」, 「多様化」, 「非定型化」を指摘するよりも、「遷延」, 「多様化」, 「非定型化」した人々自身が、みずからどのように、ライフコースを作ろうとしているのか、を問うことの方に、私の関心がある。

たとえば、「青年期から成人期への移行」とか「中高年期から老年期への移行」とかいう表現に代わるどのように区切り方をしてライフコースをつくっているのか、を問題にした方がいいと思う。なかには、そうした区切り方そのものに反発を感じる人も多い。

例を出そう。「青年期から成人期への移行」という表現に、「学校から職業への移行」を重ね合わせる意味合いを含ませることがあるが、そうではなくて、学びつつ働くということ、10代後半から30代、あるいは50代まで続ける意向を持つ人がいてよい。フィンランドのように、社会的にそれを保障する制度がない日本では、そのコースは大変苦勞するが、そうした追求が促進保障されてよいだろう。それが、当人の「人生おこし」になるだろうし、「社会おこし」（今回初めて使った私の造語）にもつながるだろう。

## 工業化時代のライフコース≠ストレーターコース？ 宮本本9

(2011年12月25日)

「第4章 少子高齢社会のライフコース」には、私がここ10年近く論じてきた「ストレーターコースの問題」と同様の指摘が登場する。たとえば、以下のように、である。

女性の場合であるが、

「結婚、子どもの誕生、それに続く子どもの教育期、その後の結婚など、従来ではライフコース上の標準的なイベントとされてきたものが、これまでどおりにいくとはいえなくなり、しかも、ライフコースの標準的なパターンがあるということも一概にいえなくなってきた。さらに、これより若い世代においては、結婚しないこと、

子どもを持たないこと、離婚することなどが、より一般化することが予想される。」P77

私が言うストレターコースは、主として子ども・若者の将来創造・選択にかかわって述べるものだが、近年では、人生全般にわたって、標準コースに従うというのではなく、人生創造する動きが強まっている。その動きをより豊かに展開するための主張を、私は繰り返してきた。

ところで、本書では、それまでの標準的なライフコースは、「工業化時代のライフコース」と表現される。

「工業化社会に入ると、身分的な制約が取り払われ自由度が高まるとともに工業化社会に特有のライフコース・パターンが確立した。学校への入学、卒業、就職、結婚、親になること、子どもの教育、退職などのイベントを順次通過していくライフコースが、ライフコース・パターンとして標準化するが、それが日本で確立したのは1960年代で、その大枠は欧米諸国にライフコース・パターンの変化が生じた後も維持され、1990年代の中盤まで続いた。（中略）

工業化時代の生活のあり方を枠付けた特徴的な要素がある。第1は失業率が低いこと（完全雇用）、第2は結婚適齢期の存在と高い婚姻率、第3は結婚後の明確な性別役割分業、第4は雇用の長期安定性（終身雇用制）、第5は老齢年金制度による老後保障などである。ただし、終身雇用制や老齢年金制度が生活保障の機能を果たしたのは大企業の世界であり、そこから外れる人々は、家族や親族の私的保障が補完していたのである。（中略）

このような工業化時代特有のライフコース・パターンをフォーディズム型ライフコースと呼ぶこともある。フォード型の企画化された製品の大量生産様式を特長とする工業化時代に特有のライフコースを指している。」P79

こうしたライフコースを、本書のように「工業化時代に特有のライフコース」、「フォーディズム型ライフコース」とよぶこともできるが、ほかに、引用文を使って、「大企業の世界」のライフコース、『大量生産様式』のライフコース、ともよべそうだし、あるいは「産業社会」のライフコースという言葉も登場しそうである。わたしのように、「ストレター型」ないしは「レール型」のライフコースという表現も認められるだろう。

その命名は、このライフコースの前後の時代との区切りの仕方でも変わってくるだろう。とくに、現代状況とのかわりという、後の時代との関わり・違いが重要になるだろう。

## 「ライフコースの個人化」と人生創造 宮本本10 (2011年12月29日)

前回話題にした「工業化時代のライフコース」について、次のように指摘されている。

「1970年代に入ると、欧米先進諸国では、従来のライフコース・パターンから外れる現象が見られるようになった。標準的ライフコース・パターンが弱体化し、教育、就業、結婚・家族形成、引退等の時機や期間、ライフ・イベントを経験するかしないかなどに多様性が見られるようになったのである。」P79

欧米先進諸国では弱体化し、多様性が見られるようになったのに対して、日本がその傾向を見せ広がり始めるのは、かなり遅い。それはなぜだろうか。

「工業化」からの脱却の遅さという指摘ができてきそうだが、それにとどまらないのではなかろうか。その一つに、標準化されたものの強力さがありはしないだろうか。学校、および学校から職場への移行のコースのなかで形成されたストレーターコースが強力であり、今なおかなりの影響力を持っていることがあるといえよう。

また、次の引用も言及しているが、多様化する「ライフコース・パターン」は個人の創造として展開されるものだが、それでも人間関係・集団の中での展開である。その人間関係・集団のなかでの展開が弱く、あくまでも個人として展開され、それに成功するのは「強い個人」であって、「弱い個人」がそれを展開しようとすると、孤立へと向かう、という状況があることとかかわりもあろう。

それゆえに、「弱い個人」は、なかなか踏み出せない。それを支える物的基盤が弱いのだ。こうして、個人化は自主的なものというより強制されて発生している傾向を強める。

「2000年代に入ると、若年層において、非正規・非典型雇用に従事する人々、離職・転職する人々が急増した。非婚化も加速化した。このようにして、ライフコース・パターンの多様化が本格的に始まったのである。

ライフコースに対する社会的関心が高まるのは、流動性の高い社会構造へと変わったことが背景にあった。例えば、家族集団のメンバーとしての人生という観念から脱して、「家族とは別に、自分自身の人生がある」、と感じる人が登場し始めたのは、ポスト工業社会の段階に入った1980年代からである。そこに、人生をライフコースとして見ようとする視点（ライフコース・パースペクティブ）が生まれるが、そこには、「人生は自分自身が主体的に形成するもの」、という人生観の転換があった。家族集団としての周期的律動（家族周期またはファミリー・サイクル）から、個人としてのライフコースが浮上することを、ライフコースの個人化という。（中略）

人々が、自分自身のライフコースの目標を設定し、その目標にのっとり特定の時期に特定の役割を選択していく行為を、ライフコース・スケジューリングという。このような行為は、いかなる時代・状況においても見られるものであるが、人生を主体的に設計していこうとする志向が高まり、ライフコース・スケジューリングが現実化したのが現代の特徴となっている（中略）。

人々のライフコースが外部の諸条件に規定され、自律性を持つことが難しかった特代を脱して、自分自身の選択可能性が高まったことは、現代の特徴である。ライフステージや生活領域の境界があいまいになり、人生の道筋の多様性が増したが、同時に人生行路が不明確あるいは予測困難な状況になっている。しかも、個人の選択にゆだねられているだけ、失敗も個人の責任とされる傾向が強まっている。」P79~80

ここにあるように、「失敗も個人の責任とされる傾向」が強いし、「非正規・非典型雇用」「離職・転職」という不本意な形で「ライフコースの個人化」が進行しているのが、日本の特質といえないだろうか。

さらに、工業化そのものが遅れた、ないしは実現しきれていない沖縄では、物質的基盤がないままに、1980年代ごろから「工業化時代のライフコース」だけが、学校におけるストレーターコースとして導入されてくる。当時はまだ「依存型」産業が圧倒しており、雇用は前工業時代の体質を残しており、それだけに「出稼ぎ型」雇用、つまり県外の大都市での就職という形が多くなる。

そうした人生創造を主体的に展開する基盤が弱いまま、近年の「非正規雇用」の時代に突入している。

そうした中で、「ライフコースの個人化」のひとつであろう家族形成を例にとってみても、一方では、10代ないしは20才前後での早期スタート、他方では晩婚型ないしは非家族形成型という二分化が進行している。こうして、「ライフコースの個人化」が外圧的に登場し、多様化というよりも不安定化という様相が強くなり、人生創造という形が容易には実現しない状況が見られる。これは、沖縄に限らず全国各地、特に経済基盤の弱い地域でよく見られる状況である。

## ライフスタイルの主体的な構築 宮本本30 (2012年3月13日)

「第8章 現役世代の光景」の最後に、働き方を中心にしたライフスタイルの転換について、著者は以下のように重要な問題提起をする。近年、私が提起していることと響き合うものだ。

「働き方の選択肢を増やすことを期待する人々が多い。しかし、実行されている例は少数にとどまっている。従業員が自分の能力開発のために長期間の休暇を取得することに対して休暇を与えている企業や、休暇扱いをする企業は1割に満たない。また、ボランティア休暇を制度化している企業も1割に達していない。現実には、一時職場を離れて何か別のことをする自由はほとんどないのが実態である。

離転職が例外ではなくなり、職業能力を磨きながら、自分自身のキャリアを形成する必要性が高まるなかで、仕事をもちながら自己啓発の時間を持つことの重要性は高まっている。また、ライフステージに応じて、育児や介護、社会活動などに取り組むために一定の期間仕事を離れることができる制度は、個人の生活を豊かにするだけでなく、企業経営にとっても柔軟な発想、多様な価値観の導入という点でメリットは大きいはずである。」P156

団塊の世代について、「人口ピラミッドにおける最大の人口グループであり、経済成長に大きな貢献をしてきた世代の引退は、その後の現役世代に大きな変化を及ぼし、同時に高齢期の様相を変えていくものと予想される。工業化時代に完成した標準的ライフスタイルは大きく転換していくだろう。予想される変化の方向は次のようなものである。

性役割分業を転換し、男と女が協力して働き、生計を維持し、子どもを育てることが可能な社会へと変わる。また、会社に頼って生涯を送るのではなく、自分自身の生活を自律的に設計していくライフスタイルを確立していくようになる。その際、経済成長の波に乗って経済的・物質的に豊かになることを人生目標とするのではなく、自分らしい生き方、親密な人間関係、社会に役立つことなど、人生の質を大切にするライフスタイルへと転換していくであろう。しかし、受動的に待っているのでは、このような変化はスムーズには生じない。ライフスタイルの主体的な構築と、新しい社会の仕組み作りを積極的に進める必要がある。」P156-7

「企業経営が悪化するなかで、会社丸抱えの日本的企業経営は破綻した。それに伴って、職業と個人生活のバランスについて、改めて考え直す時期に来ている。家族的絆が切れている人々、社会的に孤立する人々が増加す

るのは、従来の図式を踏襲して人生を全うできなくなった表れてある。

社会のシステムが家族や地域社会といった共同体を機軸とするものから、「個人」を機軸とするものになっていくことを個人化という。高度の近代化を遂げ「先進社会」に到達した社会は、個人化社会という様相を持つようになる。ウルリッヒ・ベック (Beck, U.) は、個人があらゆることを「自己決定」するよう迫られ、また同時に「決定」のリスクを個人が引き受けるようになることが、個人化社会の1つの宿命だという。この時代に生きる人々は、個人と家族、個人と職場、個人と社会などの関係を、従来の慣習に頼ることができない。一人ひとりの個人が、どのように社会に存在し、どのように家族その他の社会関係を作るのかという「決断」を迫られるというのである。」 P157-8

この「個人化」のなかで、逆に匿名の「従来の慣習」やシステムに依存し、そこでの位置での自己評価によって「個人化」し、ライフスタイルを選択したつもりになっている人が、いかに多いことだろうか。私がいうストレーター型人生の人々の多くがそうになっている。ストレーター型から外れた時にやっと、「個人化」に対応する実際の動きをスタートさせると言ってよいかもしれない。

著者がいうように、「受動的に待っているのでは、このような変化はスムーズには生じない。ライフスタイルの主體的な構築と、新しい社会の仕組み作りを積極的に進める必要がある。」

だが、「新しい社会の仕組み作り」を、「人気者」の政治家が「何かしてくれる」ことに頼る傾向も強い。しかし、そうしたタイプの政治家が、結構古いスタイルのものを持ち出したり、以前の経済成長路線を復活させようとしたり、「権威的」な政治を展開したりして、人々の「主體的な構築」を抑え込む役割を果たすことになることが懸念される。

「主體的な構築」のためには、まずは身近なアソシエーションおよびコミュニティにおける共同的な取り組みを行いつつ、それが「新しい社会の仕組み作り」に結びつくように推進する必要があるだろう。

## 生き方の修正か構造的転換か 宮本本41最終回 (2012年4月22日)

第13章変わる生活の質・生活の価値、第14章人口減少社会における社会保障、第15章人口減少社会における社会政策 (いずれも岡部卓執筆) は、社会政策にかかわる。

今後の社会政策において、「今日の先進諸国に共通する主要な課題」として、「家族の変容」「国際化の進展」「人口の高齢化」「環境問題」P295~7の四つがあげられている。

これらの課題は、従来の枠組みの中で調整修正していけば可能なのか、それとも構造的転換が求められているのだろうか。

本書は、どちらに位置づくのだろうか。

「経済成長の維持のなか」とか、「技術的追求のなか」とかで対応すると言うのは前者であろうし、政府などが提起する計画や施策は、この方向が主軸だ。人口問題も、とくに少子化や高齢社会についての指摘は、そうした方向で使われることが多い。

しかし、来るべき変化、というよりもすでに現在進行中である変化は、社会の、個人の、人間関係の構造的な転換を求めるものだ、という方向で探求したい、というのが私の主張だ。人口問題についても、過剰時代に入って久しいのだから、量的な増加維持を求めるというのではなく、人々の生き方の転換の中で、生活の質の充実を図る事の方が、重要課題だと考える。

本書は、そういう私にたくさんの材料を提供してくれた。材料に出会うごとにコメントしてきたが、それらをもとにさらに思考と提案を深めていきたいと考えている。

## 新たな年齢区分「超高齢未来」を読む1 (2012年5月13日)

本の正式タイトルは、東京大学高齢社会総合研究機構「超高齢未来」2010年東洋経済新報社だ。

最近、「高齢社会」にかかわる書籍が多い。学術専門書も多いが、そのなかにあつて、本書は学術書というよりは、わかりやすい提案書といった雰囲気だ。いくつか注目点を紹介・コメントしよう。

「2030年には、65歳以上の高齢者が人口の3分の1を占めることとなりますが、その中でも急速に増加するのが75歳以上の人口です。これから20年で1000万人近くも増えると予測されています。

このことにより、わたしたちには「人生の第4期」という新たなライフステージが生まれることとなります。いままでは人生には「子ども」「大人」「高齢者」の3つの段階があるといわれていましたが、そのあとの人生、「人生の第4期」が誕生するわけです。」P68

興味深い指摘だ。無論、「高齢期」の後に、「第4期」を設定するよりは、もっと別の年齢区分を誕生させた方がいいのかもしれない。次のような事例も紹介されている。

「ニューヨーク警察の定年は45歳です。だから、はじめから2つキャリアをもつという人生設計になっているわけです。いまの若い人ははじめから2つ仕事しようと思っている人が増えてきており、いままでの人生と随分違うのです。」P205

この例も社会的な年齢区分への一つの提起になるだろうが、十数年前から私が提起している「人生後半期」という設定もその一つだ。

年齢区分というものには、社会的な共通認識としての「設定」、あるいは年金支給開始とか医療保険区分とかいった制度的設定もあるが、当人自身の自己認識を含めた個人によるものもある。そしてそれらは多様に分化してきている。

その点では、これまたここ10年ほど私が提起している「ストレーター秩序の崩壊」という問題が浮かび上がる。本書もその点にかかわりをもつ次のような問題提起をしている。



「子供時代を過ぎ、高校なり大学なりの教育期間が終わったら就職。結婚し、子どもを産んで、子どもを育て、定年退職をして、それで終わり……というようなレールが敷かれていたこれまでの時代と異なり、個人が自分の人生90年をどう設計して生きていくかが課題になってきたのです。」 P69

それは、社会的な標準レールの再設定が求められているというより以上に、個人が自分自身で設定し直していく課題に取り組む必要と、それを社会的に保障促進していくという双方にわたる課題があるというように、私はとらえたい。

その社会的な追求に関わって、次のような問題提起がなされる。

「社会のインフラについてみると、わたしたちが住んでいる街や社会システムはその多くが、若い世代が多く人口がピラミッド型をしていた時代につくられたものです。

したがって、このままではこれからの超高齢社会には対応できないでしょう。それは、交通機関、建物などハードなインフラだけではなく、医療制度や福祉、教育制度などソフトなものも含めての話です。」 P69～70

別の個所では、次のように指摘されている。

「これからの超高齢社会の設計においては、2つの視点が必要となるでしょう。

ひとつは衰えていく年齢を2年でも3年でも遅くすること、つまり健康寿命の延長です。

そしてもうひとつの重要な課題が、それでも衰えはいつか来るので、その期間をいかにして安心で快適に、そして尊厳をもって生きることができる生活環境を整えていくか、という視点です。介助を必要とする高齢者の生活を支援するための、社会のインフラ整備です。」 74～5

以上にみるように、本書の叙述では高齢期、ないしは「人生の第4期」に焦点が当てられている。

私は、こうした問題を考える際に、さらに、次のようなことを視野に入れて考える必要があると思う。それは、仮に人生を平均的にいって80～90歳だとすると、その「人生後半期」開始期である40～45歳まで視野を広げて考える必要があるということである。

そうすると、40代50代の多くの人々が会社などに勤務し、かつそこで先進国では例外的と言えるほどの長時間労働などストレスフルな働きようをしている人が多いという現実と直面する。そして、過重なストレスが関係する精神疾患あるいは生活習慣病に悩まされる40代50代の多さに注目しないわけにはいかない。そうしたことに起因して、70代に入る以前に早世する人の多さが、超高齢化時代のなかでかえって重大な問題として浮かび上がる。

そうした多難な40代50代をサバイバルできた人、あるいは多難さに出会わなかった人が、70代以降になって超高齢化し、個人としてあるいは社会として、その時期をどうするかというテーマに関わるようになるというべきかもしれない。

こうした認識をもつと、40代50代のありよう、とくに会社などでの働き方、企業社会のありようを視野に

いれて、「超高齢社会」を構想する課題が浮上すると、私は思う。

## 「生活モデルの揺らぎと生涯像の主題化」と人生創造 生活本7

(2012年9月2日)

「第10章 生活モデルの揺らぎと生涯像の主題化」は、私が10年来して追求してきた「人生創造」テーマと響き合って面白い。

「人口減少社会は、「近代の矛盾」や「未完の近代」としてではなく、近代を享受した結果として、近代の過剰な達成としてもたらされる環境である。21世紀の人口減少社会では、子供を産むこと、成長し働くこと、家族を形作ること、老いて生活すること、これらの人生途上の事柄が、これまでとは少し違った意味合いを帯びてくるのではないだろうか。」P185

「生き方を問題とすることは、近代日本の知識人が「人生論」として取り上げてきたテーマであり、これまでもなかったわけではない。けれども今日の問題状況は、大きく異なっている。生涯の諸局面のあり方が、一部の知識人だけでなく、すべての人々にとって課題となっているからである。少子高齢社会や人口減少社会という人口学的なレトリックで社会が表現され、政策課題が議論されるのも、その証左である。多くの人々にとって自分の生涯の諸局面が自明のものではなくなり、自らの生き方が生活課題になってくるのではないだろうか。」P186

「近代」のこれまでは、一部知識人の主題であり、大半の人々にとっては、生活課題でありながらも、「流れに沿う」「標準に従う」という形であったが、いまや「すべての人々にとって課題となっている」のだ。自らの生き方・人生を創造することになってきたのだ。そのことを、私は「<生き方>を創る」とか「人生創造」といつてきた。

かつ、そのことを個人の事業でありながらも、他の多くの人々とのつながりのなかで展開するものと考えてるがゆえに「<生き方>を創る教育」という著作とか「人生創造ワークショップ」とかなどで、読者・参加者とともに追求してきたのだ。だが、事実としてそこに踏み込んでいることを意識化することを避け、受身的に対応する人々は多い。とくに、この課題に直面している若者のなかに、このテーマに対する受動的傾向は根強い。そこに、私の「人生創造ワークショップ」展開の意義・役割があると考えている。

「すべての人々にとって課題となっている」ことが事実として取り組まれていることの意識化にかかわって、「第11章 産み育てることの変容と負荷」での次の叙述は興味深い。

「子供が生まれる、子供ができるという感覚が、なおどこかに残っているとはいえ、現在のわれわれの気持ちからすれば、子供を産む、子供をつくと表現する方が、はるかに実感に近いのではないだろうか。「できる」から「つくる」への感覚の変化は、産む側の意思や生き方の介在を強く印象づける。子供を産み育てることが、生涯における当然の出来事ではなくなり、何らかの形で選択される課題となることは、子供の誕生後においても、

親と子の関係にこれまでにない影響を及ぼすのではないか。」P195

「意識的な選択の介在は、親と子供の受け止め方に大きな相違をもたらす。意識的な選択は、もっぱら産む側のものであり、生まれる側はまったく関与できないからである。生まれる側は、自分の意思と関わりなく生まれてきたことをやがては受け容れねばならない。一方産む側は、自らの選択であるがゆえにその結果を無条件に受け容れねばならない。」p198

産む側の意識的選択として行ったことが、「生まれる側」を産む側の思い通りに育てることだと考えることに通じやすい。「生まれる側」は、「自分の意思」のレベルで「人生創造」を展開する課題に取り組まなくてはならないが、そこで、「産む側」は、思い通りに育てることではなく、「生まれる側」の人生創造を支える役割を担うという捉え方が重要だ。それを見落として、「生まれる側」は「産む側」の所有物だという感覚に陥らないようにしなくてはならない。

## ベック「第二の近代」「個人化」「自分自身の人生」 (2013年1月3日)

最近、ドイツのベックの「第二の近代」とか「個人化」などといった論に出会うことが多い。関心を持たされる議論が多いことは確かだ。その中に、「自分自身の人生」といった論があり、「生き方」とか「人生創造」とかについて、いろいろと語り書き、ワークショップなどの形で実践してきた私としても、大いに関心を寄せて検討を始めているところだ。

そのことについて詳しく論を展開しているらしい2002年刊行の「個人化」(ウルリッヒとベルンシュハイムの両ベックの共著)は、和訳されていない。そこで、その中味を紹介しつつ論じている武川正吾「グローバル化と個人化」(盛山和夫・上野千鶴子・武川正吾編『公共社会学2 少子高齢社会の公共性』2012年東京大学出版会)を参照したい。

まずは、その一部を紹介しておこう。

「グローバル化と個人化との関係を考えるうえで参考になるのは、ウルリッヒ・ベックの個人化に関する議論である。彼は、彼のいわゆる「第2の近代」のなかで必然化する「自分自身の人生」(a life of one's own)という概念について、その特徴を15のテーゼにまとめている(中略)

現在の社会は高度に分化しているため、個人は部分的にしか社会に統合されない。その結果、個人はもはや近代以前の社会におけるような伝統に従った生き方をすることもできなければ、「第1の近代」におけるような階級やエスニシティに準拠した生き方もできない。このため個人は「自分自身の人生」を選択し、自分自身の生き方を探し出さなければならなくなる。「自分自身の人生」が普及してくる過程を「個人化」と呼ぶならば、「第2の近代」では個人化の進行が不可避である。

ベックが15のテーゼのなかで述べている論点は多岐に及ぶが、そのなかで注目すべき点は3つである。

第1は、個人化とネオリベリズムとの親和性である（中略）。自分自身の人生を生きるということは、個人が自分の伝記を選ぶことができるということであり、能動性を強いられるということでもある。そこでは自己責任という考え方が強調され、人生において失敗しても、それは個人の責任であって社会の責任ではないということになる。人生のできごとは個人の外側の要因に帰せられるのではなくて、個人の内側の「決定、非決定、不作為、能力、無能力、業績、妥協、挫折」といった要因に帰せられることになる（もちろんそれは虚偽意識であるかもしれない）。このため「自分自身の人生」について語るということは「自分自身の失敗」（your own failure）について語るということでもある。これはネオリベリズムの考え方につながる。

（中略）

第2の論点は、グローバル化が各国における伝統の解体と再編を進めるという点である。ベックによれば「自分自身の人生」とは「脱伝統化された人生」である（中略）。しかしこれは伝統が廃止されることを意味するのではなくて、個人が、新しく作られた伝統も含めて様々な伝統やその混成体の間での選択を強いられることを意味する。しかもこうした伝統の解体と再編は、国籍を超えた性格を帯びる。（中略）グローバル化した世界では、（中略）個人は複数の伝統や文化の間を右往左往せざるをえなくなる。もはやモデルとなるべき生き方が存在しないため、「自分自身の人生」は「実験的な人生」（experimental life）とならざるをえない。要するに、グローバル化は、各国における単一の伝統や文化を破壊するために個人は「自分自身の人生」を生きることを強いられる、すなわち、個人化が余儀なくされるということになる。

第3の論点は、「自分自身の人生」が「反省的な人生」（reflexive life）であるという点と関連する（中略）。グローバル化は前近代的な伝統を解体するだけでなく、「第1の近代」すなわち産業社会におけるカテゴリーの多くを無意味化する。例えば、グローバル化された世界のなかで、一国単位の階級はもはや個人化され重要なカテゴリーではなくなる。広大な低賃金のプールが国外に控えていて、しかも資本（そして労働）の国境を越えた移動が自由になっているという状況の下では、団体交渉をつうじた集团的労使関係を維持することはもはや困難である。その意味で（少なくとも対自的な）階級は意味を失う。エスニシティ、核家族、伝統的女性役割についても同様である。これらは「ゾンビ・カテゴリー」（ベック）としてお払い箱になるために、これらに準拠した生き方も閉ざされる。彼によれば、社会のレベルで「社会的反省——矛盾する情報の処理、対話、交渉、妥協」が必要になると同様、個人のレベルでも自分自身の反省的な人生が必要となってくるのである。要するに、グローバル化は、産業社会のカテゴリーを解体することによっても、個人化を促進する。」

P 22～25

同意できる論、同意を留保したい論、異議がある論などいろいろだが、私の思考に強い刺激を与える叙述である。そこで、まずは以上の紹介に留意しつつ、私が今後考えていくうえでポイントになりそうな点を並べておこう。

1) 個人化が、時代的趨勢であるとしても、その個人化がいかなる方向に向くのか、向けていくのかによって、

大きな差異がある。

2) 個人化が、時代や社会の趨勢であったとしても、それは個人のレベルで具体化される。その個人レベルでの具体化にかかわって、どういう課題方法方向を提示したらよいか。

3) 個人化ではあるが、それはイコール孤立化ではなく、多様なつながりのなかで展開される。そのつながりをどのように構想していくのか。引用のなかの第三の論点がかかわる。

4) 個人化は、「伝統の解体と再編」にかかわるという第二の論点をどのように展開するのか。

5) 強い個人になることを志向するのではなく、弱い面を持っていることを自覚し受け入れ、それを他者・自然とのつながり・共同でカバーしていく。

## 「「する」ではなく「いる」と「なる」 上野圭一・辻信一「スロームディスン」の示唆

(2013年3月19日)

最近、上野圭一・辻信一「スロームディスン」(大月書店2009年)という本を読んだ。共感できるところが多い本だ。

この本には、「「する」ではなく「いる」という一節がある。そこには、次のようなことが書かれている。

「ぼくたちは今、「する」ことに取り憑かれた時代に生きているのではないのでしょうか。「する」ことに取り憑かれているとはどういうことか。人間の価値を、いかにうまく「する」かで決めるということです。現代社会のキーワードである競争や効率や生産性も、いかによりよく「する」か、より早く「する」か、にかかっています。なぜより早く「する」ことが重要かといえば、より多く「する」必要があり、より多くの結果を出さなければならぬから。」P127-8

「人間の存在はやっぱり「いる」なんです。ぼくらは動物ですし、「する」ことは一種の宿命のようなもので、いつも何かしていなかったら生きていけない存在なわけです。さらにいえば、この「いる」と「する」は人間の本質的な両面で、要は、その間にどうバランスをとるか、なんだと思います。さっきも言ったように、病や老いとは「することができなくなること」だと定義できる。病が癒えると、また「することができる」状態にもどっていくのですが、老いは不可逆的にだんだんできなくなっていって、「する」が減っていって、最後に死を迎える。死とはまったく「する」ことができない、いわば「する」ゼロ状態のことですよね。「する」に取り憑かれた社会、「する」ことだけで人の価値を決める社会——ぼくは「するする社会」と呼んでいるんですが——では、「病なんてさっさと治して、またできる(する)ようになれ」ということを要求されますし、老いに対しても、「え、そんなことさえできないの?」というぐあい、否定的にとらえるしかない。そして死も完全に無能力な状態として否定的にとらえれば、無価値、無意味ですよ。」P128-9

「どうして「する」に取り憑かれる人ばかり出てくるのでしょうかね。それがぼくにはわからない。その仕組みから降りることは、誰にでもできると思うんです。事実、やってきた人もたくさんいます。ぼくも降りてきた。」

P130

「健全であり健常であり健康であるということがかえって、ぼくたちを逆に「する」ことに取り憑かれやすく、システムにとりこまれやすくしているのかもしれない。若いときは、寝る時間も惜しんでバリバリ働いたりして、いくらでも、何でもできるような気になっている人が多いじゃないですか。子どもに対しても、「強くあれ」、「がんばれ」「なんにでも挑戦しろ」、「あきらめずにやりつづける」というふうにはずっと駆り立てていく。でも病気になると、「ちょっと待てよ」とふと我に返るわけです。病気的时候は「する」ことが制限されて、「いる」しかなくなる。「人間は何のために生きているんだっけ」と思わされる瞬間です。あるいは、自分の子どもがかなり重い病気や怪我になったとき、「この子が生きてさえいてくれれば、他は何も望まない」と思えたりする。」 P131

私は、こうした主張におおいに共感する。「する」は確かに必要ではあるが、現在は、「する」過剰であり、「する」が「いる」を過剰支配しているように思われる。働き過ぎ、ワーカーホリックはそのあらわれだろう。その結果、「いる」の価値が過剰に低められているのではなかろうか。

ところで、「する」には、目標や計画を立てて、目標実現に向けて作業過程を綿密に管理して展開するものが多いが、それだけではない。そうした目標や計画なしに「する」ものが結構ありはしないだろうか。流れの中で、いろいろなモノ・コト・ヒトに出会いながら、その場の状況のなかで「する」ものが色々とある。その際には、思いもしなかった出会い発見創造があるだろう。そうしたものが蓄積していく中で、「なる」という形で、なにかが生まれる、できてしまう、という事が結構ある。

計画的な「する」ばかりしていると、想定外にできた「なる」モノ・コト・ヒトの豊かさを見失う事があるだろう。その意味で、「なる」「なってしまう」というものも大切にしたい。